



叫び

『叫び』合本 1997 - 2002

『叫び』シリーズの合本によせて

「荒れ野で叫ぶ者の声がする」(ルカ3:4) 毎年、待降節になると教会の典礼の中に響き渡る洗礼者ヨハネの叫び声です。その叫びは、決して犬の遠吠えのように夜の闇に響き渡り、空しく消え去る叫びではありません。人々の心を揺り動かし、行動に駆り立て、人生の歩みを転換させる叫び声です。当時の群集や徴税人や兵士は荒れ野の叫びに共鳴し、「では、私たちはどうしたら良いのですか」と問い掛けながら、自らの生き方の改善を模索し始めました。(ルカ3:10-14)

現代の荒れ野にも、たくさんの叫び声が響いています。小冊子『叫び』シリーズは、ほんのささやかではありますが、それらの叫び声に耳を傾けながら、ひとりでも多くの人々の心に、その叫び声をお届けしたいと願い、6回のシリーズを重ねて来ました。小冊子をお読み下さった方々からは、毎年、たくさんの貴重なご意見を戴いています。その反響の大きさに、スタッフ一同心を込めて感謝申し上げながら、小冊子『叫び』の持つ意義と役割を常に再確認させて頂いています。その意義と役割を更に進展させたいと願い、既刊の小冊子を、多少の修正を加えて、合本として再発行することになりました。そのきっかけは、2001年度の「社会福祉委員会・カリタスジャパン」教区担当者全国会議の決議に基づくものです。「社会福祉委員会・カリタスジャパン」教区担当者の方々の願いは、『叫び』の合本をたくさんの方々に活用して頂いて、それぞれの福音的生き方の教材に、或いは共同体造りの参考資料に、或いは種々の研修会、勉強会、練成会などのテキストにご利用下さることを希望してのことです。『叫び』の合本をお気軽に、かつ頻繁にご利用頂きながら、身近な叫びや声無き声を聞き分ける鋭敏な聴覚を体得する一助にさせていただければと願っています。

ところで、私たちの周囲には騒音や雑音と呼ばれるたくさんの音も響き渡っています。声と音とは異なります、声が単なる音として認知されるだけでは、その声は力を発揮できません。声にことばが加わる時、人を動かし、人を活かす力になります。荒野の叫び声も、その誕生から死に至るまで終始一貫して、受肉した永遠のいのちのみことばに結ばれていました。叫びの聲が永遠のみことばに結ばれてひとつになるときに、いのちの源に活かされるようになります。そして、人の心を揺り動かし、行動に駆り立て、人生を生気に満ち溢れるものに変えていきます。逆に、永遠のいのちのみことばから切り離されて、愛の極みを失うときに、鳴る銅鑼や響くシンバルのような騒々しい雑音に過ぎなくなってしまうます。

願わくは、『叫び』の合本を通して、ひとりでも多くの方々が、人々の叫びに共鳴しているキリストのみことばに耳を傾けることができますように祈念しつつ。

カトリック大分教区司教 ドミニコ宮原良治

『叫び』合本 1997年—2002年 総目次

1997年 叫び

はじめに

み言葉から『叫び』をまなぶ	10
1 家庭内暴力 母親の愛情と子どもの実感	18
2 アルコール依存症 一緒に歩いて、いてくれたのが神様だった	22
3 知的障害者 私たちも人間だ	27
4 自閉症 知的障害者の親は彼らの代弁者	32
5 路上生活者 教会は底辺の弱者から遠い	37
6 滞日・日系外国人 人間として暮らしたい	42
あとがき	46

1998年 叫び

はじめに

見捨てられていた私をうけいれてくれた	51
1 アルツハイマー型痴ほう症 痴ほう症の夫とともに	53
2 離婚 両親との同居をくりかえして	57
3 アダルトチルドレン 母に愛されたかった	61
4 聾啞者 私たちと勇気をもって、かかわってほしい	65
5 薬物依存症 薬を使わない、新しい生き方に挑戦する	69
6 同性愛者 ありのままの自分でいたい	73
7 自己破産者 働いても、働いても…	78
あとがき	82

1999年 叫び

はじめに

「叫び声を聞き、その痛みを知った」	87
1 虐待される妻（バタードウイフ） 妻としての人格を踏みにじられて	88
2 離婚 73歳の男を解放させない離婚	92
3 中途失明者 すべてを失った者の叫び	97
4 神戸被災の高齢者 腹が立つ、政府や役所の非情さ	101
5 重度身体障害者 40年間、家で寝たきりの生活	106
6 中高年の死 バブル経済破綻の犠牲者が...	110
7 戦争体験者 癒されることのない戦争の記憶	114
編集後記	119

2000年 叫びにこたえて

- 1 日本の教会の新しい「うねり」に沿って ……125
横浜教区担当司祭 古川 勉
- 2 “叫び” から「共に歩む」へ ……127
京都教区担当司祭 森田 直樹
- 3 痛みを共有する人たちの“叫び”
『叫び』に寄せられた“叫び” ……131
「社会福祉委員会・カリタスジャパン」全国教区担当者会（編）
- 4 「教会全体が自分自身を整えてほしい」
というアンケートにこたえて ……143
新潟教区担当司祭 町田 正

資 料

- A 1997年『叫びⅠ』編集担当者座談会
“なぜ『叫び』が反響を呼んだか” ……146
(カトリック新聞1997年6月29日号掲載)
- B 1999年『叫びⅢ』シリーズを読んで
わたしの“叫び”、隣人の“叫び” ……155
(カトリック新聞1999年6月27日号掲載)

2001年 叫びとは何か

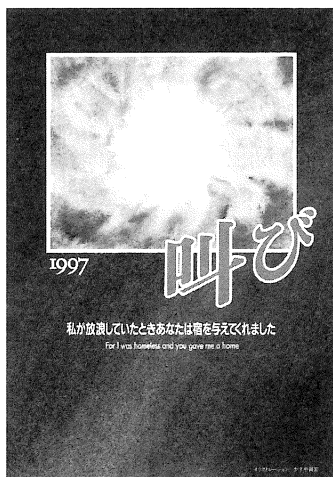
はじめに

- “叫び” …聖書から ……………160
- 1 精神を病んで =回答者の取材記=
私は、お前をこの世で幸せにするとは、言わない ……………167
- 2 閉ざされた親子関係 =アンケート補足〈自分史〉=
虐待・50年の謎 ……………171
- 3 教会の信徒として =アンケートを読んで=
自分らしく生きる ……………175
- 4 生活保護をうけても =回答者の取材記=
神とともにいて ……………178
- 5 生活からの“叫び” =アンケート引用=
許せない… ……………181
- 6 すべてにおいて、すべてとなる教会 =アンケートの感想=
共 に ……………186

2002年 叫びからまなぶ

はじめに

共感の場…教会のオアシス	193
1 ころを病んで 閉ざされて、のたうちまわり… “叫び”	197
2 問われる親子 加害者となってしまう親たち	200
3 知的障害者の親 何で自分たちに、この子は不憫だ	203
4 高齢社会 不安に包まれて	205
5 揺らぐ家族 愛が破綻したとき	207
6 肉親の死 死 別	211
7 “叫び” あれこれ 毎日を生きていくとは	213
8 教会 イエス・キリストの近くにいるさまざまな 貧しい人々の姿はどこに	216



私が放浪していたときあなたは宿を与えてくれました

For I was homeless and you gave me a home

目 次

はじめに	
み言葉から『叫び』をまなぶ	10
1 家庭内暴力	
母親の愛情と子どもの実感	18
2 アルコール依存症	
一緒に歩いて、いてくれたのが神様だった	22
3 知的障害者	
私たちも人間だ	27
4 自閉症	
知的障害者の親は彼らの代弁者	32
5 路上生活者	
教会は底辺の弱者から遠い	37
6 滞日・日系外国人	
人間として暮らしたい	42
あとがき	46

み言葉から『叫び』をまなぶ

大阪教区担当司祭 後藤 進

日本カトリック司教団は、1894年『日本の教会の基本方針と優先課題』を発表し、その中で、「今日の日本の社会や文化の中には、すでに福音的な芽生えがあるが、多くの人々を弱い立場に追いやり、抑圧、差別している。わたしたちカトリック教会の全員が、このような“小さな人々”とともに、キリストの力でこの芽生えを育て、すべての人を大切にする社会と文化に変革する福音の担い手になる」ことを基本方針として打ち出しました。

1987年開かれた第1回福音宣教推進全国会議では「人々と苦しみを分かち合いながら、開かれた教会づくりに励む」ことが決議されました。

日本のカトリック教会は「日本の社会とともに歩む」「開かれた教会」を目指して、新しい歩みを始めました。わたしたちは日本の社会に目を向け、“小さくされた人々”の現実を理解し、“小さな人々”と連帯し、キリスト者としてなすべきことを実行することが求められています。

四旬節のテーマ

2000年の特別の大聖年に向けて、今年はその準備の3年間の初年度に当たります。教皇ヨハネ・パウロⅡ世は今年の四旬節のテーマとして『さあ、祝福された人たち... わたしが旅をしていたときに宿を貸してくれたからだ』（マタイ25：34-36）を選ばれ、今年1997年を神のみ言葉であるキリストに捧げておられます。なぜならキリストへの信仰には具体的な証しが必要であり、行いのない信仰は死んだもので

あるからです。

教皇は四旬節メッセージの中で、イスラエルの40年の約束の地への荒野の旅を思い起こされ、安全ということのないテント生活と食料を欠いた旅に、たとえ奴隷の食事という最低のものであったとしても、それが確保されていたエジプトへ帰る誘惑にしばしば陥りながらも、神ご自身によって危険から守られ、水も食べ物も提供される全面的な神への依存の体験を通して、奴隷性から解放され、物質主義という偶像からも解放されたと指摘されます。

次いで家というものの大切さ、そこで営まれる家庭生活と家族の絆の大切さを強調されます。なぜならそこで子供たちは基本的な倫理と精神的な価値を学んで、未来の市民へと育つのですし、年寄りや病気の人を支えること、苦しい時や病気の時に互いに愛しあい支え合うことをするのです。そして家と家庭を失った人たち、とりわけ難民、戦争や自然災害の犠牲者、経済的理由から移住せざるを得ない難民たちに眼を注がれ、このような人々の苦しさや困難さがアルコール依存、虐待暴力、売春、薬物依存などの悲劇の原因になっていると指摘されます。

最後に、困難にある人々を助けて物質的に精神的に困難を分かち合うよう勧められ、「人の子には枕するところもない」(マタイ8:20)といわれたキリストの望みは父なる神へ全面的に自己を開放することであり、わたしたちにおいてもこの世のものを所有することはこの自己開放を妨げ、人の心の中ではこの世的現実が神にとって代わる危険性が常にあることに注意を喚起されています。

み言葉から学ぶ

この小冊子は『叫び』というタイトルが付けられています。叫びは苦しさや困難のさなかにいる人の叫びです。集団や社会から弱い立場に追いやられ、抑圧され、差別されている“小さくされた人々”の叫びです。わたしたちがこの人々の現実を理解し、この人々に連帯し、

キリスト者としてなすべきことを実行するには、聖霊のみ言葉に立ち返る以外に方法はありませぬ。それで聖書の中での『叫び』を取り上げ、神はその叫びになにをなされたか、神は社会や人々に“小さな人々”に何をなすように教えているか、さらに人となった神の子イエスはどう行動され、何を教えられたかを学びましょう。

旧約聖書

主はいわれた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出す」(出エジプト 3 : 7-8)

エジプトで奴隷となったイスラエルの民。強制労働の監督がおり、重労働を課し、虐待した。町の建設、粘土こね、れんが焼き、あらゆる農作業などの重労働に生活は脅かされた。(出エジプト 1 : 11-14) しかもそこから逃れる術がない。重労働の苦しさの叫び、人間性が破壊されてしまう叫び、神に助けを求める叫び。逃れようのない時、叫びは悲痛の叫びとなる。神はその叫びを聞かざるを得ない。しかも神の苦しみの見方、叫び声の聞き方は痛みを知る者の見方であり、聞き方なのだ。痛みを真実知るがゆえの苦しむ人々への連帯がある。それゆえ、この人々に連帯して、この人々が立ち上がるのを助けようと神の力が発揮される。イスラエルの民は奴隷から解放された。

「…寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く。そしてわたしの怒りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。あなたたちの妻は寡婦となり、子供らは、孤児となる。もし、あなたがわたしの民、あなたと共にい

る貧しい者に金を貸す場合は、彼に対して高利貸しのようにしてはならない。彼から利子をとってはならない。もし、隣人の上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。なぜなら、それは彼の唯一の衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまって寝ることができるだろうか。もし、彼がわたしに向かって叫ぶならば、わたしは聞く。私は憐れみ深いからである」(出エジプト22：20-26)

これは奴隷から解放されたイスラエルの民への神の要求であり、教えである。エジプトで寄留者であり、奴隷であった民は、そのことの意味する苦しみと“小さな人々”の叫びが分かるはずであり、この人々に連帯できるはずである。“小さな人々”の立ち上がりに手を差し伸べることができるはずである。神は、普通の社会で寄留者（よそ者や外国人）、寡婦や孤児がどんな状態に追いやられて行くかをよくご存知である。そこでは差別と抑圧と貧しさがある。彼らはそこで奴隷状態に置かれている。神は彼らの叫びに心を痛められる。それゆえ、奴隷から解放された民のこれからつくる社会、国では、差別と抑圧と貧しさの構造、すなわち奴隷状態を出現させてはならないという神の要求なのである。

同様の主旨の教えを安息年、安息日の教え(出エジプト23：10-12) ヨベルの年の規定(レビ25章) 負債の免除(申命15：1-11) 奴隷の解放(申命15：12-15) 正しい裁判(申命16：18-20) 同胞を助けること(申命22：1-4) 逃亡奴隷の保護(申命23：16-17) 利子(申命23：20-21) 人の畑のもの(申命23：25-26) 人道上の規定(申命24：10-15、17-22)などの個所に見出すことができる。

これらの教えは詰まるところ、レビ記19章18節の「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」という教えに集約されたといえるのである。しかもイエス時代と同じく、「隣人」を狭く解釈する恐れがあっ

たので、レビ記19章33-34節には「寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である」の言葉が語られているのである。

このような神の教えと要求は、一時期は尊重され、実行されたと考えられる。やがて物質的な豊かさと繁栄を求め始めると、神の教えは忘れ去られ、ないがしろにされた。それはそのまま豊かさという神を礼拝する偶像崇拜であったし、実際に、豊かさを約束する異教の神が礼拝された。こうして国と社会には、差別と抑圧と貧しさの構造、あの奴隷状態が現出してしまったのである。次々と神に召し出され、神の言葉を民に告げるべく派遣された予言者たちの非難と改善要求は、偶像崇拜と悪に満ちた社会構造に向けられたのは当然であった。改善がなされない時、エジプトが神の手で打たれたように、約束の地の先住民族がイスラエルの民に滅ぼされ、追い出されたように、神を信ずるといいながら、信仰の行いのない民が神の手で打たれ、国を失い、追い出されたのは当然の成り行きであった。それでこそ神の正義と公平さが成り立っているのである。彼らは再び奴隷となった苦しさの中から、深刻な反省と罪意識の中で、神の教えの絶対的大切さ、重要性を学びとって、帰還が許されたのである。

新約聖書

このように聖書を見てくると、イエスの時代に、またしても立ち現れている、差別と抑圧と貧しさの社会構造の中であって、父である神の御心を、神の子として徹底して実践しようとしたイエスが、父である神と同じく、差別と抑圧を受けている人々、貧しさのなかに放置されている人々に心を寄せ、その叫びに耳を傾けられ、「小さな人々」

に連帯して、彼らの立ち上がりに手を差し伸べられたのは当然だったといえる。障害者、病人、らい病人、汚れた霊に取りつかれた人、物乞いをしている人、罪の女、徴税人、サマリア人たち、総じて罪人とされている人々。彼らこそは、自分たち自身の罪深さを認めつつ、律法学者やファリサイ派の人たちの差別と抑圧の教えによって、差別され、抑圧され、自分たちは神からも見放されていると思ひ込まされていた、その実、破壊されてしまう人間性の悲痛な苦しみの叫びをあげていた人々だ。人間性を破壊されてしまったのが、汚れた霊につかれた人々であったといえる。イエスの癒しと愛は、彼らに人間性の回復と神の愛を実感させた。奴隷状態から解放されたのである。福音書のどのページからでも、是非、イエスと彼らの物語を読み味わって欲しいものです。

主の霊がわたしの上におられる。

貧しい人に福音を告げ知らせるために、

主がわたしに油を注がれたからである。

主がわたしを遣わされたのは、

捕らわれている人に解放を、

眼の見えない人に視力回復を告げ、

圧迫されている人を自由にし、

主の恵みの年を告げるためである。(ルカ4：18-19)

神の国の訪れを知らせる福音の告知を、わたしたちは死後の天国の話や霊的な領域のことだけのことと矮小化してはならない。神の国は社会的次元と霊的次元を併せ持っているのである。このことは父である神とイエスに倣って、人間性の破壊に抵抗し、奴隷状態からの人々の解放（神の成される業）のために、“小さな人々”に手を差し伸べる、わたしたちの「いわゆる」福祉の業、愛の行為に踏み出そうとするときに、よくよく分かっておかなければならないことなのである。

「人は新たに（上から）生まれなければ、神の国を見ることができない」（ヨハネ3：3）のだから、わたしたち自身、神とイエスの力によって、人間性の破壊から救われ、奴隷状態から解放されて、真実の福祉と愛の行為を行えるということなのである。それはわたしたちが、父である神と神の子イエスの霊である真理の霊（ヨハネ16：13）に生かされているということです。ゆっくりとヨハネ9章全体（生まれつきの盲人の癒しの物語）を味わってみましょう。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。（ヨハネ1：14）…わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。（ヨハネ1：16-18）

人となった神イエス・キリストに、恵みと真理とがある。すると、わたしたちにとってイエス・キリストの一つひとつの行いと教えは、真実の福祉と真実の愛の行為の原点であり、現場である。それゆえ、先に述べたように一つひとつの福音の個所を読み、そこで見、聞き、味わうことが大切なのである。

イエスの教えについては、山上の説教（マタイ5-7章） 種を蒔く人の譬え（マタイ13章） 仲間を救さない家来の譬え（マタイ18：21-35） 金持ちの青年（マタイ19：16-30） ぶどう園の労働者（マタイ20：1-16） 二人の息子（マタイ21：28-32） ぶどう園と農夫（マタイ20：33-46） 婚宴の譬え（マタイ22：1-4） 皇帝への税金（マタイ22：15-22） 最も重要な掟（マタイ22：34-40） 律法学者とファリサイ派の人々への非難（マタイ23：1-36） マタ

イ25章に展開される十人の乙女、タラントン、すべての民族への裁き、善いサマリア人（ルカ10：25-37） 放蕩息子（ルカ15：11-32） 金持ちとラザロ（ルカ16：19-31） さらに自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい（ルカ9：21-26） 新しい掟（ヨハネ13：34） 一粒の麦（ヨハネ12：23-26） 友のために命を捨てる（ヨハネ15：12-17） などたくさんの個所を挙げるができる。

イエスにとってその愛、真理、生命の完成は、十字架（死）と復活にあった。それは父である神から与えられる栄光である。（ヨハネ12：23-25, 13：1, 13：31-32） そうだとすれば、わたしたちの愛と福祉の行為の目指す終局も、自分を捨て、自分の十字架をとって、隣人を愛し、友に生命を与え尽くすことにしか、生命の完成と成就是不ない。まことにイエス・キリストこそ、わたしたちの師、生命、真理、道なのである。そこに、神とイエスから与えられるわたしたちの復活の栄光（永遠の生命）がある。まことにそれは、この世の与える栄光とは異なり、世界の創造の前から、神の準備して下さった、神の子の資格を受けたイエスの弟子の受ける栄光なのである。

まことに、わたしたちには不可能と思えようとも、助け主である聖霊が、わたしたちの愛を生かしてくださることを信じて、共に歩もうではないか。

母親の愛情と子どもの実感

M子は、私たち夫婦のほかに、私の祖母と両親、弟夫婦という、大人7人の家庭環境の中で、私たちの一人娘として生まれたんです。ひいおばあちゃん、おばあちゃん、そして母親の私、その3人が、一つ事が起きれば、三人三様の意見をいう、誰が育てているかわからない状態の中で育ちました。

私がYMCAで働いていた関係で、家を知的障害者の人たちの集まりの場所に開放していました。特にクリスマスなどにはパーティーのプログラムを作ったり、その人たちと食事をし、手作業をし、また旅行もしました。その時は、知的障害者の人たちとその子どもたち、一般人、地域の人たちが大勢出入りして、私の周りに集まっていました。私はその人たちとのかかわりをとても大切にしていました。

「おじいちゃん、ごめんなさい」

そのようなわけで、主に、私の両親が一番多くM子と接していました。私の父は本当の父ではなかったんです。私が21歳の時、それを知られました。実の父は、私が5歳の時に亡くなって、昔は長男が亡くなると、その嫁は弟と結婚するというのが、よくあって、私は、叔父である父の弟に育てられました。私はそれを聞かされても、特にショックではなく、これまで私を育ててくれたことにむしろ感謝できました。

その父がM子をととても可愛がってくれて、M子もおじいちゃんの愛にこたえていました。

M子が7歳の時、おじいちゃんが喉頭癌であることがわかりました。それも末期の癌だったんです。そう、あの晩、おじいちゃんが晩酌をしているところに、M子行行って、いつものようにおじいちゃんの背

中に寄りかかったの。そしたら、よほど苦しかったらしく、「やめろ！」って、どなったの。そのうえ、おじいちゃんの声がその時から出なくなってしまったの。

M子にとっては叱られたということがショックだったうえに、自分のせいでおじいちゃんがそうなったと思って、傷ついて、その頃から、夜、暴れるようになったの。

夜に暴れるものだから、朝になって学校に行けないという、昼夜が逆になるという日が始まったんです。M子には直感的におじいちゃんが死ぬって、わかってましたから、ますます変になっちゃったんです。

お葬式がすむと、いっそうひどくなりました。学校に行けない状態が、さらに続いたんですが、「成績はどうでもいいです」って、私は先生にいったの。この子は新聞が読めて、計算ができて、頭は悪くないからっていうふうに思っていたので、「20歳になるまでになんとかかなればいいわ」と考えたんです。私はある意味でラッキーでした。子どもの偏差値とか、学校の成績とか、考える必要がなかったんです。「うちのうち」ってそのころから、そのように考える訓練ができたの。「人は人」だから、一切、他人と比較しないっていうこともね、もう肝に銘じて…ものすごい自己訓練になりました。

「どうして私ばかり責めるの」

私は父が亡くなるときに、もし父が快くなるのなら私が車で病院に送り迎えをしようと思って、車の運転を習いだしたんですよ。それがなんとM子のために毎晩乗ることになったんです。M子は明日は学校に行きたくないと思いつつ、そういうやるせない気持ちを車に乗ってまぎらわせたんです。毎晩、12時とか1時とかよ。それから、車の中で殺されそうになったこともありました。ほんとに包丁を喉まで…。テレビのドラマで観てたけど役に立ったわね。ジーッと顔を見るの。一言もいわないで。

それからね、うちは、家庭内別居なの。なぜかっていうと夫は「こ

んなにお母さんが受けとめてくれるのになぜ暴れるの」って、どうしてもいってしまう、するとM子が「どうして私ばかり責めるの」って、ますます暴れるから、夫とは別の部屋で暮らしたの。

「暗いトンネルにはいっちゃう」

どういう状態の時暴れるのか原因は分からない、突然なるんですよ。私に命令して、顔付きなんか、ジキルとハイドみたいになる。階段からいろんなもの投げ落としたり、レコードやスピーカー壊したり、ふすまを芯までこわしたり、家中めちゃくちゃ…。おばあちゃんは「警察、呼びなさい」って何度もいいましたよ。でもね、治まった時、ものすごい後悔するの、かわいそうなくらい、だから怒らないの。

小学校の3、4年生位かな、自分の心が「突然、明るいほうと暗いほうの二つのトンネルに分かれて、自分は明るいほうに行こうと思うんだけど、引きずられるように暗いほうに行ってしまう」というふうに表現したの。一番、本人が苦しい。したくないのにやってしまう。それで、この子を責めちゃいけない、家の中で異常だけど、外に出た時はみんなの評価が良いの。「これ病気じゃないのよ」そう言って、毎晩、過ごしてきたんです。

小学校の1年生位に始まって、ほとんど毎晩で一番ひどい頃は6年生位から中学2年頃まで、それからだんだん治まってきたんですね。暴れたあと、硬直することがあるの。その状態でどこでも寝ちゃうの。それを二階まで運ぶの。車の中でほっとしたら、そこで寝ちゃうの。それをまた運ぶの、二階まで。

「お母さんを独り占めしたかった」

私はM子が小学校3年の時に完全に仕事を辞めたんです。高校まで毎日学校へ送り迎えしてた。「早くっ」ていうことはいわないの。車の中でエンジンかけて、何10分でも待ってる。車の中で制服に着替えるの。いやなの、学校に行くの。でも学校へ行くとみんなが迎えてくれるからあの時行けたの。高校3年の時に男女一緒のクラスになって、1人の男の子に好かれて、その子がずいぶん助けてくれたの。「新宿

で待ってるから」って電話くれるから学校へ行かざるをえないんです。

21歳で大学生になって、結局、父親と同じ哲学の道を選んで、ようやく何か、いまの状態につながってきました。そのプロセスの中で、一番それを支えてくれたのは夫でした。どんなときにも祈ったんです。

私ね、自分がM子のことを人の目から、隠さなかったのが一番良かったって思う。それと幸い、知的障害の人たちと仕事を何十年もしてきたから、“待つ”という事ができたんです。あの人たちとのつきあい、今でもとても大事にしています。

でも、娘が最近いうの、「私はたった一人でお母さんを独り占めしたかった。みんながお母さんの所にやってきて、お母さんの愛情をうばっていく。それが私には嫌だった」

無条件で無償の愛がどんなに大事か、私自身知識で持っているんだけど、どんなに愛情があっても、子どもがそれを実感しないかぎり、意味がないわけでしょ。そこら辺に原因があったんじゃないかなと思います。

子どもはもともと神様からユニークなものとして生み出されたものなのに、親は子どもを自分がつくったもののように思いちがいで、自分の価値観を押しつけようとするでしょ。それを7人もの大人たちがそれぞれの価値観をたったひとりの子どもに押しつけようとしたのだから、子どもは爆発しなければ、押しつぶされてしまったのよ。

M子が最近いうのよ、「私は、幸い、はねのける力が強かった。だから今の私があるの」

(取材班：粟津敬子・高崎京子)

2 アルコール依存症

一緒に歩いて、いてくれたのが神様だった

東京近郊にあるS研究所にN子さん(27)を訪ねた帰り際、息子を保育園に迎えに行くという彼女の車に同乗させていただいた。ハンドルを握るN子さんの横顔が美しい。ママを見つけて、走り出てきたR君(3)を見つめる彼女の柔らかい瞳は母親の落ち着きを感じさせている。

“淋しさ”を共有して

N子さんが小学1年の時、4つ違いの妹を母親の代わりに保育園に迎えに行ったことがあった。その日は両親の帰りが遅くなって、日が暮れるにつれて、不安がつわり、妹の手をつないで家の前に立つとN子さんは道路へ向かって火がついたように泣き出した。「妹は泣いていないのに、私は泣いて声が枯れそうになったのを覚えています」

父親は東北地方の小学校校長で、母親は教頭、そして両親の祖父たちも校長職にあったという家庭に育った。

「父が10歳の時に、祖母が自殺してるんです。『淋しかったよ』と父がいていたような気がするけど、それ以上聞くこともありませんでした」

共働きの家庭の中で、父親はいつも妻をいたわり大事にして、「とても仲の良い夫婦でしたし、私たちの意志を尊重してくれました」

やさしくて誇りにすら思う父親の、時折、見せる不安と淋しさを漠然と感じさせる一面が、何か自分に似ているような気がしてならなかった。

「小学校5、6年の頃、父が酔って帰宅することが続いたりして、子供心にいやだなあと思いました」そんな父親の姿がN子さんには、何かにフタをしているように思えて、「それがとても苦しそうな感じ

で…、今思うとそれを私が受け継いだというか、でも…、私はフタをして生きられなかった」

必要だから飲む

幼い頃から打ち込んできたピアノを続けたいという希望どおり、東京の音大付属高校に入学、寮生活が始まった。その頃は、悩んだり、落ち込んだり、考え込む自分と明るくふるまう友人とを比較して、「彼女は生きていかれる人、自分は生きていられない人」と思い込んでいた。

帰省した17歳の時、台所の父のウイスキーにふと手が伸びて、一口飲んでみた。その快感と解放感、そして考え過ぎずに人と話せた。「大学の頃は、もう明らかに病気って感じでしたね。それまでは隠したり、寝る前に飲んだりして…。そのうち、一度昼間に飲んだ時があって、それからはもうどんどん…」 少しずつ量が増えていく、というのではなく、「最初から必要だから飲むという感じで、それがすごく苦しい」授業の欠席がふえて、発表会や大事なレッスンの時に限って飲み、「もうボロボロになって、オシャレにも気をつかわなくなっちゃうし…」

最低の人間としてしか扱って欲しくない

大学1年の冬に中絶。当時交際していた同期の音大生とは、その後、N子さんが3年の夏休みに寮を出て一人暮らしを始めてから、ほとんど同棲のような関係になっていった。意識のどこかで否定しながらも、中絶が苦しみの原因だと思い込ませようとして、彼にわめき、自分を責めた。

「私にとって、彼はもうお酒と同じでした。結局彼をしばりつけちゃったんです」そして、卒業後彼と結婚した。

姉思いの妹が必死で病院を探しまわり、国立精神神経センターのアルコール病棟で診察を受けた。ところが、外来だけのつもりで受診したN子さんの意図に反して強制入院させられてしまった。

「5日間で飛び出したんです」 アルコール依存症と認めたくない、

人格を全く無視された“最低の人間”としか扱ってもらえない絶望感で、「心がつぶれそうでした」

責めたり、怒ったりしない両親の顔を見るのがつらかった。「みなをさんざん傷つけて…。その頃はもう24時間、目がさめたら飲んで、また寝てしまう、くり返しの毎日でした」

妊娠3ヶ月を機に、夫と共にN子さんの実家に同居することになった。

「何で私にそんなに気をつかうのよッ」

「不思議なんです、妊娠中は飲まなかったんです。それでも父や夫が晩酌を控えたりすると、『何で私にそんなに気をつかうのよッ』そんな時の私のいいかたは、それはもう恐ろしいですよ」

自分とアルコールのことに気をつかわれることが、かえって彼女を惨めにさせて、家族の心の苦しみが、どれほど深いものを思いやることもできずに、「ただひたすらそういう気のつかわれかたがつらかったんです」

母親は教員を辞めた。家族の勧めで地元の精神科医にかかったこともあったが、「夫がいなくなってしまうという恐怖感があって、入院だけは絶対いやだった」

父に血が出るほど叩かれて

無事に男子を出産。妊娠中は飲まなかったとはいえ、失われた希望の中で、過去に対するこだわりから抜け出すこともできずに、産後20日目位でまた以前と同じ状態に戻ってしまい、そして間もなく夫は家を出ていった。大事にこそ至らなかったが、彼女は手首を傷つけ、乳飲み児のかたわらで、ますます酒におぼれていった。

どれ位、飲んだのか、次に目が覚めた時「何日だか、日にちもわからなかったんです」かつて一度も手を上げたことのない父親に、「額から血が出るほど叩かれました。幾針か縫うほどの傷でした」

「お姉ちゃんと同じ病気が治った」

東京の大学に在学中の妹が、S研究所をさがしあて、「最初、妹が

ひとりで話を聞いてきてくれて、『お姉ちゃんと同じ病気だったカウンセラーのKさんと話をしてきた』といったんです」それまでは夫がいなくなる恐怖心で、入院を拒み続けていた彼女にとって、夫のいない今、もはや入院するか、否かはどうでも良かった。「酔払ってぼんやりしかわからなかったけど、『病気が治ったのは女の人で…』という話と、『子供が一緒でもいいよ』という2つの事だけは覚えていました」

“葛藤”

3ヶ月の息子連れてS研究所を訪れたN子さんに、T先生から「今苦しんでるのは小さい頃から“葛藤”があったんだよ。ただ愛し合いたいというだけなんだよね」といわれた。その言葉に彼女はうなずき、突然涙が溢れ出した。お酒のことをどうにかして欲しいと思いつめてきたのに、そのことには触れず、「自分だけが感じ、自分だけが抱え込んでいると思いつめていたことを、なぜ、この先生はわかるんだろう」

今まで、自分では言葉にいいあられなかった、そういう“葛藤”を「本当は一番分かって欲しかったんです」「ああ、これを分かってくれたからもういい」彼女の望むことが、ここで始まっていると直感した。

もう取り戻せないと思っていた人間の尊厳や、失った自信を、新たにもらえるように思えた。「今は病気の人に対する尊敬が持てるんです。そこに神様のどんな意味が託されているのか、この病気も“葛藤”も全部与えられた『大切なもの』と本当に思えることができて、希望を持つことができました」

弱さの祝福

N子さんは2年前に受洗した。「宗教って、心の弱い人が頼るものだと思っていたけど、こういう神様だったら信じられる」

彼女はもはや、おぼれる者ではなくなった。アルコール依存症という病気を経験したが、もはやアルコールという“藁 (=わら)” は必

要でなくなった。

「苦しんでいた時、神様を知らなかったし、『神様、助けて下さい』とも祈ったこともありませんでした。でも、その時一緒に歩いていてくれたのが神様だったんだなあ。今、生かされてこうしている時も、父や死んだおばあちゃんがずうーとやってきたこと、それが『祈り』だったと思います」

(取材班・湯沢 ヒロ・大和田久似枝)

3 知的障害者

私たちも人間だ

横浜、坂の途中の民家の戸を開けると、「こんにちわ」という明るい声、笑みを含んだたくさんの目に迎えられた。ここは『家』、中高年の肢体不自由、精神または知的障害者15名が通う障害者地域作業所だ。

「アッ、歓迎してくれている」と、こちらの気持ちも和らぐ。元医院であった建物を改造した作業室の大きなテーブルをかこんで、10人ほどの人たちがそれぞれ電気部品の組み立て、袋つめ、箱の組み立てなどの作業に取り組んでいる。奥の食堂では昼食の後片づけの最中。通所者のMさんが一生懸命、皿をふいている。生活の場としての活気と真剣さがただよう。

無言の叫び

Tさん(39)は北海道のコロニーから去年ここに移ってきた。「ここはいい。明るい。自由で楽しい。前のところと雰囲気が違う」

Wさん(47)「大手造船所の下請けで16年電気の配線をした。でも、給料安いんで、飛び出しちゃって、山谷行って、交番襲撃しちゃって、捕まっちゃった。小さい時、学校でいじめられてばかりいた。成績悪くて、毎日お父さんに殴られてた。妹がいるけど、この前、会いに行ったら“兄ちゃん、来てもらおうと困る”といった。年寄りの友だちを病院に連れて行くのが好きだよ」

Uさん(59)「ここにくる前は労務者してアオカンしてたよ。気楽でよかったよ。病気にしちゃって、労務者やるのがきつくなって、金が欲しいからここにきたけどさ。あんまり楽しくないよ」こういいながらもUさんの表情には、ここでは自分は受け入れられているという安心感がのぞく。

P子さん(51)はひどい咳に悩まされている。苦しそうに咳き込みながらも一生懸命、話してくれる。「お父さん、お母さんがなくなって、今ひとりで住んでいるの。1年前からここにきている。仕事すると咳の苦しいのがまぎれるからいい」

Qさんは20年間焼肉屋で、ただ働きして、店主が新しい家を建てた時、5,000円持たされて追い出されてしまった。福祉の人に保護されて、ここを紹介された。そして、この通所者と結婚し、今はアパートに住んでいる。「ここはいいなと思った。仕事楽しいし、気がまぎれるから」という。おっとりとして静かに話す彼女にそんな苦労の影はみえない。

「知的障害者は私たちが叫ぶようには叫ばないんです。彼らは言葉にしていわない。どんな扱いを受けても権利を主張しないんです。だまされても、利用されても、差別されても、与えられたことを受けとめてしまう。でも心は同じように傷つくんです。彼らは無言で叫んでいるんです」と所長さんはいう。

私たちはどうしたら、彼らの声なき叫びを聴きとることができるのだろうか。

「作業所は家庭、所長はオヤジ、家内はオフクロ」

「ここにきている人たちは社会でもまれてきて、孤独な人たちだから家庭が欲しいんです。俺が親父、家内がおふくろ。24時間丸ごと抱えるんです」

『家』は、1989年にB町で聖書を読んでいたグループのメンバーが集まり、昼間の時間を働きながら、共に過ごせるように設立された。

「ここで一番大切にしているのはお互いに人間として見ること。人間として扱われるとはどういうことか、分かりますか。お互いに良くないことは良くない、イヤなことはイヤといえることなんです、一般の友だち同士のように。障害者を特別扱いするのは人間扱いしていないことなんです。いくら知的障害者でもその人のイヤなところはイヤなんです。良くないことは良くないときちんと伝えると、相手はこち

らの本気を分かってくれます」 所長夫妻が情熱をこめて語りつづける。

「障害者は障害者らしく、本来の自分として一番幸せに生きられれば良い。私たちはこういう人たちにそのチャンスをあげたい」

この作業所は、夫妻の身を削るような努力で運営されている。「知的障害者の人でも私たちが助けてっていったら、一般の人より力があるんです。ただ私たちが信じるか、信じないかですごく違う」

「どうか皆さん一人ひとりが今いる場所でこういう人たちを人間として認め、かかわりを持つように努力して下さい。神様の前では皆同じ人間なんですから」

母としての闘い

「これは神様のちょっとしたいたずらで」と二人の幼子の手を引いて訪れた保健所の窓口で、長女のSちゃんの異常を告げられた時は「本当にショックでした。どうしてエ、と思って…」と母親のH子さんは回想する。

商社に勤める父親は仕事が忙しく、年子の二人の娘の養育はH子さんにまかされていた。その時からH子さんの闘いが始まった。いくつもの病院をまわり、さまざまな訓練を受けさせた。

「ひとりをおんぶ、ひとりをだっこという姿で本当に無我夢中でした。そんな時、いつも励ましてくれたのが、親の会のお母さんたちでした」

同じ苦しみ、悩みをもつお母さんたちからの情報、アドバイスが彼女を支え、Sちゃんは一般の幼稚園、小学校1年2学期までの普通学級を終えて、特殊学級、養護学校へと進んだ。そしていまは近くの作業所に元気に通っているという。

教会も修道会も、もう少し眼を向けて

カトリックの家庭に育ち、ミッションスクールで教育を受けたH子さんは「辛い時はいつも心のよりどころとして神があった」という。しかし実際には親の会の仲間たち、学校の先生方とのつながりが支え

だった。

地域の小学校には特殊学級が併設されていて、普通学級の生徒と特殊学級の生徒が自然に接するチャンスがあった。声をかけてくれたりとか、手紙をくれたりとか、自然に交流があったという。

「いま地域で障害者も一緒に生活することがいわれていますけど、大人になってから急に、障害者と一緒に生活することは難しいんです。子どもの頃から自然に受け入れ合う体験を持っていないと。カトリックの学校もたくさんあるけれども特殊学級があるところって少ないんです。ほとんど、みな受験校で。こういう発育の遅れた子どもたちの場がないんです。学校ではなくても、せめて作業所でもあったらと本当にいつも思ってきました。こういう子どもたちは一般の子と違って友だちがいないんです。学校に行っても学校の中だけの友だちです。帰ってきてからは誰もいない。だから教会の若い方への希望なんですけど、日曜日にでも一緒に遊んでもらえるような会があればいいなと思っていました。教会も修道会も、もう少し、こういう子どもたちに眼を向けていただけたらと…」

「地域で一緒に暮らしたい」

「将来のことが、やはり一番心配です。親がいなくなった後のことが。一軒の家に寮母さんと仲間と一緒に住んで、そこから作業所なり、仕事場なりに通う生活寮がもっとできればと願っています。やはり地域の中で、一般の方とかかわりのある、いまのような生活の形を続けさせてやりたい」

成人式の晴れ着姿のSちゃんの写真を見ながら、H子さんは静かに語り読ける。

「ただ一番いいたいのは、こういう親の悩みとは別に、本人もほんとに悩んでいるということです。口にしなくても仕事場での辛い体験とか、人間関係とか一般の人と同じように傷ついたり、悩んだりしているんです。それを分かってあげて、受けとめて…、やっぱり人間として扱ってあげないと。本当はそれが一番大切なんです」

生産する能力が低くても、表現する力が小さくても、彼らには、だまされてもだまさない純粹さ、傷つけられても恨まない寛大さがある。積極的に彼らとかかわりを持ち、友人として悩みを分かち合い、成長しあえる関係を築いていきたい。

【参考：『家』は、障害者やその家族、ボランティアが作った共同の働く場所、『共同作業所』と呼ばれています。1969年以降、全国各地で開設され、増加していますが、小規模の無認可作業所が多く、その実数はつかみにくく全国で約4,500カ所と推定されています。現在の不況で仕事が激減し、運営が困難になっています】

(取材班：牧野早智・野坂澄子)

知的障害者の親は彼らの代弁者

関西の地方都市、その郊外から田んぼの中を放射線状にのびる道路にそって、新築の家々がほどよく、間をおいて建てられている。家先に田んぼがのこっている家もある。

「N鍼灸院といえば、どこのタクシーも連れてきてくれますよ」と、これから訪ねるNさんが駅からの道順を教えてくれた。この辺りでは、ただ一つの鍼灸院である。

朝9時、玄関のベルをおす。家の中から掃除機の音、そしてラジオかテープなのか、演歌が聞こえてくるのに、なかなか応答がない。10分もして「おかあちゃん、いらしたようだよ」という声がして、奥からNさんが廊下にでてくるのが、玄関の戸をほそ目にあけて内をうかがっていた私には見えた。

知的障害の息子をもつ親の苦勞

初対面の挨拶をすませて、Nさんと私は板張りの殺風景な待合室のソファーにとり合ってすわる。私が視覚障害者の“叫び”を伺いたいと切り出すと、Hさんは「いやあ、私は生まれつき目がみえない者ですがね、その“叫び”ということより、知的障害の息子をもつ親の苦勞をきいてくださいよ」と切り出された。

息子さん(23)は、多動性の自閉症である。午前9時から午後4時まで町立の障害者作業所にでかけて、割り箸の袋いれの仕事をしている。朝9時からが鍼灸院の仕事と家事のすべての始まりなのだ。

「いま、こうして話ができるでしょう。でも、息子がここにいると、そりゃ、ゆっくり話などはできませんよ。いつときもじつとなぞしてはいません。息子から目をはなすことはできません。目をはなすと何をしているかわからないので、電話をする暇もない」

部屋の電気はつけて歩く、水道は3時間も、4時間も流しっぱなしにしている。水道代だけで1ヵ月30,000円も請求される。物をどこかにかたずけてしまう。毛布やラジオが洗濯機に放り込まれている。

「新しい物でも、焼却炉に投げ込んで…」

「それに息子は、“古い”、“古い”とって、布団やワイシャツ、衣類…新しくてもたばねて、近所の焼却炉に投げ込んでくるんですよ。あとで、そうと、もどしにきてくれる方もありますがねえ。なにか、自分の気持ちをよく表現できないことのジレンマなのではないかねえ」

「まあ、目の見えない者は物のおいてある所を記憶しているだけだから、物が動かされると、もうわかりません」

Nさんが鈴のついたキホルダーをふってみせて、「家では、すべての部屋に鍵がかかるようになっていきますよ。冷蔵庫は台所に1台、もう1台は鍵のかかる押し入れにいれてあって、食べていけない物ははっています」

手洗いを拝借するのに、廊下にてたが、家具はどこかにしまわれていて目につかない。風呂場には洗面用具はない、ゆぶねだけだ。

「家庭は毎日、パニックです」

Nさん(55)は25歳で盲学校を卒業、1969年、29歳のときに結婚。「ある新聞でオウムの松本智津夫は盲学校で寮生活を送ったから性格が悪いとか…、書いていましたがね、あれはいけませんよ、あーいうことをいっちゃあ」

Nさんの「おかあちゃん」も弱視でNさんと一緒に鍼灸院の仕事をしている。娘さんは26歳、短大で「栄養学」を学んできたが、中学生の頃から心にきめていた福祉の施設で働いている。また、社会福祉士の資格をとるために通信教育を受けている。

「…息子は最近、手や足がでるようになって、今朝も作業所に早く行くようにという、ぐずぐずしてねえ、なにか気に入らないことがあったのでしょうか。私をたたきました。この歳になると、きついです

わ。でも親が子どもをたたくと子どもは人をたたくのを覚えるのでねえ、アメリカインディアンはそう教えるって、話ですわね」

「世間では家庭崩壊っていいますがねえ、とっくに私らはパニックですわ。…毎日の生活が生きるか、死ぬかですわ。…疲れた時に横になってテープをきくとか、ゆとりがない…。この子がいなければと、そらあ、恐ろしい考えがうかぶ時があるんですよ…、それは信者にあるまじき考えですわねえ、でも、あるんですよ」

「それは教会のガードは固いですよ」

Nさんは1995年3月、ある人が「Nさんにどうか、洗礼のお恵みを…」と、ある神父に頼んでくれて洗礼をさずかった。Nさんはカトリックの「声の文庫」の20年近い利用者であり、カトリック系の知的障害者の家族と友人は（ボランティア）の集まりに参加していながら洗礼までは長かった。

「それは教会のガードは固いですよ。どこの教会とはいいいませんがねえ。ここだって、ほら、近くにだって教会はあるんじゃないですか」

「知的障害の息子がいるので、洗礼を受ける意志はあったけど…。でもね、わたしひとりでは受洗しません。やはり、息子と一緒にないと。ある人が熱心に神父さんにいって来て、娘と息子と3人で受けました。おかあちゃんは『私は考えがちがうから』といって、洗礼をうけてないです」

毎週土曜日の夜、家から徒歩と電車で40分ほどかかる教会のミサに、電車にのるのが好きな息子さんとでかけて行く。帰りは勤め帰りの娘さんが車で迎えにくる。

「でもねえ、教会は静かなおごそかなものでしょ。ところが、息子は声を出す、動きまわる…。困るのはクリスマスなどの集まりの時には食べ物にはしるのですよ…。そこで、ある人があなたは大きな教会に行くのがいい、目立たないからといわれました。私は目がみえないからいいですけど、信者さんは、せっかく、神父さんの話を聞きにき

ているのにといい、迷惑そうな顔をする方がいらしゃるっていうじゃないですか。これが、家族には無言の圧力になるんです」

「息子は地理感覚はするどいですよ」

奥さんの気が休まるときは、息子さんが教会に行っている時、そしてNさんが息子さんと参加する障害者対象のキャンプ、ワーク（健常者との共同生活体験）、グループに出かけている間だという。これはNさんの奥さんにたいするいたわりでもある。

マッサージの同業の集まりは奥さんが出る。これは奥さんの気晴らしの時だ。

Nさんの趣味は政治の話と演歌、そして“阪神ファン”。Nさんはいつもタイガースのジャンパー、Tシャツ、帽子を身につけている。これは世間に対して自己アピールであるが、外にでるのが好きな息子さんと外出する時は息子さんにも必ず、お揃いの帽子をかぶらせる。「もし店のものに手をだしたら、またはぐれたら、一目で親子とわかる身なりしてたら、すぐにわかるでしょ」

「でもねえ、息子は一度連れて行ったところは、まちがえないで私を連れて行ってくれるのですよ。地理感覚はするどいようですよ。そして、不思議に人の名前は忘れませんねえ。これには私は助かっていますよ」Nさんから初めて出た息子自慢だ。

「この重荷はとかれることはない」

「先のことを考えますとね、体力が逆になって面倒をみてやれないとか、自分の不自由を思ったり…、その時にはどこかにあずければと思うけど、地域（生まれたところ）で家族と一緒になければ、息子は無理ですよ…結局は知的障害者は家族がかかわらなきゃ、生きていけないですよ…、知的障害者の親は彼らの代弁者ですよ、代弁者の価値観によって運命が決まる。だから、親はより高い価値観をもつ必要がありますよ。

講演をききたいですね。その間、息子を面倒みてくださいますよ。教会から障害者のための小冊子がでたけれど、この重荷は

とかれることはありません。担っててくれといっても人は逃げますよ。講演会だって、息子の面倒をみてください、とはいえませんよ」

4時間余の話の間、奥さんが客がいることが、うれしいというようにニコニコしてこまめに、お茶やお食事の世話をしてくれる。

「私たちには無視されないこと、誰かが声をかけてくれるのが、一番うれしいんですよ」と帰りぎわに訪ねたことを感謝された。

(取材班：野坂 秀男・中村 稔)

教会は底辺の弱者から遠い

《新宿地下道にて》

新宿南口に新しくオープンしたタイムスクウェアに向かう人の波にさからって、西口地下道に降りてゆく。都庁移転時に整備された地下道の動く歩道の手前に段ボールで作った小屋が立ちならび、その脇を人々が見て見ぬ振りをしたり、また家族連れが興味本位の視線を向けて通り過ぎてゆく。

きれいにペイントされたもの、空気抜きの窓のあるもの、またぴたりと段ボールで固められ、どこが入口かわからないもの、ただ回りを囲み、その中が上から丸見えのものもある。

ペースメーカーの人

人々の行き交う通路に面して、一回り大きなダンボールの小屋に路上生活者たちの生きる姿の写真が何枚もはってある。その下に印刷物もおいてあり、『新宿連合会通信』を手にとり読んでいると、世話人らしい男の人が近づいてきた。話したいというと、「あーいいよ、こっちにおいで」と道路ぎわのペイントされた小屋に案内され、椅子がわりに小さい段ボール箱をだしてくれた。

「俺はからだ悪いんだ、ペースメーカー入ってるんだ。昔は土木工事とか、橋作ったりしたけどもう働けなくて、でも俺、いいかげんな人間じゃないんだよ。連絡会の炊き出しを手伝ってるんだ。今夜も、炊き出しあるけど、何百人もくるんだ。あとでそっちにも回ってきな」

根城にしている人

70センチ程の道の両側に小屋がならぶ一角で「こんばんわ」と声を掛けると、「何でも聞いて下さい。いいですよ」とひとりの男性が起

き上がり、こちらも入口にしゃがみ込んで話し始める。「わたしはつてがあって、10日位、まとめて地方で働いてここに帰ってきます。留守しても仲間がちゃんと見てくれるから全く心配ないんです。ここはみんな団結して助け合っているから住みいいんです。具合悪くてもお互い声かけ合ったり、団結していろいろ交渉もやります。まあ、ここもピラミッド型になってはいますが、一生懸命働いていますから、何か欲しいものありますか、という見方だけは止めてほしいんですよ」

新入り

さらに奥に入ってゆくと、洗った靴下が何足も干してあり、敷き物の上にちゃぶ台があり、こじんまりした舞台装置のような空間に赤い首輪の黒猫が紐につながれている。住人はいなかった。猫と共に生きる人だろう。

南側に移動してゆくと段ボールもだんだん小さくなり、新入りの場所といった感じになる。角の小さな箱に座っている中年の男性は「30年、水道工事をしていたが、糖尿病で目を悪くして仕事できなくてクビになった。医療にかかり、薬はもらっているけれど、少し前にまかないの仕事したけど、いま、何もなくて困っている」と弱々しく笑い、小声で話してくれた。

女性

白いレースのヘヤーバンドをした女性のいる、小屋の上におかれた紙コップに花が飾られている。入口の下にはキャベツと豆腐が置いてある。

「春からここに居るんです。ずうーっと勤めてたんですけど、体こわしちゃって、やめることになって、姉がひとり居るんですけど、まったく無視されちゃって。たった二人の姉妹なのに、もう10年以上会ってないんです。温かいもの食べたいけど、ここでは煮炊きできないから、寒くなったらどうしようかと思って。温かいスープの配給とか考えて下さない」

《山谷周辺にて》

日没後のうす暗い公園は目を凝らさないと人影が見えない。地面にそのまま横たわったり、背を丸めてまるで物のようにうずくまっている。奥まった茂みの中の段ボールの家も、慣れない目には見えにくい。「こんばんわ」と声をかけると、思いがけないところから人が顔を出す。

仕事もなく、ドヤにも泊まれない人たちは公園や商店街の路上で寝る。商店街とはいえ、アーケードのある商店街は、現在、一ヶ所となってしまった。それすら夜になると水が撒かれ、倒した自転車が並べられているところもあり寝る場所にはならない。

何も仕事がない

仕事のない秋田から出てきたという男性は地下足袋に細身のズボン、そのまますぐにも仕事に行ける身なりで公園のコンクリートのベンチにすわって「若い人は仕事あるらしいけど、50歳を過ぎると仕事がない」と話す。東京に出稼ぎにきて15年位になるという。小柄で肉体労働者には見えない男性は、「宿屋で働いていたが不景気になり、クビ。宿屋関係の仕事したいけど、ここの職安にはそういう求人はないし、どうしていいか…わからない」

髪ものび、気力の失せた黒づくめの男性は、この場からはほとんど動いていない。「体が動かなくて、何も仕事していない」

自戒する人

3個のポストンバッグを所持しているサラリーマン風の身なり、宝石類の卸と販売を15年位やっていたが、アルコール依存症で全てを失い、子どもからも愛想をつかさされ、お金もないし、仕事もない。「アルコールさえなかったらこんなことにならなかった。みんなに見捨てられて情けない」と自分への怒りの涙。

清潔な身なりの男性

土地を売って暮らしてきたという清潔な身なりの男性。妻とは娘を残して離婚。妻は駅前でそば屋をしていて、結構、流行っているの、

時々お金を貰いにゆく。色々の免許を持ち、今は運送の仕事をしているけど、50歳になったらボイラーマンのような体に楽な仕事に移るつもり、一般社会で7割、ここ（山谷）で3割の割合で生きているという。「一般社会で働いている時はここのことはいわない、ここにいる時は一般社会のことをいわない、嫌われるだけだから。それがコツだよ」

両膝包帯の男性

センターの階段で足を踏み外し、両膝包帯の男性は入院手続きの書類をなくしてしまった。「何でもなかったら喜んで働きますよ」という。

血行障害で左足が悪くて右肩に湿布している。「完全に治したいのに病院を最長3ヶ月で出されちゃうから。今、ヤマも本当に仕事がないから秋葉原まで歩いて、金がなきゃ、歩いて行って、遅くても5時までにはいかないと…。運送屋の一般家庭の引越しとか店の移転の仕事だけど。家庭が複雑でもあったし、バブルはじけたら、兄弟バラバラになっちゃいました」

ミサにあずかっていた男性

「神の愛の宣教者の家」でミサにあずかっていた中年の男性は、かつては建築用大型機械の運転をしていたが、大怪我をして入院。「労災はおりたけど2年位入退院くり返してたら、仕事がなくなっちゃった。51歳なので仕事見つからない。今まで他人に裏切られてばかり。ここはただで食べさせてくれるのでありがたい。だけど死んだ後のこと考えているなんてバカだね」

路上生活者をみる私たちの“意識”

近代的超高層ビルや、華やかなデパートに囲まれた新宿地下街で路上生活をしている人たち。一方、山谷は高齢化が大きな問題となっている。年齢のサバを読んで、一生懸命仕事にありつこうと頑張る人たち。この人たちは皆、経済成長を優先してきた社会の犠牲になった人たち。

教会にくる多くの信者は恵まれた人たちである。それだけ社会の底辺の弱者からは遠く、痛みを感じることは少ない。世間から無視され、社会からはじき出された人たちと向き合うことによって、その痛みを感じ、その人たちを異質なもののように見てきた、私たちのなかにある差別や偏見や排除の意識に気づかされるが多かった。

(取材班：大和田久似枝・牧野早智)

人間として暮らしたい

「日系人って、“日本人”…」

「今、一番いいたいことは何ですか」とたずねると、ブラジル日系三世のRさんは、私の目をじっと見て、しっかりした日本語で「人間として暮らしたいです」といった。

「どうして国籍や、お金に関係なく見てくれないのか。同じ人間と人間同志でしょう」と声を強めた。日本にきて一度も日本人の家に招かれたこともないという。「人間として暮らすということは、どんなことですか」とたずねると、「友だちになったり、いっしょに泣いたり、怒ったり、笑ったりしたいよ」と、Dさんと顔を見合わせた。「それに日本人は、日系人を同じ日本人とっていないよ」という。

「どのような時、そう感じますか」ときいたら、「会社の中で一番汚い仕事、イヤな仕事とか、重い物を持つ仕事は全部外国人がする。買物にデパートに行くと、盗まれると思って、すごくジロジロ見る」という。

Dさんは、P町に住んでいた時、近所の人からたくさん苦情をいわれたのがいやだったという。Rさんの家に、日系人の友人が自転車等で遊びにくると、その自転車の止め方が悪いといわれるという。何とか一生懸命働いて、日本に永く住みたいというRさん。

現在、Dさんは仕事をさがして、長男のK君（16歳）とお父さんと一緒に働いている。C君（14歳）は、中学1年の時、B町へ転校したが、今学校へあまり行っていないという。

知ってほしい、彼らのことを

Rさんの「人間として暮らしたい」という言葉は、今も私の中にずーと残っている。日本にいる日系人の問題は、言葉や行政に関して、何かあるのではないかと考えていたので、この言葉は大変意外だった。

もし、身近な移住者に対して、私が人間として相手を見て、同じ人間としてかかわることができたらそのことが何よりも大切なことだと思う。かかわることは、むずかしいことではなくて、挨拶をしたり、話をしたりしてコミュニケーションを交わすことと思う。

私たちは誰かとコミュニケーションを交わすことによって「生きてよかった」とか「この人に会えてよかった」とか「人間っていいなあ」とか実感できる。共感できる。知ることができる。ひとつのものを分けることができる。たくさんの方ができると思う。知ってほしい、彼らのことを。

日本のなかで孤立

「サンパウロ郊外のランプの灯の生活は、言葉も何も通じず、心細くつらかった」

26歳で夫と共に、姑の呼び寄せで1959年にブラジルへ移民したOさんは、ブラジルで外国人として生活を始めた。野菜を作り、3人の男の子を育てながら、「いつか帰りたい、いつか帰りたい」と思っていた。その子どもたちが19歳、18歳、16歳の時、夫が釣りで水死し、子ども3人をかかえて途方にくれた。一番下の男の子が、特にそのショックでしばらく口もきかず、部屋からも出てこなくなり心配したという。

1994年に三男と共に来日。31歳の息子さんと「オシボリ工場」で働いている。最近、息子さんが近くの車を傷つけたり、食事をしなかったり、口をきかなかったりしてすごく心配し、「誰に相談してよいのかわからずこまった」と話す。日本に帰って4年、家と職場との往復だけであまり外出もせず、休みは買物くらいの生活で、「どうしたらよいのか、わからなかった」という。

“外人さん、”といわれて

現在、Oさんは県立病院に入院し、カトリック教会信者のNさんから週1回、日本語の指導を受けて落ち着いている。Nさんは17年間の中南米勤務経験を生かして、日系人の病気、労働、住居、賃金、教育

の全ての問題にかかわっている。ブラジル生れのOさんの息子さんはまったくといってよいほど、日本語が分からず、少しずつ覚えながら、Nさんのくるのを待ち遠しく思っているという。

現在は週末になると、Oさんのアパートに帰る息子さんを待っているOさん。やっと帰った日本での生活にも苦労があると思うが、明るくて、あまり後ろを振り向いていない。

「工場の人に、“外人さん”といわれるとき“私は日本人です”というのです」と声を強めた。ブラジルではやはり日本人は外国人で、日本に帰ってきたら、また外国人といわれていることを笑いながら、悲しそうに話す。長いブラジルでの生活が、日本人のOさんを外国人のように感じさせるのかもしれないが、Oさんの「私は日本人です」という力強い言葉は、日本人として生きていきたいというメッセージにもとれる。

外国人とは、一体誰のことだろうか

教皇メッセージで「教会は人類一致のしるしですから、教会の中ではだれも『外国人』ではありません。教会はだれにとっても、どこにおいても『異国の教会』ではなく『自分たちの教会』です」という言葉を思い返した。

“人類一致のしるしとしての教会”を考えると、“人類一致のしるしとしての生き方”をしなくてはならない。“人類一致のしるしとしての思い”をもちたい。

群馬県伊勢崎市の外国人登録者

日本国内にいる外国人登録者数は135万人（1995年6月末現在）と総人口の1%にあたる。南米からの日系人が急増の原動力で、日本の中に日系人コロニア（共同体）ができつつある。ブラジル人の多くは関東から東海、三重、滋賀県周辺に集中。その中でブラジル人の絶対数が多い浜松は西の中心であり、東の中心が群馬県太田、大泉、伊勢崎となっている。

群馬県大泉町では、町民人口のうち外国人の比率が10%の大台を突

破している。大泉町にブラジル人が集中した最大の理由は、1989年に中小企業32社が結束した東毛地区雇用安定促進協議会がブラジル人の直接雇用に乗り出したためと思われる。法務省入国管理局登録課の1990年6月と1995年6月の外国人登録を比較すると、5年間でブラジル人は3万4千人から16万8千人と5倍弱に増えた。ここ大泉町では10年間で、外国人パワーが19倍に増え、“国内の国際化”の典型的な例とみて、外国人を担当する大泉町企画調整課では今後の対応を検討中。言葉、ごみの分別収集、年金、国保の加入等実生活のあちこちに問題が含まれている。

群馬県伊勢崎市には、大泉町、太田市と並んで外国人登録者が多く、1996年6月4446人が登録されているが、不法入国者を含むと実際はその2倍位といわれている。国別にはアルゼンチン 56人、ボリビア 16人、チリ 3人、コロンビア 21人、パラグアイ 19人、ペルー 1057人、ブラジル 1924人、ポルトガル 1人、中国 129人、韓国 163人、ベトナム 394人、フィリピン 218人、バングラデシュ 81人、イラン 89人、パキスタン 93人、その他の国 182人となっている。

彼らは日本に定住して、“共に生きる”

日本の社会も教会も、外国人は一時的な存在でいずれは自国に帰るという意識があるようだが、しかしこのように確実に日本への定住は増加している。私たちは彼らと「共に生きる」ということをもっと考えていきたい。

【参考：教皇メッセージは『違法状態にある外国人』（1995年）です】

（取材班：菅谷和子・粟津敬子）

あとがき

「四旬節課題解説 “叫び”」編集部

本小冊子の作成を、今年から日本カトリック司教協議会「社会福祉委員会・カリタスジャパン」が担当することになりました。

これは四旬節キャンペーンの推進をより一層、力をいれていくために教区担当者自身がそれに積極的にかかわるということの趣旨によるものです。

1996年4月の全国教区担当者臨時会議で、現代社会の現実の生活のなかで、さまざまな問題で苦しみ、あえぎ、声をあげている人々を“カトリックらしい福祉”の視点でどのように考えるのかということをも日本におけるカトリック教会に提起するためにテーマを検討し、抑圧され、差別された貧しい“小さい人々”の『叫び』を取り上げることになりました。

『叫び』の取材をお願いした方々は取材は初めてです。取材に応じてくださる方を直接あるいは紹介を通して、探し、訪ね、歩くことからこの取材活動は始められました。この取材は、悩み、苦しみ、悲しみ…の声を記録するだけではありませんでした。相手の立場にたって『叫び』を理解しなければならなかったのです。1回の面談だけでは十分ではありません。記録を見返して、2回、3回と面談を重ねた方もおりました。

《知的障害者》の章では「私たちはどうしたら、彼らの“声なき叫び”を聴きとることができるだろうか」と書かれた方もいます。この思いは、取材を担当した方々が、原稿の枚数の10倍ものメモをとりながら実感した、共通の思いでもありました。『叫び』の一言一句のすべてが聞き手にとって意味のあるものでした。原稿はその意味で、できるだけ面談者の一言一句を忠実に表現することにしました。

取材していくうちに、私たちのまわりには生活の“内”にも“外”にも『叫び』が満ちていました。そして『叫び』をあげているのは、すべて私たちの隣人でした。隣人以外の人ではなかったのです。この小冊子で『叫び』を語ってくれた人たちはみな隣人です。

いくつかの出会いのなかで、『叫び』に耳を傾けてきた方々にとって、その『叫び』と自分自身がどのようにかかわり合うのかという課題が与えられました。

この小冊子が、みなさまの“小さい人々”の『叫び』の理解と連帯に役立つよう、そして愛と福祉の行為への理解が深まり、イエス・キリストにならうみなさまの愛の実践に結びつくよう、祈りのうちに願っております。

最後に面談に応じてくださった方々、取材にあたりご協力、ご指導いただきましたすべての方々に改めて深く感謝申し上げます。

なお、本小冊子の紙面の都合等の事情により「企業内いじめで出社・帰宅拒否の中高年の会社員」「家族のひずみのなかで耐えている主婦」の『叫び』につきましては未掲載とさせていただきます。

また掲載文につきましても一部削除、省略等をさせていただきましたことを関係者の方々にお詫び申し上げます。

取材スタッフ

粟津敬子 大和田久似枝 志和浩司 菅谷和子 長島千鶴子 中村稔
野坂澄子 牧野早智 高崎京子 湯沢ヒロ

取材協力者

石垣ちか 井口貴志 岡 宏 中村三省 中谷功 橋本宗明 長谷川潤
原木哲夫 横川和夫

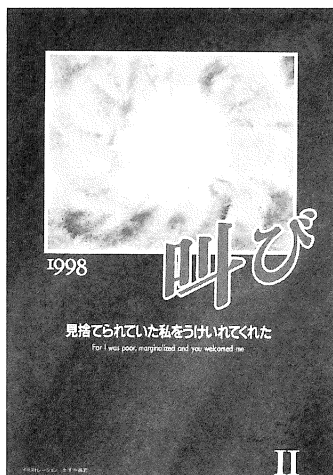
表紙デザイン

かすや昌弘（イラストレーター）

編集委員

森 一弘（社会福祉委員会担当司教） シャールアンドレ・フロアロック（浦和教区）
木村公治（東京教区） 後藤 進（大阪教区） 野坂秀男（事務局）

取材協力をいただきました方々の内で面談者との関係でご氏名の掲載を控えさせていただいた方もおられますことをお断り申し上げます。



見捨てられていた私を うけいれてくれた

For I was poor, marginalized and you welcomed me

目 次

はじめに	
見捨てられていた私をうけいれてくれた	51
1 アルツハイマー型痴ほう症 痴ほう症の夫とともに	53
2 離婚 両親との同居をくりかえして	57
3 アダルトチルドレン 母に愛されなかった	61
4 嚔者 私たちと勇気をもって、かかわってほしい	65
5 薬物依存症 薬を使わない、新しい生き方に挑戦する	69
6 同性愛者 ありのままの自分でいたい	73
7 自己破産者 働いても、働いても…	78
あとがき	82

兄弟姉妹の中にあなたを

主よ、私たちの目が

兄弟姉妹の中にあなたを見いだしますように。

主よ、私たちの耳が

苦しむ人々の叫びを聞き取りますように。

飢えと寒さ、恐怖と抑圧に

さいなまれる人々の嘆願を。

主よ、私たちの心が

互いに愛し合うことを学びますように

あなたが私たちを愛されたその同じ愛で。

主よ、あなたの「霊」を

今日も私たちにお与えください。

あなたの名において

私たちが一つの心

一つの魂となれますように。アーメン。

見捨てられていた私をうけいれてくれた

福岡教区担当司祭 松井 忠之

1998年は紀元2000年の大聖年に向けての2年目“聖霊の年”にあたります。教皇ヨハネ・パウロ二世は、四旬節は、聖霊に導かれ、回心する旅路であり、生活において神と出会うときであるといわれ、マタイによる福音書の「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、着る物がなかったときに着せ、病気のときに見舞い、牢屋にいたときに訪ねてくれたのだ」（マタイ25：35-36）の一節を思い起こされて、「見捨てられていた私をうけいれてくれた」と題した『1998年四旬節メッセージ』を発表されました。

“見捨てられていた私…”は、現代社会から疎外された弱い人たち、物質的な貧困のなかで人間的な尊厳までも傷つけられて、屈辱に耐えている人たち、自分の存在に希望を持たず、悲嘆にくれ、生きる意味を失っている人たちです。

そして、四旬節について次のように述べられておられます。

「四旬節は、神の子である私たちが、私たちの周りにいる人たちとともにいることを思い起こす特別な時期なのです。キリストは自ら貧しくなることにより、“貧困”のなかで生きる一人ひとりとともに生きる者となりました。『はっきり言っておく、わたしの兄弟であるこの最も小さい者のひとりにしたのは、わたしにしてくれたことなのである』（マタイ25：40）…神を本当に愛する人は貧しい人たちをむかえいれます…貧しい人をむかえいれることはイエス・キリストへの真の愛のあかしです」

昨年、亡くなられたマザーテレサは、まさにこの現代の“貧困”に

目を向け、心をひらき、愛の手をさしのべられた方といえます。ご聖体と祈りを大切にし、聖霊の導きに信頼し、子どもからお年寄りまで自分が出会うすべての人たちのために愛と奉仕をささげました。

私は司祭に叙階された年にインドのカルカッタにあるマザーテレサの修道院に義援金を届けにいき、マザーテレサの関係されているいろいろな施設を訪ねました。そして、そのスラムでは日本で考えられないほどの貧しさを学びました。私はある修道院の養護施設に一週間ほどお世話になりました。ここでは親のいない子ども、いろいろな事情で家族と生活できない子ども…数十人が共同生活をしていました。ある日、応接室の前を通りかかるとひとりの少女が親と面会していました。手にパンをもって、とてもうれしそうにお母さんと話をしていました。親からおみやげにもらったパンだと思います。わたしは部屋にもどって、窓から庭で遊んでいる子どもたちを見ながら、面会している少女は今ごろ、おみやげのパンを食べているのだろうかと考えていました。そのとき、面会を終えた少女がパンを高く掲げて、なにか叫びながら、遊んでいる子どもたちのところへ走って行きました。少女のまわりに子どもたちが集まってきました。すると、少女は手際よくパンをちぎって、子どもたちに配り、みんなはにこにこしながら、そのパンを食べました。少女がひとりでパンを食べているだろうと想像していた私は恥ずかしさで一杯になりました。分かち合うことによって、喜びが満たされる心、これがキリストの愛の心だと思いました。聖書に出てくる「2匹の魚と五つのパンの奇跡」のときも、人々は分かち合う喜びの心に満たされたのだと思います。

日本は今、豊かなのでしょうか。真の豊かさとは何なのでしょうか。私たちの周りには“叫び”をあげている人たちがいます。その人たちの“叫び”に耳を傾け、キリストの愛をあかす喜びをその人たちとともに分かち合い、四旬節の旅路を歩いていきましょう。

痴ほう症の夫とともに

主人と私は老舗のおそば屋で働いていて職場結婚をしました。二人とも再婚同士でした。主人は店の中で調理師として働き、私はお店の方に出ていました。主人は先妻の不倫が原因で、私も前の夫とうまくいかず、それぞれ離婚していました。子どもがいないので共働きをしてきましたが、主人の60才定年退職を期に、私も疲れたので退職しました。これからはゆっくり二人の生活を過ごそうとの思いが私たち夫婦にあったのです。

痴ほう症のきざし

10年ほど前、主人は55才の時に膠原病を発病し、入退院や投薬の治療をしてきました。膠原病といってもいろいろ種類があって「うちの人は岸洋子さんのと同じ症状だったの。岸さんは10年目に再発して11年目に亡くなったのよ」

主人も、同じように、発病してからちょうど10年目、高熱が出て、再発状態となり、入退院を繰り返してました。言動がおかしくなってきたのはそのころからです。夕方、突然家にいるのに革靴を出してきて、「家に帰らなきゃ」といったので、「ここは自分の家なのにどこに帰るの」というと、そのときは納得しました。また入院中に病院から抜け出し、家に帰ったことがあり、びっくりし、洋服などを隠したこともありました。このころは症状もまだ軽かったのですが、先生が「膠原病からの影響も少しはあるし、どちらかといえば、アルツハイマー病の疑いもあるのでそろそろ特別養護老人ホーム（特養ホーム）のことを考えるように」といわれました。そのとき、特養ホームを考えるのは主人には何か悪いような、かわいそうな気もしました。

夜半に警察から電話

徘徊（はいかい）が始まったのは65才の6月。主人は日ごろ、散歩に行くのが好きでよく近くを歩いていたのが、その日は自転車に乗って出たきり、帰ってきませんでした。初めてのことなので本当に心配しました。交番に届けると、夜中になって連絡があり、郊外から都心まで行っていました。

ケースワーカーさんに相談したところ、「待ったなしね」といわれ、特養ホームの短期滞在の入所の申込みができました。7月になり、いよいよ『Iホーム』のデイケアに初めて行くという前日、いつも通っている近くの老人会館に行き、私が用事をしている間に、またいなくなりました。今回は歩きなのでそんなに遠くではないと思っていたのですが、やはり夜半に警察から他県にいるという連絡がありました。道端にある放置自転車に乗って行ったそうです。途中どうやって行ったのか。事故もなくホッとしました。その後、何度か、「自転車の鍵を出せ」と強く迫りましたが、向かいの方に鍵を預かっていただき、自転車も隠しました。

徘徊が始まってからは、住所と氏名を書いたものを持たせるようにしました。家の玄関の鍵を二重三重にしたので、「この鍵、はやく開けろ、はやく開けろ」といって、足で蹴ることがあります。そういうときは、駅位まで一緒に歩いていくと落ち着くのです。

「お前なんか帰れ」

去年の1月から2月の中ごろまで一番大変でした。夜になると、私と仲の悪い妹と間違え、「何でお前、ここに寝てるんだ。自分の家があるんだから帰れ。このハンドバッグ、お前のものだろう。これ持って帰れ」また、ときには、私を前の奥さんと間違え、「お前とはもう関係ないんだ。帰れ、帰れ」といってきかないんです。夜中に仕方なく、寒い外で主人が落ち着くのを待ったりしました。そう、一日おきくらいにそういう晩が続き、悲しくて、情けなくて、悔しくてなりません。満足にねられない日々がつづき、疲れ切って、「私の身

体は一体どうなるんだろう。いつまで続くんだろう」と本当に不安でした。友だちから「あなたは体が弱いから30代で死ぬ人だ」といわれていた私です。これから先の介護を考えると「私が倒れでもしたら、主人はどうなるだろう」とそれが一番心配です。

普段家には、テレビを一緒に見たり、新聞も一応見ていますし、話もします。3度の食事を食べ、着替えも何とかひとりですしているのですが、突然わけの分からないことをいい出すのです。

私の体の調子が悪い時など、家の中を動きまわったり、玄関をガチャガチャ開けようとするので、「具合の悪いときくらい静かにしてよ」とつい怒鳴ってしまったり、トイレなど失敗して叱ったりした後は胃が痛くなるのです。こんなことがあったあと、食事を作って「ご飯食べよう」というと「さっきのおっかない女は帰ったか」ときくので、「ああもう帰ったよ」というと安心して食べるのです。

他人には任せられない

当初少しおかしいなと思う程度のころには、外出の用がある時など親しい友人やヘルパーさんに助けてもらっていましたが、妄想などが出てきて、いきなり「あんたどこの人、帰れ」なんていい出すので、他人には頼めなくなりました。火曜日から金曜日まではデイサービスに行くので日中ちょっとホッとできますが、迎えに行くと、職員の方には私を「あれは姉です」というらしいのです。職員の方が私のことを気の毒がって下さるのです。

土曜日から月曜日までの3日間は「家族がいないので1対1だから自由がなく、代わり手がないのがつらく、四六時中、主人と糸でつながれているようで気が休まらないのがとても苦しい」

週2日『Iホーム』のデイサービスにお願いしてから、その間に用事をするようにしていますが、短期滞在を申し込むのが4ヶ月前というのがあまり先すぎて、せめて2ヶ月前だといいたいと思うのです。

こんな生活になって最初のころはずいぶん腹がたちました。怒りました。私たちには子どももいないし、私たちの老後は自分たちでやっ

ていくために共稼ぎをしてきたのです。主人の発病は定年退職で厚生年金をもらえるようになり、ケチケチ貯めてきたお金が二人のために使えるという矢先のことだったのです。「どうして。これだけで終わりかと思うと悔しくて。もっと遊んでおけば良かった」とも思いました。

二人で歩いて行くはずの人生だった

「何のために結婚したのだろう」という思いもありました。主人はやさしい人です。私にはいろいろなことを任せ、信頼しきっていました。二人で力をあわせて、小さいながら家を持つこともできました。再婚同士の私たちですから、「また別れたの」なんていわれたくないし、失敗したくないと頑張ってきました。

今は主人と顔を合わせているだけの生活のなかで心身ともに疲れてしまいました。主人とのやりとりでイライラして怒ったりすると不思議と主人も調子悪くなるのです。いけなかったなと思いますし、自分の気休めの外出などで短期滞在をお願いする時は、何とも後ろめたい気持ちになります。

『Iホーム』には多分、2年後には入所できるだろうということですが。二人で生きていくのだと自分に言い聞かせてきながら、私にはもう限界です。癌でご主人をなくされた友人から「あとで後悔しないように介護しなさい」といわれたことが頭に強く残っていて、一生懸命、悔いないように頑張っていますが、もう私ひとりでは介護できない、ホームしかないと思うのです。

ホームに入ったら、せめて毎日でも行こうと思っています。

(取材班：中村智子・牧野早智)

両親との同居をくりかえして

親がかりの甘い生活

同じ大学の法律相談部に所属し、司法試験を目指し、勉強していたZ氏（27才）とA子（28才）は「初めの子どもは30才前に生みたい」というA子の言葉で結婚を決意した。Z氏は家計を支えるために家業を手伝うことにし、両親と隣り合わせに住む生活が始まった。親がかりの甘い生活といわれても仕方がないが、とにかく勉強を続けている夫婦であり、家賃がかからないのが大きな助けになった。

A子は2所帯分の家事と両親の世話を献身的にやっていたので母はA子のことを気に入っていたが、父はA子に対してうるさかった。こんな生活環境のなかでは、二人で7回も挑戦した司法試験への夢もいつしか消えていった。

私が必要なら、つよく抱いて

A子は新婚当初、誘えば一緒にミサに行っていたが、出かける前の洋服選びと化粧にかなり時間がかかるので遅れるのが普通だった。次第にA子はミサに行かなくなり、Z氏はひとりで行くようになった。「教会へ行くことで心を落ち着かせた。気持ちが教会に向いていたときはいろいろな役を引き受け、週に4回くらい通ったこともある」「親の面倒を見て、苦労している妻から逃げていたのかもしれない」

そんなころ「教会と私とどっちが大切なの」と問い詰められて、「どっちも大切だ」と答えると「それでは納得できない。私が必要ならつよく抱いて」といわれた。

両親との別居そして転職

初めの子どもが生まれたころ、父親から赤ん坊の泣き声がうるさいといわれたので、二人目の子どもが生まれることになったとき、思い切って別居をすることにした。家賃など出費も多くなったので、A子

は子ども二人を保育園に預けて医療事務のパートを始めた。

と同時に、父が家業をやめたので、これまでそこで手伝っていたZ氏は新しい仕事を探すことになってしまった。35才のときだった。それから今まで5回くらい職場を変えてきた。百科辞典のセールスから始まり、アルバイト、失業の経験もした。単身で長期出張をしたときは、サラ金を利用し借金がかさんでしまい、兄に返済を頼んだこともある。

同居を説得される

両親との別居後生活が軌道に乗り始めたと思われたのも束の間、母が倒れ、誰かが両親の面倒をみなくてはならなくなった。長男夫婦との同居は両親が拒否するので、兄弟皆の了解の上でA子を説得し、条件をつけ、同居することになった。その条件とはパートを辞めざるをえないA子に、両親がお金を払うということだった。公団の家賃を払うのが大変だったZ氏夫妻にとっては悪い話ではなかった。

看病する妻への遠慮

しかし、A子の母親が倒れ、A子が1ヵ月近く実家に帰ったとき“両親の世話をしなかった”という理由でお金を渡してくれなくなった。「収入がなくなり、お金が自由にならず、気難しい両親の世話もしなくてはならないA子には経済的にも精神的にもつらい思いをさせていた」「A子に負担をかけていたので、自分は徹底的にA子に遠慮し、A子に気をつけていた」とZ氏はいう。

朝に弱いA子を起こさないように早起きを我慢したり、両親の朝食の世話をしてもらうために、自分の朝食はほとんどひとりですべていた。A子がせっかく作った食事でも父は気に入らないと食べなかったり、放り出したりしていた。Z氏は見かねて、A子に「いちいち考えずに犬の食事だと思って作ってくれ」と頼んだこともある。

時にはA子も耐え切れなくなって、兄弟の家や実家に行って、2、3日帰ってこないこともあった。そんなときはひたすらA子が帰ってくるのを待ち続けていた。

妻と両親・兄弟には生まれて

子どもたちが小学校の高学年になるころ、Z氏は教会活動の一環として、援助関係のボランティアをしていた。そこで日本語教師が必要になったので、A子にどうかと勧めた。A子は早速、講習を受け、アルバイトから専任講師へとなっていった。仕事の都合でA子が夜遅く帰るようなことがあっても、Z氏は文句をいわなかった。

しかし、両親はそういうわけにはいかず、A子の一挙一動に何かと口をはさみ、Z氏とA子があまり家に居ないことが判ると、ヘルパーを依頼するようになった。兄弟たちはZ氏に対して、家賃を払わずに住んでいるのに親の面倒を見ていないという思いが強かったのだろう。ずいぶん、嫌みをいわれたし、見せつけるように手伝いにもきた。「どちらに対してもずけずけいうことができず両親、兄弟とA子との間を取り持つことができなかった」

「若い男のほうがいい」

出張先から早朝や夜間電話してもA子がでないことが多くなった。A子にたずねると「具合が悪くて寝ていた」という。初めはそのまま信じていた。そんなとき、義姉から「帰宅が遅すぎるようだし、外泊もしているようだから、きちんと注意をしたほうが良い」といわれた。Z氏はA子をかばって、いろいろいわれても聞き流していた。しかし、教えている学生に海外旅行先から土産だといって紳士物のシャツを買って帰ったりもした。正月には下宿生活をしている二人の子どもたちも帰ってきているのに学生のところに出かけてしまった。

春休みにA子は郷里に帰った。郷里の義姉から、「学生を連れてきたけれど…」と連絡があった。「そのときはすごくショックを受けた」とZ氏は振り返る。年下の男性との交際は疑いようがなかった。

そのころからA子は家に帰ってこなくなった。A子との話し合いの中でいわれた一言、「あなたより若い男のほうがいい」がZ氏に離婚を決心させた言葉であった。

「女の幸せについて後で話すから…」

ついにA子から離婚してくれと申し出があった。Z氏がなかなか離婚に同意しないしていると、A子は「死んでやる」といって包丁を持ち出したこともあった。居合わせた息子がA子を止め、大事に至らなかったが、「ああもう駄目だ。自分は裏切られたのだ」とZ氏は事態を深刻に受け止めた。娘はA子をとて嫌がっていたが、そのときは泣いて「別れないで」といった。A子は娘に「女の幸せについて後で話すから」と告げた。息子は「仕方ないんじゃないの」といった。真夏の暑い日、離婚届けに署名してA子に渡した。

なんとかひとりでやっている

離婚する前は両親の世話を頼んでいたこともあり、A子に遠慮していて何かと窮屈だった。A子がいなくなっただけで、いろいろなことから自由になった。離婚の原因は自分にあったと思い悩んでいるが。

今は父を入院させ、母を公的機関やヘルパーの助けを借りて介護をしている。A子のやってきたことの全てが自分の肩にかかっている。

最後に、Z氏は「なんとかひとりでやっていける。でも誰かがいて、喜びをわかち合うことがない。それはすごく淋しい」といった。

(取材班：申橋久仁子 栗津敬子)

母に愛されたかった

母は父にだまされて結婚

私は、現在28才、今まで定職についたことはない。母が昨年5月に病死して、父（67才）、兄（32才）の3人で暮らしている。

私の祖母は、はやく夫を亡くし、夫の弟との結婚をせまられたのが嫌で、私の母を婚家へ残し、出て行ってしまった。祖母はその後、一度、婚家にもどっているが、ふしだらな私の母親の生活に我慢できず、すぐに上京している。

私の父は農家の次男の生まれで、幼いころによその家にもらわれ、こき使われ、耐えきれず、家に戻っている。生活は苦しかった。父は学歴もなく、男としての自分に自信がないことでいつも「自分はばかにされているのでは」とひがみ、人の悪口をいっているような人だった。父は上京して、水商売をやっていた母と「実家の土地が入るから」といって結婚した。二人は喧嘩をすると「あんな嘘で私をだまして」とののしり、父は「お前をひろってやったのはおれだ」とやり返していた。ときには、殴り合い、額から血を流していた父の姿を鮮明に覚えている。家庭の中は冷えきっていた。

「お前みたいな子はいない」

私は3才まで託児所にあづけられ、幼稚園は遠く、電車で通っていた。母はその日の気分で私を幼稚園に連れて行かないことが多かった。そして家の中でゴロゴロしていた。お弁当を持たせてくれないこともよくあり、私は、他の子どもから少しずつ、お弁当をわけてもらっていたことがよくあった。先生は「人からもらったものだから」と全部食べおわるまで帰してくれない。好き嫌いの多い私にとってはかなり苦痛だった。

私が小学校に入ったころ、父の稼ぎだけでは追いつかず、母はデバ

ートで働いたり、保険の外交をしていたが、母は浪費家で家計は苦しかった。私は母が帰ってくるのを待ちかねて、一日のできごとを話そうとしてまつわりつくとうるさがり、突き飛ばされたこともたびたびあった。

小学4年の終わりごろ、体調が悪く、学校を休みたくても、母が怖くて訴えることができない。すこしでも、母の機嫌を損ねると「お前みたいな子はいない。お前はろくでもない人間だ。世間では通用しない」とののしられ、叩かれたり、蹴られたりするからだ。ときには数時間、蹴られつづけたこともあった。私は次第に“自分は、ありのままではいけないのだ”と思うようになった。

登校担否

私は小学校の6年ごろまで、学校へ行かなくてはならないということにこだわっていなかったし、行かないことに罪悪感はなかった。しかし母は学校へ行かない私を「何で行かないのか」と平手でぶったりした。小学5年の冬、祖母が病気になり、母の私に対する暴力がひどくなった。祖母の看病を献身的にしているかのようにみえた母だったが、もともと祖母を軽蔑していた母は、病院から帰ってくると決まると私にあたりちらし、ときにはふとんたたきが折れるほどたたかれもした。騒ぎに驚いて、隣家の大家さんが顔を出すほどだった。

そのころは、毎日、テーブルの上にお総菜屋さんのコロッケやカップヌードルがドッサリ置いてあるだけで、私に黄疸が出た。

いじめられて、手首を切る

中学に入っても、ほとんど学校へは行かなかった。演劇部に所属していた私は他の部員から「1週間続けて学校へこなければ許さない」と集団のいじめにあった。たまらず、教師に相談をすると、今度は「裏切った」と電話によるいやがらせがつづいたり、私を“笑い者”にした芝居まで作った。それを知って私はすぐに演劇部をやめた。そのときは死にたくて、手首を切ったが死ねなかった。

その年の夏休みに、幼いころから“声優になることが夢”だった私

はオーディションを受け、養成所に入ることができた。そして学校にはほとんどいくことがなくなった。

「お前はだめな人間だ」

養成期間の終わる1週間前、小学校からの友だちが、屋上から転落死した。「なんでえ。まわりの誰からも愛されていない私が死んだほうが良かった」と思った。

それからはいくつかのオーディションを受けても失敗ばかりだった。そのころ家には多額の借金があり、これ以上養成所での進学をいい出せなかった。私は「お前はダメな人間だ」といわれ続けてきたので、社会に出るのがこわく、働きながら声優の勉強を続けるなどという勇氣はなかった。友だちの死で「死への恐怖」を感じ、昼夜逆転の生活になり、家に閉じこもるようになっていった。学校へも行かず、働くわけでもない私を父は「働かないものは食うな」と外へ放り出したこともあった。私は生きているのが苦しかった。家にいるのが息苦しかった。窒息しそうだった。

「お前はやっぱし、おかしいんだよ」

だれも味方のいない家の中で、私は兄には見捨てられたくない、無意識のうちに兄にたいする防衛本能が働いたのだろうか、兄のいうことはよく聞いていた。二人で留守番をすることが多く、二人で空想の世界をつくり、その中で遊んでいた。中学生になり、二人で酒を飲んだりしたこともあった。

いまから5年ほど前、母といい争ったとき、怒り狂っている私に、母は湯飲み茶わんを投げつけ、つかみかかろうとしたので私はとっさに母を突き飛ばしてしまった。そうしたら兄がきて、私を怒鳴りつけた。兄も自分の味方ではない、と思った。私はカミソリを持ち出し「これ以上、私を責めないでよ」と泣き叫び、あやまって手首を傷つけてしまった。しかし、母は「おまえはやっぱし、おかしいんだよ。変なことばかりいって」と取り合ってくれなかった。

家のなかでは、父も、母も、兄も私を馬鹿にしている、私の気持ち

を理解してくれてない。私は孤独だった。

「ありのままでもいいんだよ」

そんなことがあってまもなく、私たち一家は引っ越して、今、住んでいる家に移った。この近くには公園があり、ここを散歩するのが私の日課となった。そこでバンドを練習している青年に出会った。彼は私の話に耳を傾けてくれ、“心の癒し”セミナーを紹介してくれた。

セミナーの先生は私の話を聞き終わると、「ありのままでもいいんだよ」といつてくれた。私は涙が出て、とまらなかった。

母を愛したかった

昨年、母が風邪くらいに考えて病院に行ったら、急性白血病と診断され、家に帰らず、そのまま入院した。「もう命がない」とのことだった。父と兄は、私が見舞いに行くに「変に思うから病院に行くな」といったので病院には行かなかった。5月16日、母は息を引きとった。前日、意識がなかった母を見舞ったとき、母は私の呼びかけに答えてくれたようだった。私は母の命がないと知ったとき、訳がわからず、教会へ飛び込んでいた。

母の死が私を変えた。今、私は教会の入門講座に通っている。もう憎しみも、怒りも、いらだちも持たず、話せるような段階になった。

母を亡くして、父や兄とは仲良くやっている。祈りのなかで母を考えることもある。私は母に愛されたかった、そして愛したかった。

(取材班：手束たまき・石井弥生)

4 聾啞者

私たちと勇気をもって、かかわってほしい

ここA市は日本の北に位置する県庁所在地である。首都圏からの通勤者も多く、明治のころからその開かれた人心で、地方色をあまり感じさせない土地柄だ。Hさんの家族7人はその中心地からバスで30分程の静かな住宅街に住んでいる。

11人兄弟の末っ子に生まれて

Hさんは敗戦直後の満州で、11人兄弟の末っ子として生まれた。Hさんが生まれるとすぐ、両親は11人の子供たちをつれて日本に帰国した。敗戦の混乱の中での引き上げ、食料難時代の祖国で、この大家族を養わなければならなかった両親の苦労は想像にあまりあるが、Hさんはまるで記憶がないという。Hさんは4才のとき、何気なく口にした食べ物が傷んでいたのだろうか、食あたりの高熱が原因で全く聴力を失った。運動神経抜群、積極的で努力家であったHさんは、小学校3年までは普通学級で何も不自由を感じなかった。常にリーダー的存在であった。小学校4年で親元を離れ、全寮制の聾学校の1年生に入学した。そこで、声の出し方に始まり、相手の唇の形を読んで相手の言葉を理解し、唇の形を真似て自分で言葉を話す口話法を学んだ。中学3年18才の時、Hさんはここで将来の妻K子さんに会った。K子さんは、Hさんが高校卒業までの10年間、寄宿していた寮の生活指導員であった。

K子さんは夫と死別、聾啞者の息子と残されて

K子さんのひとり息子Tさんは先天的聾啞者である。Tさんが生後8カ月のとき、K子さんは、何回いってもいうことをきかない息子を叩いてしまったことがある。K子さんは息子の障害にはまったく気づいていなかったのである。それをきっかけに息子を大学病院で診ても

らうことになった。診察の結果、Tさんは不治の聾啞者であると宣告された。思いもよらぬ息子の運命にK子さんはすっかり力を落としてしまった。そんなK子さんにさらに追い打ちをかけるように、K子さん28才、息子1才3ヵ月のときに夫が心臓麻痺で他界した。

息子と別れて、聾学校の生活指導員に

息子とたった二人、このままでは障害をもつ息子を不憫に思う母親の愛情がかえって息子をだめにしてしまう、とある人の忠告を入れてK子さんは3才になったばかりの息子を聾啞者専門の施設に預けて、聾学校の生活指導員として住み込むことにした。K子さんはここで夫Hさんと出会うことになる。

生意気ざかりであった中学生Hさんは、新米の生活指導員K子さんをこまらせて楽しんでいたようだ。「我慢できなくなって、Hさんに手を上げたこともあったんですよ」とK子さんはいう。そして、Hさんが高校を卒業して7年後、Hさん27才、K子さん39才のときに、Hさんの家族の全面的な賛成を得て結婚、幼くして両親を亡くしたK子さんは、暖かい家庭の味を体験することになった。

Hさんは高校卒業後、美容師見習いをしたり授産所で印刷技術を学んだりしていたが、結婚後は家族3人の生活を支えるために民間の印刷会社に就職した。同じ聾学校の先輩、後輩であるHさんと息子Tさんとの間は「血のつながった父子以上のものがあって、私も入り込めない」とK子さんはいう。結婚前からTさんは13才年長のHさんを実の兄のように慕い、Hさんの家族もTさんを本当の家族のように受け入れていた。そのTさんは現在38才、15年前に同じ聾学校の出身者と結婚、3人の子どもたちは自然に手話を覚え、両親と周りの人とのコミュニケーションの仲介役をつとめている。

25年間、ひとりで教会に通って

Hさんは高校1年のとき、聾学校の先生の導きで教会に行くようになった。「ひとりで教会に通い続けたけれど、ミサの流れがわからないから、横目でとなりの人を見ながらミサにあずかった。聖体拝領だ

けが喜びだった」3年間まったく教会を離れていたこともあったという。「ミサがわからなくても、信仰があればいいと思ったけど…」

ちょうどNICE（福音宣教推進全国会議）が始まったころ、教会で二人、三人と説教を筆談で教えてくれる人がでてきた。「とても嬉しかった」現在、Hさんの所属する教会では5年前に手話サークルが生まれ、日曜日のミサでは通常式文はもちろんのこと、聖書朗読、説教、聖歌、お知らせに至るまで、すべてに手話通訳がつくまでに成長している。「初めてミサの流れもわかり、皆と同じ気持ちでミサにあずかれるようになった」聴覚障害者の在籍数はHさんの家族を含めて7名である。しかし手話サークルの活動がここまでくるには、いろいろな紆余曲折があった。

「ミサ中の手話通訳は目ざわりだ」

「手話通訳が福音朗読や説教のとき、司祭の横に同列に立つのは失礼ではないか」「主任司祭も含めて他の信者はみんな、ミサ中の手話通訳は目ざわりだと思っている」など、いろいろな意見がHさんや手話サークルの人々の耳に入ってくる。「健常者も自分と同じ気持ちでいてくれると思っていたから本当にびっくりした」「もっと遠慮した方がいいのではないか」手話サークルの人々の気持ちもゆれた。

「手話も口話法も知らないほうがよかった」

健常者のコミュニケーションの手段は音声言語だが、聾啞者のコミュニケーションの手段は手話である。しかし健常者は話し手の言葉のほかに、無意識にはあるが、話し手の身振り、顔の表情、声の調子などから総合的にその言葉の意味を理解するといわれている。手話通訳者が手助けできるのは、話し手の言葉の部分だけだ。それを考えると手話通訳者は、話し手のできるだけ近くにいるのが当然である。

「私は手話や口話法を勉強して、人の話がわかるようになったけれど、こんなことなら人の話がわからないほうがよかった」いつも前向きなHさんも、この時ばかりはそんな気持ちになったという。そんなHさんに、K子さんは皆がどう思っているか、直接、皆と話し合っ

みることをすすめた。話し合いをしぶるHさんを手話サークルの皆も説得して、直接、主任司祭に確かめることになった。「よく話してくれましたね、私は皆さんの悩みがよくわからなかった」と主任司祭はいった。

手話サークルは聖書の勉強会

手話サークルでは毎週土曜日2時から、10人前後の手話通訳者が教会に集まって、翌日曜日の「聖書と典礼」を読みながら勉強会をしている。手話通訳といっても、ただ、字面を訳していたのでは意味がない。Hさんから手話を習いながら、この勉強会は同時に聖書の勉強会でもある。「この言葉はどういう意味だろう」「どのように手話で表わせば正確に伝えられるだろうか」手話サークルでは、受洗後まだ1年もたたない人から85才で今なお現役の手話通訳者まで、自由に自分の意見をだし合う。そこには一方的に教える側、習う側という関係ではない和やかな雰囲気だ。日本での聾啞者に指導者として神父がほしい。聾啞者の気持ちができるカテキスタ、神父を養成してほしい」Hさんも含めて手話サークルの皆の強い希望である。

「私たちと勇気をもってかかわってほしい」

「マザーテレサは愛の反対は憎しみではなくて、無関心だといっています。手話でなくてもいい、筆談でもいい、聖歌集で歌っている個所を指でたどってくれるだけでもいい、ニコッとほほえんでくれるだけでも嬉しい。できることはたくさんあるはずです。勇気をもって、私たちにかかわってほしい」Hさんの言葉である。

(取材班：場崎 洋・野坂澄子)

薬を使わない、新しい生き方に挑戦する

ある地方都市の駅に降り立つと、茶髪に作務衣（さむえ）姿の青年が出迎えてくれる。用意された車に乗り、商店街を過ぎると緑豊かな田園風景となり、30分も走ると畑の更に奥へとうねうねと入り込んだ突き当たりに、突然平屋建ての家が現れた。雑然と靴が並んだ入口にたたずむと、中から「入ってくださいーい」とのQさんの声。小さな机、書類入れなどが所狭しと並んだ部屋に通された。そこがダルクFの事務室である。ここで薬物依存者たちは共同生活をしながら体験談を語り合い、仲間と一緒に薬なしの生活に慣れていき、自立を目指していくのである。このダルクFを任されているQさんは過去には薬の売人であり、薬物依存症から自力で立ち直った人である。

ヤクザへの道

Qさんは日本海側の半農半漁の貧しい家庭に生まれ、小学6年のときから父親と一緒に漁に出たり、中学のころには建設労働者のアルバイトをして家計を助ける働き者の少年であった。しかし、先妻の子、実母のつれ子を含めて10人兄弟の下から2番目の彼には、昔気質の実母が先妻の子に遠慮していて、Qさんには実子として実母から可愛がってもらった記憶がまるでない。家族関係については中学卒業のときに初めてその事実を知って、それを黙っていた親への不信感がヤクザの道を歩み始めるきっかけとなった。

ヤクザをやっていた17年間、博打の借金の取立てをやったが、「寝てる人間のふとんをはぐことまではとうとうできなくて」と33才でヤクザを破門になる。それまではヤクザの道一筋、80人の若い衆を束ねる親分であった。

「おまえの薬（＝覚醒剤）は効かない。自分でもやってみろよ」

覚醒剤を初めて使ったのは24、5才のとき、売人をしていたQさんの薬の客Kさんの一言「おまえの薬は効かない。自分でもやってみろよ」がきっかけであった。「薬をとるか、自分をとるか、女房に迫られて、一も二もなく薬をとった僕に愛想をつかして、女房は3人の子どもをおいて、他の男と出ていきました」

38才のとき、薬で逮捕されて売人をやめた。真面目に働いて子どもと生活するためである。子どもの側にいてやりたかった…」しかし、仕事がなく、生活は苦しかったが、どうにかして薬をやめたいと思った。

ダルクとの出会い

Qさんが薬を止めるきっかけとなったのは、これもまた、客であったKさんの一言である。Kさんとの再会がQさんの更生をうながすことになった。Kさんは薬を止めて、ダルクSを始め、薬物依存者の回復に尽力していた。偶然、テレビでKさんを見たQさんはKさんからお金を借りようと思って出向いていった。KさんはQさんに“人生を考える”というテーマを示し、薬物依存症の人たちと共同生活を始めるようにすすめた。家賃一万円の家を借りての、QさんのダルクSでの生活が始まった。しかし、元ヤクザに対する世間の目は厳しく、共同生活者の中からもQさんへの批判が出て、薬に頼ってそれをまぎらわせるような日もあった。Kさんからダルクのプログラムを受講するようにすすめられたのは、そのような時であった。

ダルクのプログラムに「自分は薬物依存者であり、無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認める」というステップがある。Qさんは社会で生きていくことができない自分の現実を認めて、このプログラムに真剣に取り組もうという気持ちが強くなった。それからQさんは3ヵ月の研修を経て、ダルクSから独立して『今日一日ハウス（今日一日薬を止め続けよう）』という施設を始め、自分の給料17万円は子どもに仕送りして、みなと同じように一日千円の切

りつめた生活を始めた。

神に自分の命を“預ける”

「ハウスに他人様の子どもを預かる者が何もいいことをしていない元暴力団員のような人間でいいのだろうか」知り合いの外国人の神父さんに相談した。「ひとつだけ良い方法があります。洗礼を受けることです。そうすれば生まれ変われます」少し心が軽くなった。「生まれ変われるのなら、入寮者と一緒に堂々と生きていける」と半年後、受洗を決意。洗礼名はパウロ。

それから、神父さんの指示であちこちの教会や学校に自分の体験を話しに行くようになった。「最初は何をいっていいのか分からなかったが、自分のメッセージを伝えればいいと、自分のおいたちと教会とのつながり、今困っていることを話した。いつも心がけていることは自分の過去を正直に話すこと、隠さないこと」

神の計画の中で

Qさんがハウスで働く理由は「女房に逃げられて…でも女房は僕に子どもを残してくれた…女房に逃げられた最初のころは子どもは僕のことを信用しなかった。5年間ダルクをやって、やっと去年『子どもの日』に子どもと和解できた。30数回も逮捕されて、刑務所に一度も入らなかったのは、神が僕をここに必要としていたという神の計画の中にあったこと」という。

社会とのつながりの中で

Qさんの受洗後、薬物依存症の入寮者たちもバザーなどの教会の催しに招かれ、教会とのかかわりを深めるようになった。そこでは、薬物使用者ということで、とかく差別されがちな彼らも、一般の人々と触れ合い、心和む一時を持つことができるようになり、そのことが社会復帰への大切な足がかりにもなっている。Qさんの施設では5年間で350人の人たちが生活をともにしてきたが、その中で「回復者はゼロ」と彼はいう。Qさん自身も「ボクは回復途上です」というほどに、薬物依存症からの回復は困難なのだ。「今でも僕は薬を使いたい。あ

んないいものはこの世の中にない。それを止め続けるリハビリをし、薬を使わない新しい生き方に挑戦する、それがこのダルクです」

そう語るQさんの口調には熱がこもり、自分の一生をこのダルクに捧げようと固い決意のほどが感じられる。

ダルク入寮者B君の場合

高校時代までは、真面目な生活を送っていたB君は、シンナーを吸っている友を見て、「頭がいかれちゃうよー」と思っていた。また、「自分はそういう世界には行かない。自分で自分の道を開く」と思っていた。しかし、専門学校のとときに友人と覚醒剤を使うようになった。それは「ただの好奇心からだった」小さいころから注射が嫌いだっただ彼は「自分で自分の血管に注射を打てるわけがない」と思っていた。しかし、「最初の一回だけのつもりが、その気持ちのよさが忘れられず、一生ひきずることになってしまった」と語る。中学時代の同級生と結婚したB君は、「俺は女房に何をしてあげたかな、と思うと苦しみしか与えてない」と反省するが、薬をやってしまうと「自分が一番なりたくないと思っているものになってしまう。一番やりたくないと思っていることをしてしまう」と苦しそうに心境を話す。薬を使おうか、止めようかという戦いは一生続く。「それが嫌だから多くの友人は自殺していった」とB君の苦悩はさらに深刻だ。「僕には死ぬ勇気がない。ビルの上から飛び下りる勇気も、手首を切る勇気もない。死ねないんだったら生きるしかない。生きるんだったら薬を使わないで生きなくちゃいけない。多くの人の前に立って話すことが、僕の責任なんだろうなって思う」

彼の前にはこれからも七転び八起きの過酷な人生が待っている。

(取材班：近藤和子・野坂澄子)

ありのままの自分でいたい

猛暑が続いた8月のある日、日没を惜しむように一層激しくなった蝉時雨の中を、私たちは少し緊張しながら初対面のKさん（32才）を待っていた。チェックのアイビーシャツにチノパンツの装い、大学生とも思えるほど若々しくさわやかな好青年である。私たちの取材に快く応じて、自ら同性愛者（ゲイ）である自分のありのままを淡々と語ってくれた。

「忍者赤影にやさしくされたい」

「私は高校3年まで、北陸の地方都市で育ちました。両親と二つ違いの妹との4人家族でしたが、母には友達感覚で、精神的に近かったけれど、父親とはキャッチボールなどの男の子がする遊びの類は全然やった覚えがありませんね。中途はんぱにスパルタで、中途はんぱにやさしかった父親にはよく殴られました。父親嫌いになって、単身赴任のときなど、不謹慎ながら嬉しかったくらいでしたよ。

よく同性愛の原因のひとつに父親との関係が悪かったとか、家族が機能していなかったとかいわれていますが、私は実感としてちょっと違うなと思います。幼児期にすでにそういう感覚があったし、これは先天的なものなのか自分でもよくわかりませんが…。たとえばテレビ番組『忍者赤影』のキャラクターにあこがれたことなどはっきり覚えていますよ。自分をキャラクター『赤影』にダブらせて遊ぶのではなくて、『赤影』にやさしくされたいというロマンティックな感情ですね。たとえば『仮面ライダー』ごっこで悪人ショッカーと闘うなんていうのはちっとも面白くなかったし、むしろ女の子と遊んでいる方が楽しかったんですよ」

恋愛が成就しない

「小学5年から高校生のころまで、好きだった女の子がいたんです。当時、彼女への思いは鮮烈でしたね。高校3年になったとき、同級生の野球部のピッチャーにあこがれて、授業中にジッと彼に視線を注いだり、『ちょっと教科書貸してくれよ』なんていわれただけで、ドキドキして嬉しかった。具体的に男性を好きになった最初だと思うんです。友人と立ち寄った本屋でゲイ雑誌を初めて見たとき、友だちは『ワー、これ危ねえよな』『気持ち悪いよ』と、異端的なものを見てしまった驚きの反応でしたが、私にとっては、まさにそのくらいの年齢の男の子が女性のヌード雑誌から受ける性的な刺激と同じでした。自分は確実に同性愛といわれるものなのかと、秘かに思い始めたのもこのころです。思春期の性に目覚める年ごろとして、高校から大学時代を通して、恋愛の成就しないもどかしさを抱えて、どういう恋愛をしていいのか解らなくて苦しかったですよ」

母に見られてしまった

「東京のアパートでひとり暮らしを始めた大学生のころは、ゲイ雑誌を通してどんどん情報を得ていきましたね。あるとき、留守中に突然、上京して来た母に、不用意に置いてあったゲイ雑誌を見られてしまったんです。帰宅してみると、雑誌の置いてあるテーブルに母の置き手紙があるじゃありませんか、思わず『アッ、しまった』と目の前が真っ暗になりましたよ。私にとっては自分の性について母と話すことほど、気まづくて、恥ずかしいことはありませんでしたから」

正直なことがいえてよかった

「卒業後、アメリカ中西部のある州の大学に約3年間留学したとき、香港から来ていた留学生の女性とドライブする機会がありましてね、日帰りができずにモテルに泊まることになったんですよ。私は彼女に何もする気はなかったんですけれど、彼女は同じ部屋で一晩中ギクシャクして、緊張したまま夜を過ごしたようでした。翌朝、自分がホモセクシャル（同性愛）であることを思い切って打ち明けたんですよ。」

そうしたら彼女は『いってくれて、ありがとう』とカミングアウトしたことをとても喜んでくれたんです。まさか彼女からそういう反応が返ってくるとは思ってもみなかったので、昨夜からの緊張がパーッと解けちゃって、すごく気が楽になりました。正直なことがいえてよかったこと、彼女がありのままの自分を受け入れてくれたことが本当に嬉しかったんです」

パートナー（=連れ合い）をみつけて

「留学先の田舎町は同性愛者同士の出会いの機会が非常に少ない所でしたが、あるとき、ゲイ雑誌の恋人募集欄に目が止まったんです。

イタリア系アメリカ人のミスターPは、偶然、同じ大学に研究室をもつ化学の助教授でした。“連れ合い”として、4ヵ月の同棲期間を含めて、アメリカでの二人の時間は8ヵ月位でしたが、私が就職のため日本に帰国してからは休暇を利用してお互い行き来をしていました。その後二人の仕事の関係で、共通の時間をもつ状況が許されないので、お互い愛情を抱きながらも4年半続いた“連れ合い”としての関係に終止符を打ったんです。彼は5才年上の学者タイプの内向的な人でしたが、私の話に彼ほど耳を傾けてくれた人はいませんでした。黙っていても側にいるだけで安心できる、本当に気のゆるし合える人でした。彼のような人には二度と巡り会えないだろうな、と思っています」

「いつ、結婚するんだ」

「同性愛者（ゲイ）は自分からそれをいわなければ見かけではわかりません。表面的に隠すものは何もないんです。帰国後、就職した職場の上司からことあるごとに『いつ結婚するんだ』とプレッシャーをかけられと、嘘をつく。酒席では、ゲイを揶揄（やゆ）する会話や表現に笑顔でつき合い、道化ている自分がくやしい。『人は会社人生じゃ、それくらい当たり前だろう、かわせよ、どうってことないだろう』と思うかもしれないけれど、同性愛者の人たちはそういう苦しみを基本的に抱えながら生きていると思うんですよね」

「こんな娘があなたのお嫁さんに」

「ミスターPが夏休みを利用して訪ねてきたときに、両親と4人で能登半島にドライブ旅行に出掛けたんです。普段父と私は顔を合わせるとギクシャクするんですが、そのときは家族の気持ちがあままっていました。みんなの生き生きとした表情をしている当時の写真をみると、素晴らしい時間を過ごせたなと思いますね。親の直感で私たちを友だち以上（同性愛者）の関係だなとうすうす気づいていたかもしれませんが、あるとき、『息子の結婚に関心を持つのは親として当たり前のことだろう』とボロッと言った父の言葉や、香港のガールフレンドの写真を見て『あきれいね、こんな娘があなたのお嫁さんになってくれたらいいわね』といった母の言葉にドキッと、やっぱり私の結婚に親として理想像を持っているんだなって」

H I V感染者の死に接して

「あるとき、H I V感染者の“バディボランティア”についての本を読んだのです。“バディ”というのは感染者のニーズに合わせて派遣され、身の回りのサポートや話し相手になるボランティアのことで、H I Vやエイズに関しては私もミスターPもお互い勉強もしていて知識もあったし、二人とも危険なハイリスク行為は好きではありませんでした。現在同性愛者の人たちも情報や知識は結構もっていると思いますが、実際に感染予防のためにセイファーセックスが実行できるかということが大きな課題だと思うのですよ。私も同じセクシャリティとして、人ごとではないという思いからH I V感染者の支援活動をしている『サークルA』の戸を叩いたわけです。“バディ”として最初にかかわった人はすでに末期の状態でコミュニケーションが取れない内に亡くなられて、二人目のかたは思考も明晰でしたのでこれから友人関係を築こうと思っていた矢先、予期に反して、逝ってしまっ
て…。人の死に向い会った初めての経験でした」

ありのままの自分でいたい

「人間らしく自分が思ったことを行動に移して活動している『サー

クルA』のスタッフに接したことで、自分の人生の方向性が見えて来たような気がするんです。アメリカの大学で公衆衛生学の専門知識を身につけた上で、自分が同性愛者であることを生かしてH I V感染者のために役に立ちたいと考えているんです。この5月にどうにか留学も決まりました。結婚や孫の顔を見たいと願う両親にいつかおおう、いおうと思いつつながら、カミングアウトの機会をつかみそこねてきましたが、できれば本当のことをいって、その上で自分の“パートナー”を見つけて一緒に歩んでいきたいと思っています」

(取材者：湯沢ヒロ 長島千鶴子)

注：カミングアウト＝同性愛者が、同性愛者としての自分を受け入れたうえで、自分以外の人に、自分が同性愛者であることを告げる
こと。

働いても、働いても…、

「あれが生活苦の元なんです。それまでは貧しいながら、なんとかかんとかやっていたんです。それがあんな非人間的な扱いをうけて…」Kさんは憤りを隠し切れず声を震わせた。「きっかけは自分のミスとはいえ、プライドを持っていた仕事を理不尽にもうばわれてしまいました。いわゆる、いじめです」

会社の繁栄を祈って…

水道工事の技術者としてより良いチャンスを求めて上京し、就職した会社はRさんの腕を発揮できる「気に入った職場」だった。ちょっと気になったのは社長がある新興宗教の熱心な信者で「会社の繁栄を祈るため」に社員が月に一度、神社にお参りするのに山に上らなくてはならないことだった。「単なる儀礼だからとわりきっていましたが、社殿の掃除をしたり、寒いときに滝に打たれたりとか、けっこう身体的にも大変でした」「妻はファッション会社の派遣社員としてデパートで働き、自由教育で有名なV学園に通うひとり息子の成長を楽しみに二人で一生懸命がんばっていたんです」平和な日々が4年ほど続いた。

“生き神様”からの嫌がらせ

水道職人としての腕が認められ新しくできた営業所に営繕係として勤務し、はりきっていた矢先、仕事でミスをしてしまった。

「ミスはミスだから減俸とか訓告とかはしかたない」と思っていたら、突然、“生き神様”から「Rさんはガンだから、今夜から3ヵ月間山にこもりなさい。家に帰ることないよ。このまま山にいなさい」といわれた。「もちろん断りましたよ。すぐ病院に行ってもガンではないという診断書ももらってきました。でも『神様の言葉に従わない』

といやがらせを受けて。その内、職場をかえられて、どうでもいい仕事にまわされて、最後はガードマンですよ。一日中立ちっぱなしの。身体もきついし、なにより職人のする仕事じゃない」

たまらず、退職した。社長が「うちには頭の良い人間はいらないんだな。黙っておれについてくる奴だけでいいんだ」といったという。

人間不信・会社への恐怖からうつ病に

「人並み以上にちゃんとやったのに、なぜ。人間としての尊厳を奪われた気がしました」 職人としての誇りを傷つけられた屈辱感と不当な扱いをうけた怒りがこうじて、Rさんは心身とも弱り切っていた。

人間不信に陥り、また会社組織そのものに恐怖を抱くようになった。身体がむしばまれて、不眠と下痢に悩まされた。4ヵ月ほど失業して、ようやく再就職した会社も気力、体力がなく続けられなかった。いくつかの会社を契約社員として転々としたが、身体が激務に耐えられなくなっていた。ついに医師からはうつ病と診断された。「うつうつ」とした日々を送っていたRさんは「3ヵ月間、我慢すれば治りますよ」という医師のすすめで入院を決意。息子が「お父さんは働きすぎなんだ。休むいいチャンスだよ」と励ましてくれたのが救いだった。精神科開放病棟での闘病はつらかった。「でも、やはり過労だったのでしょ。規則正しい生活と食事で一応、身体は元気になりましたよ。そうすれば心のほうも安定するというか…」

カトリックの洗礼を受ける

退職後も薬を飲みながら「設備の雑工というんですが、日雇い労働者として1年ほど働きました。でも過酷な労働で、また体調をくずして…」 そんなRさんを心配して「母が帰郷の切符を送ってくれたんです。久しぶりに古里に帰って、初めていろいろ考えるゆとりができて。プロテスタントの信者だった母の勧めもあって洗礼を受けたんです。5年前のことです」 しかし“正義と罪”を強調する説教についていけないものを感じ、8ヵ月後、東京に戻ってから、カトリック

教会の門をたたいた。「カトリックを知って、私は明確に変わりました。最初はミサのあいだ涙が止まりませんでした。私は神から愛されているんだとはっきり自覚できました。絶対の愛、絶対の信頼とは何かを教えていただきました」

サラ金で自己破産

「一時、帰郷で設備会社を退職してましたので、帰郷後の失業中は肉体的にも精神的にも弱りきってしまって、まともに働けなかったんです」生活費、息子の学費、医療費…またたくまにサラ金からの借金がかさんでいった。増え続ける利息払いと暴力的な取り立てに家族も苦しんだ。「どうしようもなくして自己破産を申請しました」

公団住宅のアパートも家賃不払いで退去命令が出された。「即刻退去ですから、今の住まいを探すのは大変でした。礼金、敷金が安いので移ったんです。でも、家賃は今の私には高いです。毎月の家賃と借金の利息払いで本当にギリギリの生活なんです。私のような者に金を貸してくれるところはすごく高利の業者だけです。毎月、利息を払って、元金にはほとんど手つかずです。多分、私が死ぬまで続くと思いますよ」

3人で稼いでも、まだ足りない

「私は今、派遣会社に登録して建設作業員として働いています。でも、仕事は不安定です。昨日も今日も仕事なかったし、明日のことは今晚にならないとわからない。本当に不安です。息子もアルバイトして一生懸命やってくれています。今月は妻が風邪で1週間、寝込んだし。ええ、妻も派遣社員でデパートですから仕事は毎日ありますが、日給なんです。彼女の体力ももうギリギリだし…3人で懸命に働いて…まだ足りない」

「それに、この年になると肉体労働はすごくきついです。最近は関節が痛み、筋肉痛がとれないんです。この仕事ができるのも、あと2、3年くらいでしょうね」わずかながら上向っていた景気もここにきて急速に落ち込んでしまった。建設現場で日雇いとして働く人々

の不安は計り知れない。「教会によっては共助組合があるって聞いていますが、私の教会にはないんですよ。教会には私以外にも困っている人がいるのを私は知っているんですよ。ぜひ、作って欲しいと願っています」

職場でのいじめ

長身瘦躯、若いころ左翼の活動家だった面影を残すRさんはため息をついて、語り続ける。「私は仲間たちのなかで浮きあがっちゃって、嫌われちゃうんですよ。酒もあまり飲まないし、彼らの世界には浸れないんです。ギャンブルですよ。競馬、競艇、パチンコ。皆と話するんですよ。だけど、なんとなく変わった奴と思われちゃう。だから親方は辛い仕事を私に振り当てるんです。“剥離”（はくり＝コンクリートを機械でこわす作業）は本当に身体全体が痛んじゃう。過酷な重労働です。私がインテリに見えるから気に入らないんですよ」

読書家でもあるRさんの豊富な知識、妥協を許さない理想主義の姿勢が彼を異色な存在とし、そして差別、いやがらせ、いじめへと追い込むのだろうか。社会の中で自分らしく生きることができない生きにくさ、ありのままの自分を拒否される辛さと孤独感が伝わってくる。

差別のなかの差別

「日雇いの仲間のなかで…悲しいのは、自分が社会の中で差別されている下層労働者であるのに、あいつはどことこの出身だからといって仲間うちで差別する。自分より下だと思える人間を差別し、自分より上だといって逆差別することです。そういう心情に自分が落ちるんじゃないかと…」

金のない者に対するいわれのない差別、左翼活動家に対する警戒心、労働者に対する社会的差別など、幾重もの差別を体験している者の心底からの“叫び”である。

（取材班：牧野早智・野坂澄子）

あとがき

「1998年四旬節課題解説 “叫びⅡ”」編集部

今年も、昨年の『叫び』の続きとして小冊子『叫びⅡ』をお届けいたします。

昨年の『叫び』を読まれて、多くの人たちからいろいろご意見、感想が編集部に寄せられました。編集部では発行者である日本カトリック司教協議会社会福祉委員会・カリタスジャパンの教区担当者全国会議で『叫び』に対する皆さまのすべての“声”に耳を傾けてもらいました。

この“声”のなかには「わたしの、あの人の“叫び”を聞いてください」という悲痛な願いがいくつかありました。またすでに“叫び”にかかわりをもたれて、その人とともに“叫び”を上げられている方もありました。“叫び”の内容はさまざまでした。昨年の『叫び』でとりあげた“叫び”は多くの“叫び”の内のわずかなものです。現実の生活のなかで、悲しみ、悩み、苦しみ、あえぎ、うずくまり…、“叫び”をあげることもできない人たちが多くいることを教えられ、また多くの人たちが、人の“叫び”とともにいることを知りました。

そして、この『叫び』を発行したことにより、私たちは“叫び”のなかで多くの人たちが共通の思いで分かち合ったことを実感しました。

これは教皇ヨハネ・パウロ二世の「四旬節は、教会のすべての人が自分たちの周りにいる人たち、特に貧しい人とともに祈り、犠牲をささげる特別な時期です」と述べられていることに応えたものといえます。

そして、全国会議では、紀元2000年の大聖年にむけて、四旬節の間、日本のすべての教会が“叫び”とともにいるように、この小冊子『叫び』を今年も発行していくことを決めました。

小冊子『叫びⅡ』に収録した原稿は、昨年同様、ボランティアの方々にお願いました。2回目の方と初めての方が二人一組になって、面談者を探し、訪ね、歩き、録音テープを文字に起こし、原稿を書き、制限された枚数に収めるという作業には多くの時間がかかりました。この作業のなかで、面談者の“叫び”は一言でいい表せない、それぞれの一言一句にその人の生きた人生のしがらみがうかがえました。書き手と面談者の“叫び”との葛藤を通して、世界が違って見えてきました。“叫び”に耳を傾けるということは、その違った世界を知ることによって、私たちの心のなかに“違った世界”が幾重にも重なり合って、自分の世界だけではない広がりや深さができてくることをいうのでしょうか。

この小冊子を通して、“小さな人々”とされている人たちにキリストは何を行なうことを望まれているのか、自分は何ができるかを考えるための一助となるこ

とを願っております。

最後に小冊子の作成にあたり、多くの方々からご指導、ご協力をいただきました。深く感謝を申し上げます。特に、勇気をもって“叫び”をあげてくださった方々に改めてお礼を申し上げます。

紙面の都合上、十分な掲載スペースがとれず、取材のすべてをご紹介できないところがありましたことを関係者の方々にお詫び申し上げます。この小冊子につきましてご意見等ございましたら、折り込みのアンケート用紙にご記入のうえ、編集部宛お申し越しいただきましたら幸いです。

取材スタッフ

粟津敬子 石井弥生 申橋久仁子 近藤和子 手束たまき 中村智子
長島千鶴子 野坂澄子 場崎 洋 牧野早智 湯沢ヒロ

取材協力者

ぷらいす東京・生島 嗣 石垣ちか 小林賢吾 橋本宗明 丸山展夫
横川和夫

面談者との関係でご氏名の掲載を控えさせていただいた方もおられますこと
をお断り申し上げます。

表紙デザイン

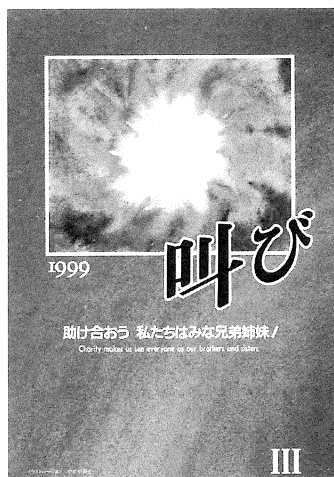
かすや昌弘

編集委員

森 一弘（社会福祉委員会担当司教） 場崎 洋（札幌教区）
古川 勉（横浜教区） シャールアンドレ・フロアラック（浦和教区）
松井忠之（福岡教区） 野坂秀男（事務局）

アンケートのお願い

昨年も多くの方々からご意見、ご感想をいただきました。本年はアンケート用紙を小冊子に折り込みました。アンケートの回答につきましては、社会福祉委員会・カリタスジャパンの資料として活用させていただきます。よろしくお願い申し上げます。



助け合おう 私たちはみな兄弟姉妹！

Charity makes us see everyone as our brothers and sisters

目 次

はじめに	
「叫び声を聞き、その痛みを知った」	7
1 虐待される妻（バタードワイフ）	
妻としての人格を踏みにじられて	88
2 離婚	
73歳の男を解放させない離婚	92
3 中途失明者	
すべてを失った者の叫び	97
4 神戸被災の高齢者	
腹が立つ、政府や役所の非情さ	101
5 重度身体障害者	
四十年間、家で寝たきりの生活	106
6 中高年の死	
バブル経済破綻の犠牲者が	110
7 戦争体験者	
癒されることのない戦争の記憶	114
編集後記	119

兄弟姉妹の中にあなたを

主よ、私たちの目が

兄弟姉妹の中にあなたを見いだしますように。

主よ、私たちの耳が

苦しむ人々の叫びを聞き取りますように。

飢えと寒さ、恐怖と抑圧に

さいなまれる人々の嘆願を。

主よ、私たちの心が

互いに愛し合うことを学びますように

あなたが私たちを愛されたその同じ愛で。

主よ、あなたの「霊」を

今日も私たちにお与えください。

あなたの名において

私たちが一つの心

一つの魂となれますように。アーメン。

「叫び声を聞き、その痛みを知った」

東京教区司教 森 一弘

神が人々の苦しむ姿に揺さぶられ、その心は人々の叫びに貫かれる。出エジプト記は、人々の叫びに動かされる神の姿を次のように記しています。「私は、エジプトにいる私の民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」（出エジプト3：7）と。人々の痛みを見て見ぬ振りができなくなってしまうわかれた神が、苦しむ人々を救うためにモーセをお遣わしになりました。預言者たちの書にも、救いを求めて訴える人々の叫びが充満しています。「ごらんください。顧みてください」「主よ、早くきてください」…。人類の悲痛な叫びに答えて神が御独り子をこの世にお遣わしになった。これが私たちの信仰です。

「罪が増したところには、恵はなおいっそう満ち溢れる」（ローマ5：20）とパウロは語っています。罪人を救う「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるか理解し、その満ち溢れる豊かさに与る」（エフェソ3：18）ために、苦しむ人間の現実をしっかりとらえて生きることは大事なことだと思います。

青少年の非行の低年齢化、家庭の崩壊、教育現場の荒廃、高齢者たちの孤独、金融機関の破綻と経済の行き詰まり、地球環境の破壊などなど。現代日本の隅々から人々の呻き叫ぶ声が聞こえてきます。神の存在も知らず闇の中で、重い荷物を背負って疲れ果て、迷い、倒れていく人々。神が、今、私たちに一番願っておられることはこうした人々の叫びに耳を傾けることではないでしょうか。

1 虐待される妻（バタードワイフ）

妻としての人格を踏みにじられて

「できれば私、主人より先に死にたいんです。主人の介護はごめんこうむりたい。いろいろあったので、つい、意地悪したくなる。でもそういう自分がつらいし、怖い。心が楽しくありません。教会の神父さまに、佐藤さんはいつも暗い顔をしてるっていわれます」

東京郊外、京王線沿線のP市に住む佐藤春子さん（73）＝仮名＝は、たまたまアキレス腱を切って入院中だった。「ご主人が障害があって大変らしい」という話を聞いていたので、障害者を持った妻としての叫びを聞くため訪れたら、話は意外な方向に展開していった。

「16年前に停年退職してから、主人は朝からお酒を飲むんです。大きなウイスキーのビンが4日でなくなります。経済的な負担も大きいし、肝臓も悪くしてるみたいです。そして機嫌が悪いと、『家の中が散らかっている』『おかずが気に入らない』と、私を殴るんです。私は自分の父からは一度も殴られたことはないのに…。聞いてもらえますか」と、春子さんはアルコール依存症の夫に殴られる“虐待妻”の心境を語り出した。

結婚したら夫はアル中に

春子さんは、夫の建夫さん（76）と、会社員で独身の長男（37）との3人暮らし。体育大学を卒業後、陸上のオリンピック選手になった二人の娘さんは結婚、お孫さんもいる。平穏な年金暮らしを送っていると知られていただけに、春子さんの叫びには胸をえぐられた。

「主人は戦争中、台湾にある特攻基地で、特攻機の整備兵として働いてたんで、爆音で耳が聞こえなくなったって言ってました。が、この間、ポツリといったんです。『実は上の奴（上官）に殴られたからだ』って。手術をしてもだめで、補聴器も役に立ちません。この30年

間、必要なことは紙に書いて夫に伝えてきました」

建夫さんは敗戦後、捕虜として中国に抑留され、1947年に復員。勤め始めた都内の区役所で同じ職場の春子さんと知り合った。進駐軍の米兵とDDTの粉を散布していた建夫さんの姿が印象的だった。

「結婚して両親を安心させたかったし、恋愛結婚っていうより職場結婚ですね。その頃はまだ耳もいづらか聞こえてましたが、口の重い人でした。5年間交際してから決めました」

春子さんは49年ころから近くの教会で公教要理の勉強を始め、52年に結婚した。その一週間前に受洗したが、建夫さんは反対はしなかったという。春子さんの両親の希望で、建夫さんは3人兄弟の長男だったが、春子さんの実家で結婚生活を始めた。もちろん、建夫さんの両親の了解も得たうえでのことだ。

「ところが結婚した途端、普段はおとなしい主人は酒を飲むと荒れるんです。何か気に食わないことがあると、ちゃぶ台を引っくり返して暴れ、私は恐ろしくて裸足で家を逃げ出したこともありました」

それでも1年後の53年には長女が、61年に長男、64年に次女が生まれた。春子さんは次女が生まれたのを機会に19年勤めた区役所の仕事を辞めた。退職金を加えとかなりの蓄えができていた。

女のいうことを聞けるか

酒を飲んでの夫の暴力は相変わらず続いたが、3人の子どもを抱えた春子さんは、どうすることもできず、子育てに専念した。その春子さんをさらに窮地に陥れたのは、夫の母親、姑との同居だった。

「私の父が亡くなった後、私が49歳のとき、今度は私の母が癌になり、あと1ヵ月の命と宣告されたとき、突然、未亡人となっていた夫の母が引っ越してきたんです。いきなり義弟が現れ、『お袋を置きにきた。兄貴に話してあるから』といって、義母と荷物を置いて帰っていきました。主人と二人の弟が勝手に相談して決めたことでした。私の母が死ぬと知って安心して移ってきたんでしょう。せめて母が死んでからにしてくださいって頼んだんですが、主人は『たかが女のいう

ことなんか聞けるか』って…。うまくやってくれの一言だけでした。でも私はうまくやれなかった。だまされたと思って…。本当に悔しくて、あの時の悔しさは、今でも忘れられません」

実母が亡くなり、その気持ちの整理もつかないうちに、義母との修羅場のような生活が始まった。

「当時70代の義母は強く、家にくるなり、『建夫は長男なのに、今までそっちに住まわせてやったんだ。お前にはまだ負けないよ』と、台所を取り仕切ったんです。『売られたけんかは買って返す』が口癖で、くる日もくる日も果てしない口論が続きました。最近、娘が『お母さんとおばあちゃんのけんかが激しくて、学校から帰っても家に入らなかった』と。確かに義母は料理が上手でした。だから主人は私が作るものが気に入らなくて、殴るのかなとも思ったりしました」

心の交流求めぬ夫

嫁と姑の激突に、夫の建夫さんは怒鳴って酒を飲むか、「お袋を連れて家を出る」といって脅すだけで、何もしてくれなかった。

「私には蓄えもありましたから、『そんなら出てください。子供は私が育てます』っていったこともありました。でも、夫は出ていきませんでした。夫の弟たちからは『お袋をいじめやがって、こんちくしょう』と電話で罵られて…。子どもたちはおばあちゃんへの気兼ねからか、私のことは見て見ぬふりをして、家に帰ってこなくなりました」

春子さんは家の中で完全に孤立した。逃げ場を求めて教会の事務所でも働かせてもらったこともあったが、夕方家に帰るのが嫌だった。

「当然、離婚も考えました。でもカトリック信者は、離婚、自殺、子供を墮ろすことは、やっちゃいけないと思って、我慢しました」

耐えたという事実だけを、淡々と話す春子さんの表情からは、我慢して良かったという喜びの気持ちは伝わってこない。

そんな生活が13年続いた。義母が86歳で他界した時、建夫さんからは何のねぎらいの言葉もなかった。

「義母が亡くなった時、主人は人前もはばかりず、ただおいおい泣

きました。私は自分が泣き虫なので、結婚前に主人に聞いたんです。『男の人はどういう時に泣くんですか』って。そしたら『一番大切な人が死んだ時だ』って言ってましたから、ああこういう時なんだなと思って…。私としては、ちょっと寂しかったですね。主人は母親には素直で、『いつもお袋を百まで生かすんだ』って言ってました」

妻をひとりの人間、同伴者として認めず、心の交流を求めない夫が見せる母親への強い愛着に、自立できない男の姿を見る思いがした。

悔し涙ばかりが…

義母の死の前後、ちょうどバブル期の地域再開発のため、春子さん一家は小切手一枚で半強制的に立ち退かされ、今のP市に移った。

「二人の娘は陸上の選手で次々にオリンピックに出場し、今は二人とも結婚して同じ京王線の沿線に住み、それぞれに子どもがいます。主人は、昼間は自転車で図書館や、娘の家へ留守番に行き、はた目には幸せそうに見えるでしょうけれど、実際はそうではないんです」

女を低く見て、春子さんと心を通わせようとしない夫とは、喜びも分かち合ったことがない。娘たちがオリンピックの選手になったときも、共に喜び合った記憶はない。

「最近も、孫の小学校入学祝いにと、主人は勝手になけなしのお金を10万もかき集めて、ひとりで娘のところに持って行ったんです。きつとうれしかったんですね」

そういうと春子さんは寂しそうに笑った。

「前にカトリック新聞に悲しみの涙はいいけれど、悔しくて泣いてはいけないうって書いてありました。でも私は悔し涙ばかり…。主人を救せない。それがまた辛くって…。一度、ただの一度でいいからあの人が謝ってくれれば、私も穏やかになれるのに…。もうすぐ主人がきますよ。毎日見舞いにくるんです。主人は優しい顔をしてるから私、損をしてるんですよ」　いとまを告げようとする私たちを見上げる春子さんは、長い間、胸にためていた夫に対する怨念を吐き出したせいかな、いつもより穏やかな表情になっていた。

73歳の男を解放させない離婚

平野一雄さん（73）＝仮名＝は、結婚後すぐに長男・次男を相次いで亡くした。その後、三男を16才の時に事故で亡くして以来、毎朝のミサを欠かさない。祭壇の一番近い所で祈りを捧げるが、聖体拝領はしない。離婚して再婚したことが罪を犯したことになると自らを戒めているからだという。

「今、私は神さまに人の何倍ものお恵みを頂いているけれど、この罪だけは許されたとは思いきらんとです」

73歳にもなるひとりの男を、そんなにまで追い詰める離婚、そして罪意識とは何なのか。別れた妻の側の言い分もあるだろう。だがここでは、秋の日差しがステンドグラスを通して柔らかな影を落す聖堂で、静かに語る年老いた男の叫びに耳を傾けてみよう。

貧しさから得た生活力

物心ついた頃、祖父が保証人の債務を負って平野さん一家は貧乏のどん底を味わった。食べるものがなくて、ひもじさのあまり泣き明かした記憶もある。親に負担をかけまいと、ワナを仕掛けて鳥を捕らえて売り、鉛筆や帳面はほとんど自分で工面した。

「どんなことがあっても自分の食べることだけはやっていけるようにと、子ども心にも貧乏のつらさを身にしみて感じていました」

当時、機械船を手に入れた叔父からの勧めで、操舵の技術を教わった。手先が器用だった平野さんは、わずか2、3日で覚え、小学校の卒業を待たずに叔父の船で働くことになった。やがて腕を上げ、稼ぎも一人前になり、親への仕送りもできるようになる。実家の生活は田舎奉公に出た姉と平野さんの肩にかかっていた。

「次々に生まれてくる8人の弟妹たちの学費は、私が面倒みたよう

なものです。あの頃の苦勞のお蔭で、体力的にも精神的にも耐え忍ぶ力がついたら今では思っています」

終戦後の昭和22、3年頃、元海軍病院の見習い看護婦で、当時、港の食堂で働いていた娘さんと知り合う。

「私には飯の盛り方が違うんですよ。『惚れた好いたばかりではいかん、まだ若いし、よく検討せんと』と周囲から反対されました」

当時、船の運搬は海軍施設部から民間に移行されて、先行きも不安だった。だが信者同士という安心感と、人よりも稼ぎがあったので、真面目に働けば何とかやっているとと思い結婚した。23歳だった。

神を恨み、妻を責める

だが、幸せな結婚生活は相次ぐ幼な子の死で打ち砕かれた。長男をはしかのため1才未滿で亡くし、その悲しみも癒えない2年後、今度は、よちよち歩きの次男が、妻の気付かない間に家から4、5メートル先の岸壁から海へ転落して死んだ。

「葬式が終わってから、一晩中土葬した次男のそばで半狂乱の状態で泣き明かしたもんな。何も悪いこともせんのに、なぜこんな目にあわんといかんのか！なぜ神さまは見放したのか！」

みやげを持って航海から戻る平野さんを迎えてくれた、あどけない次男の笑顔が浮かんで、心は乱れた。

「神さまなんて頼りにならん。お前の不注意であの子を死なせたんだ。子守りもロクにできんと」と、神を恨み、妻を責める思いを酒で紛らわす日が重なった。子どもを失った母親としてのつらさや悲しみを思いやりもせず、ひとり酒に逃げる夫に対して、妻は反乱した。

「妻は『あんたがそんなことやるなら、自分だって負けんことやる』といって、まだ幼い弟妹を長女に任せて出歩いていました。そんな生活が10数年続いたでしようか」

三男も事故死

ある日、平野さんは長年かけて貯めた金がなくなっていることに気付いた。妻が無断で全部銀行から引き出してしまったのだ。

「地元で悪い噂のある男の『金を増やしてやる』という甘い言葉にだまされて、結局女を食い物にするその男に貢いでしまうたんです」

だが平野さんは三男の成長だけを楽しみに頑張った。

『好きに下手無し』というけれど、だれかが教えたとでもないのに機械いじりが大好きで、とにかく私に似て器用な子でした。『早く仕事に就きたい』と自分で仕事を捜してきました」

特殊車両の仕事で、エンジンをばらして、始動できるまでに組み立てるテストを受け、普通2、3ヵ月掛かるところを、1週間で仕上げてしまった。中学を卒業するとすぐにその工場の本雇いとなった。

「給料を私に袋ごと渡して、『父ちゃん、小遣い取ってくれ』と、親孝行な子でした」

自慢の息子を語る平野さんの声は本当に弾んでいた。だが再び不幸が襲ってきた。「作業中にワイヤーが切れて、天井からショベルカーが落ちた」という知らせを聞いて平野さんは現場に駆けつけた。息子はほとんど即死だった。

「あんたにはだまされない」と妻

通夜の晩、平野さんは棺に添い寝をして、泣いて詫びた。

「とんでもないことをしてしまった。こんな素晴らしい子を授かっておきながら、親の身勝手にまともな家庭も与えてやれんで…。泣き寝入ってしまったもうろうとした意識の中に『父ちゃん、苦勞しないで仲良くやってくれ』という息子の笑顔が現れたんです。それから『お前にこの子をあずけてはおかれない』と声がしたんです。アッと思っ飛びおきました。神さまがおったんだ！」

妻や家庭をないがしろにしてきた自分に対する神さまの忠告に間違いないと思った。葬式で親類や部落の人たちに手をついて謝った。

「これからは心を入れかえてやりますと。妻には二人とも信者でもあるのだから、何もかも精算して新しく出直そうといったんですが、それまで夫として、もっと家庭的であってほしいと頼まれても、一向に変わらなかった私への愛情は既になかったのでしょうか。妻は『あん

たにはもう騙されない、お金の方が大事』といました」

三男の労災保険をめぐる、妻は弁護士を立て会社側に多額の慰謝料を要求した。

「2年間しか働いてないけん、世の中に通らんことをいうなど、妻を止め、私はそれ以上お金の要求はしないと会社側に誓約書を書きました。ところが妻は実母の権利を主張して『保険金を私に』と、会社と交渉し、一方的に離婚訴訟を起こしたんです。私が悪かった、思い直してくれ、といっても、妻の耳には入りませんでした」

感謝こそすれ罪は罪

次男が亡くなった頃から、妻が幼い子供たちを放って家を空ける様子を見かねた隣の娘さんが折りにふれ、子どもたちの世話をしてくれた。離婚が決まった後、平野さんは正式に隣家に結婚を申し込んだ。

「子どもたちは結婚を喜んでくれました。妻は洗礼を受けていませんが、教会の当番や共同墓地の掃除には協力しています。10数年前に、この教会が建つときには『回心して皆さんと立派な付き合いをするのなら、あんたの好きなように』と、信徒の中で一番多額の献金をさせてくれました」

自分の回心は、幼い頃の徹底した母の宗教教育のお蔭と思っている。

「母は信仰には非常に厳しい人で、公教要理をどれだけ覚えているか、覚えるまで食事抜きで暗記させられましたね。字が読めなかった人でしたが、公教要理のほとんどを暗記していた人でした。私は3年前に危篤状態になった時、一度だけご聖体を頂きました。こうして今、生かされていることを感謝こそすれ、罪は罪ということを絶対忘れちゃいかん。一生この十字架を背負っていきます」

ヨハネ福音書8章で、イエスは姦通した女性に「私もあなたを断罪しない」といったと記してある。イエスの基準は、倫理、道徳観で人を裁くのではなく、痛みへの共感、共有ではなかったか。平野さんが

公教要理で埋め込まれた罪意識から解放されるのは、いつなのだろう。

聖体拝領を固辞する平野さんの一徹の思いは、神への償いだけではなく、3人の息子への鎮魂の祈りのようにも思えるのだが…。

すべてを失った者の叫び

関岩雄さん(38)＝仮名＝は、糖尿病性網膜症で失明寸前の状態だ。遺伝的に糖尿病質とはいえ、自己管理ができなかったことが大きな原因といえるだろう。なぜ、そんなになるまで放っておいたのか。

話を聞いていくうちに、人間の意志ではどうにもならない宿命を負わされている人もいるのだという気持ちになった。こうした人の叫びを私たちは、どう受け止めたらよいのか。共に考えたい。

火事と父の死が続いて

「私は親の愛情とか介助というものを感ずることはできなかったように思っています。というのも2歳下の妹が、幼いころに肺炎が原因で下肢障害になったんです。父は身体不自由になった娘に責任を感じていたし、母親はギブスをつけた娘の世話で手いっぱい状態でした」

両親は薬局を経営。将来は娘に継がせようと考えていたので長男としては自由だった。

「家業を継がなくてはいけないという責任からは解放されていたんです。大学時代まで自由な自分の生き方を求めることができました。小さいときから妹を見ていて、人生について真剣に考えていた部分があったかもしれないですね」

18歳の時に洗礼を受け、神父である高校の校長に憧れて司祭になろうと、大学は神学部を選択した。だが大学3年の時、脳卒中で父が急死。しかも夏休みで帰省中に家が全焼した。

「火事と父の死が立て続けだったんで、母と妹だけを残して自分が神学部の学生としての生活を選択する余地はなかったんです。生計を立てるためには家業を継続しなければならないし、親父がお人好しで多額の債務を負っていたんです。迷う余地はなかったんです」

挫折して迷う人生

退学届けを出し中退した。その時点から関さんの人生の方向が大きく変わっていったように見える。

「今思えば、自分が司祭の召命に適していないということも感じていました。迷っていたというか。そのころ、私は傲慢だったし、身勝手だったし、自分が奉仕職に向いていないなと思ってました。人格的な欠陥を感じていたんです」

父親の死は突然だったので、法人登記のために相続をするかどうかなど、一週間以内に決定しなければならなかった。

「背負わなければならない負債については腹が立って、僕は家庭の中でトゲトゲしかったと思いますよ。父の跡を継ぎ薬局を続けながら金融機関との折衝とか営業関係の仕事をしていました」

家業の薬局経営には興味がなく、また神学部中退ということもあって、不安でいっぱいだった。

「商売をしていると、クリスチャンだと公言するのはタブーなんですよね、変わっている人と思われちゃうんです。だから日常生活と信仰生活との二重構造の中にいました」

自暴自棄な生活

仕事上の付き合いと信仰とに矛盾や苦痛を感じながらも、債務の返済や家族のために頑張った。残された親子3人での生活が始まった。

生活が軌道に乗ったのも束の間、関さんが28歳の年、1月には母が肝臓がんで、12月には妹が心臓発作で相次いで亡くなった。

「母の時は病床での緊急洗礼を私が授けました。妹は自分で希望し、その年の復活祭に受洗しました。1年のうちに家族二人を見送り、自暴自棄な生活になりました。もう家業を継続する責任もないし、その頃は真剣に自殺を考えていましたからね」

父の葬式をカトリックの様式で出したことで、親戚から非難された。親類には僧侶が何人かいて、仏教に対しての理解は深いがキリスト教を理解してくれる人は少なかった。

「現実には父の葬儀の時から、親類との間に、すき間ができていたんです。あそこは自分たちとは違う考えで進んでいくと。母と妹の葬儀の時も、『カトリックでのやり方を願っていないはずだ。それで浮かばれる訳はない。こういうことが起こるのは、お前の考え方が間違っているからだ』といわれました」

不摂生が重なって

家族を次々に亡くし、親類からは見離され、将来の希望もあいまいになり、どうやって生きていってよいのかわからなくなった。

「いろいろなことを続けていくことがポッキリ折れちゃったんです。放浪していたこともあり、親友の両親や神父さまたちに随分心配をかけ、しかられました」

そんな不摂生も重なって、脱水症状と糖尿病性網膜症で病院に担ぎ込まれるような状態で入院した。8年前のことだ。

「入院中に財産を処分して自己破産の形をとり、ある程度の線切りをしました。そのため退院後は戻る所がなくなってしまったんです」

かすみ始めた視力

ひとりになって家と職を転々とする生活が始まった。アパートを借り、とりあえずスーパーに勤めた。どういうわけか長続きしなかった。

二つ目の会社の東京出店に伴い上京。社長と常務の3人で共同生活を始めたが、社長の公私にわたる干渉に折り合いが悪くなり退社。次も同業の会社に勤務し、売り場の改造や営業に努力し系列店の中で一番の業務成績を上げた。

「ところが、この職場で同僚の仕事上の不始末が原因で連帯責任を取らされてクビになってしまったんです。そこで新聞販売店に住み込んだんですが、糖尿病はどんどん悪くなっていく。病院には行きませんでした。そうこうしているうちに、新聞配達中にバイクと接触事故を起こし足を骨折してしまいました」

職を失い病気とけがを抱えた関さんを引き受けてくれたのは、ある

教会の神父だった。教会に身を寄せ、労災や保険、障害の申請手続きをしていたが、肝心の生きる目標がつかめず、別の施設に移った。

「いつまでも教会にごやっかいになっている訳にはいかないと、切迫した状態で門をたたいたんです。その間に労災などの問題が解決すればいいと思いました。でも一年ほどいた間に視力が落ちてきて、眼の調子が悪くなってきて、その施設にも居られなくなりました」

中途失明者の恐怖

福祉事務所に視力障害のことで生活相談に行き、検査入院をした結果、障害者としての認定を受け生活保護を受給することになった。生活保護を受けることによって関さんの生活は安定してきた。

「視覚障害2級です。福祉事務所の担当の方から勧められて去年から自立生活援護センターに通っています。週3回そこで点字の初歩とか白杖を持つての歩行など日常生活の訓練をしています。また、三療（針・灸・マッサージ）の資格を取るための訓練センターに入る手続きを取ってもらっています。正業に就く自立の方向はそれしかないですから。でも慢性の内臓疾患を持っているので受け入れられるかどうか難しいんですね」

関さんは、中途失明者としての恐怖を毎日体験させられている。駐輪禁止場所に自転車が放置されているのに気付かず、ぶつかったこともある。最近では駅前のスーパー、肉屋、八百屋、銀行の人たちと仲良くなり、何でも気軽に頼めるようになった。

「教会に行くのも福祉委員にお願いしたらチームでピックアップしてくれます。ミサの雰囲気も隣りで伝えてくださってね。私の家族は共同体である教会だと思っんです。神様は曲線で、その人の最善の人生を描かれる。一人ひとり特別オーダーメニューで作ってくださる。これまでの紆余曲折は必要なものだったというほど親しみを感じています。必要なものを求めれば神様がそれに応えてくださる」

司祭の道を断念したことに深い挫折感を味わってきた関さんだが、最近、そうした自分を受け入れられるようになってきたという。

腹が立つ政府や役所の非情さ

6,400人を越える人たちが亡くなった阪神大震災から、4年が過ぎた。被災者向けの公営住宅が相次いで完成、仮設住宅からの転居が進み、仮設の入居所帯は減りつつある。だが転居したばかりの独り暮らしの老人が死亡しても周囲が気がつかなかったり、孤独感から自死を選ぶ人、そして子どもを亡くした喪失体験から立ち直れない母親たち…と、震災が人々に残した後遺症は、さまざまな形で続いている。

神戸市須磨区。山陽電鉄の駅から歩いてすぐの商店街の裏側。密集した住宅の中に震災で被害にあった山田里子さん（73）＝仮名＝の家はあった。震災のため家は倒れなかったものの、台所や風呂場の壁は崩れ、約600万円を銀行から借りて修復するまでの1年数ヶ月の間、姫路にある雇用促進事業団の仮設住宅に仮住まいを余儀なくされたひとりだ。家財道具はすべて失い、譲ってもらったものが多いという。小柄だが声は大きく、前向きに生きている里子さんの叫びを聞いた。

毛布一枚で寒さに震え

「あの時の恐ろしさは、今でも忘れられません。ダーンという音で真っ暗やみになって…。瞬間、玄関の戸を開けなければと、布団から玄関まではって行ったら、少し戸が開いているじゃないですか。助かったと思いましたよ。壁は崩れ、ガラスは破れ、足の踏み場がないほどでした。私の寝ていた布団には三段重ねのタンスが倒れていました。そのまま寝ていたら下敷きになって死んでいたかもしれません」

外に出たら、家に閉じ込められた人たちが「戸が開かない」と助けを求めている。2階に寝ていた長男（36）が、寝巻の上から里子さんのコートを羽織ったまま飛び出し、窓を打ち破って救出した。

「それからが大変でした。近くの学校に避難しましたが、たくさん

の被災者が詰めかけていて、ごった返していました」

やっと見つけた2階の階段の踊り場に新聞紙1枚を敷き、支給された毛布一枚にくるまり、寒さに震えて過ごす日が続いた。

「一番寒い時期でしょ。下から冷たい風が吹き上げてきて3日目に熱が出て、近くの人が救急車を呼んでくれて、緊急入院したんです。肺炎でした。一週間、床の上に敷いたマットの上に寝かされ、点滴を受けました。水も出ない、ガスもない病院に8日間いました」

退院後、親類の家で8日間世話になった。たまたま長男が仮設住宅に申し込んだら、運良く当選。姫路の雇用促進事業団の団地を転用した仮設住居に入居できた。3階建ての2階で、3畳と4畳に台所の狭い部屋。長男は4畳間で寝たが、里子さんは3畳間で、冷蔵庫と食器棚に狭まれながら睡眠をとる生活が続いた。

恐怖で家に閉じこもる

「仮設に入った最初の1週間は、ショックと恐怖で、だれも外に出られない。ただ家の中でじっとしているだけなんです。でも時がたつにつれて、隣りの人たちとも話ができるようになりました」

左隣りの人は母子家庭で、偶然にも里子さんと同じ鹿児島県の奄美大島出身だった。40代の母と子ども二人の3人家族。母親は神戸に仕事のため毎日出掛けていた。右隣りの人は60代の夫婦二人。洗濯物を干すためベランダに出たら、顔を合わせて、話が弾んだ。

「ちょうど春になって、部屋の窓から見える桜のつぼみがほころび始めていました。思わず、神さまは季節になると、こうして花を咲かせて私たちの心を慰めてくださるのね。ありがたいねえ、と声になって出たんです。お隣の奥さんがそれを耳にして、『奥さんの生き方と、私の生き方はまるで違うわ』と。それから毎日のように家に見えました。お二人は間もなく大阪に引っ越しましたが、『落ち込んで、悩んでいるときに奥さんから勇気付けられたことは忘れられません』と書いたはがきをもらったり、今もお付き合いが続いているんです」

家の修復に借金

里子さんは鹿児島県ではカトリックの信徒数がもっとも多い奄美大島で受洗し、25年前に神戸に移ってきた。

「主人は奄美大島の大きな造り酒屋の杜氏でしたが、息子の将来を考えて島を出て神戸に来ました。ところが息子が中学2年のとき、主人が亡くなりました。それから資本金なしで送ってもらった大島紬を行商したり、いろいろして息子を大学出すまで働きました」

8、9年前のバブル絶頂期に、現在の家が建っている土地10坪を地主に勧められ、親類などから借金して550万円で購入した。まだ5、60万の返済が残っているところへ今回の震災にあい、家を修復するため今度は銀行から600万円の借金をする羽目になった。

「その借金の手続きのため三宮の区役所に行ったんですが、壊れた家の写真の撮り方が悪い、張り方が悪いといわれ、三宮と姫路を往復させられたんです。政府や役所の冷たさに腹が立ち、情けなく思いました。借金をする私たちの身になってくれないんです。恐らく政府の人たちは自分たちが、同じ目に合わない私たちの気持は分からないんでしょうね」

里子さんは幸いにして自分の家に戻ることができたが、今も仮設住宅に住み続けている人たちがいる。その人たちは頼る人もなく、病気のため仕事もできず、死を待つしかない状態の人が多いという。

「私も姫路教会のボランティアの人たちと仮設に住む人たちを訪ねましたが、最近、何人も亡くなったという連絡を受けました」

相次ぐ仮設住宅の死亡者

心が痛むのは、最近亡くなったという30代の男性のことだ。里子さんがボランティアの人たちと訪ねたとき、その男性は仮設住宅に1人で生活していた。顔色が悪く、一目見て肝臓を壊していることが分かった。「入院を勧めたんですが、母親がリュウマチで両足を手術して入院しているため、自分が入院したら母親の衣類を洗濯して届ける人がいなくなるからできないというんです。その後、私がひとりで訪ね

たら何も食べてないと。生活保護を受けたらといたら、それもしただけど、区役所は受け付けてくれないと…。最近、亡くなったそうです」

里子さんの知っている70代の夫婦も、相次いで亡くなった。「ご主人は77、8歳で、花の手入れをよくしておられましたが、去年亡くなり、今年に入って奥さんも死んだというんです」 同じ棟でひとり暮らしをしている50代の男性は心臓病で、仕事ができず、80過ぎの母親から毎月送ってくる2万円で生活していた。「心配した人から、『病院代を払ったら生活できないから、カトリックの病院では無料で診てくれないだろうか』と聞かれ、教会の人に聞いたら、『手続きをしないと、すぐには診れない』といわれました。国や役所は、手続き、手続きとって何もしてくれない。私の部屋にはお茶と黒砂糖があるので、みんなが集まってくるんです。話は自然と何もしてくれない政府や政治家の悪口ばかりになって…。私も腹が立ってきて、それまでは縁故関係で自民党に入れていましたが、これからは絶対に入れてやらないと思うようになりました」

人間の優しさを実感

98年4月までに仮設住宅で孤独死した人たちは72人にもものぼっている。そのうち48人について死亡原因を調べたところ、心臓病の24人は平均年齢が72歳なのに、肝臓病の14人は、女性ひとりを除き残りは男性で、平均年齢は55歳だったという調査結果もある。多額の借金をし、家財道具を失ってしまった里子さんだが、今回の震災で得たものは、人間の優しさ、思いやりの気持があるたくさんの人たちと知り合いになれたことだという。「雇用促進事業団の団地には前から住んでいた人もいたんです。私の棟の一階に住む方たちは、入居した私にすぐに『神戸から来た方ですか』と声をかけてくださり、お茶やお昼ご飯に呼ばれたりしました。車に私を乗せて、梅の花を見に連れていってもくれたり、引っ越しの時も手伝ってくれて、本当に親切にしてくださいました。忘れることはできません。神さまはカトリック信者である

うとなかろうと、一人ひとりのなかにおられるんだということを実感
させられました」

40年間、家で寝たきりの生活

房総半島の先端、九十九里浜の海岸線に近い旭市の郊外にカトリック医療施設「海上寮療養所」がある。その一角にある重度身体障害者施設「聖マリア園」に、野中ともさん（53）は8年前に入所した。3歳の時に脳性マヒを患い、園に入るまでの40数年間は家の中で寝たきり状態だった。ともさんは、日本が敗戦した年に生まれた。当時、まだ脳性マヒの予防方法は確立しておらず、発病者は多かった。

ともさんもそのひとりであった。

突然、脳性小児マヒに

「栗をいじって遊んでいた頃でしたから、9月か10月の初めだったと思います。父も母も畑仕事で外に出ていて、生まれたばかりの弟と私が家に残っておりました。昼過ぎでした。遊び疲れた私は、庭においてあった縁台の上に横になっているうちに、いい気持ちになって寝てしまったのです」

午後3時頃。弟にオッパイをやるために野良仕事から戻ってきた母親が、ともさんの顔が異常に真っ赤になっているのに気がついた。

「びっくりしたんですね。『とも、どうしたんだ。こんなところで寝て』といいながら、熱があるということで、布団を敷いて寝かせてくれました。でも母は、『大したことはない』と思っていたのでしょうか。また野良仕事に出て行ってしまいました。私はそのまま夕方までぐっすり眠ってしまったのです」

夕方、ともさんはお手洗いにいきたくなくて目が覚めた。だが体が動かない。その時には、一家は全員、野良仕事から戻っていた。

「何か重しがのせられたようで…。『おしっこ、もれちゃうよ』と私が何回も叫ぶもんですから、見かねた姉たちが、助けてくれたのです。」

でも体全体がぐったりして、何もする気持になれず、その日はそのまま寝てしまいました」

手足が動かない

翌朝、熱は下がったが体は思うように動かなかった。母親は、ともさんを起こして台所に連れていき、座らせようとした。だが力が入らず座れない。母親が手を離すと前に倒れてしまう。驚いた父親は、町の小児科の医者に来てもらったが、その当時の医者は何も分からなかった。秋の刈り入れが終わり一段落ついた段階で、両親は千葉の大学病院の専門医に診てもらおうと考えた。

「千葉の大学病院に通うことは大変なことでした。千葉まで当時、汽車で2時間半かかりました。母は、朝3時半に起きて、私を連れていく父と叔父そして姉のためにお弁当を準備してくれました。始発に乗りました。私の硬直した足が席にふれたりすると、痛みで私が声をあげてしまうものですから、父は、背中に私を背負ったまま、汽車の中では立ち通しでした。検査の結果、脳性小児マヒと診断され、医者たちから『手遅れです。治療の方法がない』と宣告されました。発病してから数カ月も専門的な治療も受けず、自宅にいたからだったのでしょうね」

家にひとり残されて

「両親は『どうせ治らないなら、家族で見よう』と、家で介護することに決めました。私が、病院の検査や注射などで痛み、泣き叫ぶのを見ていられなかったということもあったと思います。五人の姉と兄たちがおりましたから、私を介護することができたのですね」

ともさんの体の成長は止まり、幼児のままだった。腰は板みたいに固く硬直し、手足は曲がって、自力で動くことが出来なかった。

「トイレ、食事、風呂など日常の世話のすべてを、家族が交代でやってくれました。家族には本当に感謝します。家族の助けがなければ、私はどうなっていたか分かりません。父も母も本当によくしてくれました。父は73歳で、母は88歳で亡くなりました。特に母の生涯は私の

ためだけの人生であったような気がいたします」

ともさんの話を聞いていると、思いやりに満ちた温かな家族の姿が伝わってくる。体の成長は止まったといっても、ともさんの頭は明快で、心は繊細で感じやすい。学校にも行けず、健康な兄弟姉妹や友達がどんどん成長していく中で、ともさんは、家の中にひとり取り残される辛さに耐えていた。

学校に行きたい

「幼いころは隣り近所の友達遊びにきてくれました。そんな時は障子を開けて、友達が庭で遊んでいるのを寝ながら見ていました。空の下で自由に遊べる友達は、私にとっては恨めしい存在でした」

学齢期になって、小学校入学のことで県の教育委員会から連絡があり、父親は役場に相談に行った。役場からは「学校に通うためには付き添いが必要です」といわれた。だが食べ盛りの大勢の子供たちを抱えた貧しい両親には余裕はなかった。「付き添いはできない」と断った。ともさんは学校には行けなかった。

「辛いことでした。文字は親や姉妹に教わりましたし、だんだん本を読むことができるようになりましたが、学校に行きたかったです。隣のM子ちゃんが、新しいランドセルを買ってもらったなんて話が私の耳に入ってくる時などは、本当にうらやましく思いました。友達は欲しかったです。小学校6年頃までは何人かは来てくれましたが、だんだん少なくなっていくますね。それを見るのが嫌で、私は自分から友達を避けるようになっていきました。友達が成人式を迎えたとか結婚式を挙げたということを耳にすると、とっても悔しくよく泣きました」

不安だった施設入り

姉たちも結婚し、家を出て行った。親が亡くなり、兄嫁が病気で急死してしまったことなども重なって、ともさんの将来について兄弟姉妹たちが集まって相談する日が続いた。

「その頃、私は40歳を過ぎておりました。『施設に預けられるそうだ』

という話は、私にとって大変なショックでした。私は家族以外の世界を知りません。家族以外の人と付き合ったこともありません。家族から離れるということ、そして見知らない人々の中に入っていくということを考えただけで、頭はパニックになりました」

ともさんの血圧は上がり、眠れない日が何日も続いた。福祉事務所の人が来て、いろいろと説明し、相談にものってくれた。

「混乱していた私に忍耐深く耳を傾けてくれました。それでなんとか施設に入る決心をつけましたが、でも不安でいっぱいでした。この施設に入ったのは、今から8年前、1991年の11月です」

広がった世界

「施設に入る前は、とっても不安でしたが、今は、入ってよかったと心から思っております。世界が広くなりました。いろいろな人と出会うことができました。職員の人たちが、私の体に合った電動車いすを作ってくれたことは、私にとっては、本当にすばらしいプレゼントでした。完成までに3年くらいかかりましたが、指導員に動かし方を教わって、自分で動かすことができたときは、本当に感動しました。車いすを操作し、初めて玄関を通り抜けて、広いお空の下に出たときの感動は忘れられません」

40年間寝たきりで、人の助けなしでは動けなかったともさんが、電動車いすの力を借りてではあるが、自分で移動できるようになったことは夢のような出来事だった。

今は施設に上手に溶け込んでいる野中ともさん。そんなともさんに「今までの人生を振り返ってみて、どうですか」と、話の最後に聞いてみた。

「今、貼り絵みたいなものをやっていますが、もっと早く施設に入っていればもっといろいろなことができたのでは…。40年間、無駄に過ごしたかな…」という言葉が返ってきた。

バブル経済破綻の犠牲者が…

「…今朝、屋久さんが亡くなったのよ、家のなかで階段から落ちて…」昨年3月末、出張先の北京から自宅に電話をいれたら、妻が、そういった。一瞬、私は絶句した。屋久武雄（57）＝仮名＝とは、大学時代からの親しい友人で、50代になると、互いに仕事が忙しく、年1、2回しか会わなかった。だが電話がかかってくると、家族に敬遠されるほどの長電話をする仲だった。

一昨年暮れ。年末の挨拶代わりに電話が、屋久と言葉を交わした最後であった。そのときに限って屋久は「電話をくれてありがとう」と、静かな調子で電話を切った。それから、まだ3ヵ月もたっていなかった。「お前、どうしたんだ」という言葉が思わず口をついて出た。

2日後の告別式に参列して、奥さんや友人など、彼を知る人たちから話しを聞くにつれ、彼は過労から心を病んでいたことを知った。学生時代はカト研をはじめ学生会のまとめ役をしていたが、亡くなる1、2年前から教会にも行かなくなっていた。

「なぜ、心を病んだんだ」「なんでおれに相談してくれなかったんだ」そんな問いかけをくりかえしながら、「お前の叫びは何だったんだ」と、私なりに彼の足跡をたどってみることにした。教会での告別式には、なぜか彼が勤めていた会社からの出席者はひとりもいなかった。屋久は茶の背広姿で棺に寝かされていた。参列者の献花にこたえる奥さん（48）は、放心したように表情がなかった。長男（25）と長女（23）は、泣きじゃくる次女（19）を両側から支えるように手を添えていた。

第2の人生へ華麗な転職

葬儀から1ヵ月後、私は港の見える高台にある新興住宅街の一角に

ある屋久の家を訪ねた。庭に面した日本間にジョニ黒が屋久の遺影と並んで置かれていた。その前で奥さんから当時の状況を聞いた。

「私がいり物から帰ってきたとき、階段の下にうずくまっていた主人を見つけたんですよ。昨年の5月ころから、ともかく、気力を失ってしまって、本人は不承知であっても、精神的にまいっていたから、どうしようもなく、辞めたというか、辞めさせられたというか…」

そう言えば屋久は1年ほど前、私に「ここ、毎週土曜日にカウンセリングに通っているんだ。…きれいな女性のカウンセラーだよ。…いや、気分転換の気晴らしに、話し相手としてはいいと思って」と話してくれたことがある。その後、この話は屋久の口からは出なかったの、私は大したことはないと思っていた。

屋久は大学卒業後、外資系の大手総合商社に就職した。大学時代の仲間のだれよりもいち早く、部長職の肩書きをもったエリート社員だった。

10年ほど前、大学の先輩の経営する現在の会社に引き抜かれた。企画力と統率力を見込まれて、役員待遇で迎えられ転職した。転職前、屋久は私にこう語っていた。

「会社は20人くらいの中小企業だけど、高齢化社会に向けて、老人ホームや一般家庭用の老人衣料、医療器具等の制作・製造・販売をしており、業績を倍にしてみせるよ」

転職の挨拶状にも「ここを第2の人生の生涯の職場とする」と書いてあり、仲間からは、会社内での昇進よりも、屋久らしい華やかな転身と、うらやましがられたものだ。

それから、屋久は以前にもまして仕事に打ち込んだ。会社が他県にあり、通勤時間を節約するため、会社の近くに自分でアパートを借り、単身赴任を始めたほどだ。

「試作品だが、高齢者用の高級イメージの家庭着があつてね。ブランド品にしたいのだけど、ネーミングを考えているんだ。知恵を貸してくれないか」といった相談を私にもちかけてくるなど、新しい仕事

に意欲を燃やしていた。社長からの誘いで入社したということで、責任感の強い屋久にしてみれば、社長の片腕になろうという自負心もあったことだろう。数年もたつと、会社は倍近い50人ほどの従業員数になっていた。このころになると、屋久は忙しくなり、私と会うことはほとんどなくなった。

バブル経済崩壊の波

だが、それから数年もたつと、どの企業もバブル崩壊の兆しである、業績の落ち込みが出始めてきた。屋久の電話もかつての勢いを失い、気弱な感じになってきた。

「どうも明るい材料がなくなってきたね。社長が、最近、自分の意見を聞かなくなって、自分を飛び越して部下に営業指示を出すんだ。部下は部下で黙りを決め込むんだ。役員である社長の奥さんが、社長に自分のことを告げ口をしているようなんだ。この景気では社長にも頑張ってもらわないと困るので、いろいろなのが気に入くないんだろう」

半年後、屋久は、営業の後始末、いわば未払い代金の回収の仕事に回された。俗にいう借金取りである。ひとつ片づけると、会社は古い勘定を持ち出してきては仕事を押しつけてきた。

「1年たっても、埒（らち）の空かない3千万円の回収があるんだ…、おれのいうことを聞かないで無理な商売をしたからだ」

会社は屋久に部下の不始末の責任をとらせたのだった。

屋久が嫌な仕事をさせられている頃、大学生になった長女が通学に便がよいからと、屋久の単身赴任のアパートに同居するようになった。奥さんは語る。

「娘が週末に家に帰ってくると、『お父さんは、いつも疲れたように帰ってくるよ。そういう時、何と声をかけてあげたらいいかわからなかった』と、父親の暗い姿を初めて見たと、しみじみ私に話をしてくれました」

社長の片腕であるという自負心が打ち砕かれ、職場での陰湿ないじ

めが、エリートコースを突っ走ってきた屋久に挫折感を与えたのだろう。屋久は、次第に袋小路に追いつめられていく。

死を知らない社長に

屋久がカウンセリングを受け始めたころだ。奥さんは屋久が精神的に落ち込んでいるという話を耳にした。

「人づてに会社の人から『屋久さん、最近、おかしいよ』と知っていることを聞いたのです。普段通り会社に出ているのに、何があったのか、わからないままに私は不安でした。それから2ヵ月後に退職しました。家でふさぎ込み、カウンセラーから精神科に通い始め、一度その病院に入院しました。でも、『おれは何でこんな所にいるんだ』と…。結局、病院から私が出してしまったのです」

屋久の告別式には会社からは何の挨拶も花輪もなかった。

「長女が葬儀が終わって、会社に出向いたんです。会社に一言いわずにおれなかったのです。すると、役員らしい二人の男が会社の外で応対して、『屋久さんが亡くなったことは、まだ社長は知らない』といったというんです。私も社長に面会を申し込みましたが、とりつく島もありませんでした」

屋久の死を知った仲間は一様に「過労死だ」「明日は我が身だよ」という。だが奥さんから話を聞き、私は、屋久がバブル経済破綻の犠牲者のひとりのように思っていたのだ。

企業の利益を上げるための歯車のひとつとして家族を犠牲にし、自分の体をすり減らして働かされてきた屋久。だが必要がなくなると、自分から辞めるか、病気になるよう企業は仕向け、切り捨てていく。屋久は何を叫び、何を訴えたかったのだろう。30年以上も付き合いがあった友でありながら、彼を支えてやることはできなかった無力な私…。屋久の冥福を祈るしかない。

癒されることのない戦争の記憶

「日本が戦争に勝つために、必要なことだと信じて疑いませんでしたね。悪いことをしたなんて、これっぽっちも思わなかった。恐ろしいことですよ」

その日は朝から土砂降りの雨だった。東京にほど近いS市のデパートの展示場で開催されている「戦争展」での証言者、相原武夫医師(82)＝仮名＝は、重い口を開いた。開業医の次男として生まれ、現在も東京で働いている現役の医師だ。

「41年に医大を卒業、K病院の内科で伝染病棟に勤務しました。医大へ入ったころには既に日本全体が軍国主義化していましたね」

伝染病棟勤務を希望したのは、いずれ戦地へ赴くにあたり、その知識が役立つだろうと考えたからだ。その年の10月に短期現役軍医を志願、旭川の歩兵第28連隊に入隊した。2ヵ月後、日本軍は真珠湾を攻撃して太平洋戦争に突入。翌42年、中国山西省太原・ろ安陸軍病院に赴任。伝染病棟と病理検査室付きの軍医として勤務した。

来るものが来たな

着任して1ヵ月半ほどたったある日のことだ。昼食後、将校食堂で病院長から「午後1時より手術演習を行う。全員解剖室に集まるように」という指示が出された。

「いよいよ来るものが来たな、と思いましたね。医大生の時、軍医は生体解剖をやっていると聞かされていたのでね」

既に何度か、伝染病で死亡した患者を解剖した経験はあった。だが、その日は、解剖室に向かう足取りが重かった。

「対象となるのは、普通の捕虜ではなく、八路軍と密通しているとされる人たちでしたが、実際はどうだったか…。ただ憲兵隊にさんざ

ん拷問されているし、そのまま帰すわけにはいかないので、その処分を陸軍病院に任されたわけですよ」

部屋の中には、陸軍病院の軍医たちと師団の軍医たち約20人が集まっており、その後ろに二人の農民の男が後ろ手に縛られ立っていた。軍医たちは冗談を言ったり、大声で笑ったりして平静を装っていた。

初めての生体解剖

「さあ、始めようか」という病院長の合図で、衛生兵が二人の男を促した。ひとは落ち着いた様子でベッドに横たわったが、他のひとは悲鳴を挙げて必死に抵抗を始めた。

「私の目の前で暴れていたんです。初めての生体解剖で、私も新米の軍医だし、勇気あるところを見せてやろうと思って、それで、前へ出ろ、と男の肩をつかんで突き出しましたよ」

手術台に押さえつけられても、暴れ続けている男に看護婦が近づき、「睡覺（スイジョー）＝横になりなさい」「麻薬給不痛（マーヤオケイプトン）＝麻酔をするから痛くないですよ」と、中国語で話しかけると、おとなしくベッドに横たわった。

「そしたら看護婦が私の方を振り向いて、下をペロッと出してね、『どんなもんです』といわんばかりにね。軍医たちが男の服をぬがせて全裸にしたんですが、さんざん拷問されたはずなのに、体のどこにも傷跡がなかったのが、不思議でしたね」

ひとりの軍医が腰椎麻酔を練習するため、看護婦から注射器を受け取り、針を刺そうとした。

「私が思わず、消毒は？と聞くと、隣りにいた別の軍医が『どうせ、殺しちゃうのに』と喋って大口を開けて笑ったんです」

手術の内容は、盲腸炎などのほか、砲弾の破片による挫滅創の場合に必要な腕の切断や、腹部に弾が貫通した場合の腸の縫合などだった。

「約3時間半に及ぶ演習の終わったころには、ベッドの上の中国人は体を切り刻まれ、息も絶え絶えになっていました。死んではいませ

んでした。その不気味さと、早く楽にしてやりたいという気持ちが混じり、私は軍医と二人で思い切り首を締めたんですが、呼吸が止まらない。すると衛生曹長が『麻酔薬を静脈に注射すればすぐだよ』と。その夜は、さすがに酒を飲まずにはいられませんでした」

あなたも私も買われた体

「そんなことが当たり前になっていたんですね。すべて日本が勝つため、負傷した日本軍の兵士を戦地に送り出すために必要なことだと、信じていたんですよ。手術演習に対して疑問を感じることも許されず、命令に背けば非国民になる。そうなる日本にいる家族の身に何が起こるか…。当時、朝鮮や中国の慰安婦たちの間で『あなたも私も買われた体』という歌がはやっていました」

覚えているだけでも、相原医師は計7回、14人を解剖した。

ある時は、病院長からホルマリンのような液体の入ったビン10数本を渡され、脳の皮質をできるだけ多く採取するよう頼まれた。日本の製薬会社からの依頼なのかどうかは分からなかった。

「新しく入ってきた補充兵の衛生教育のためにと、今度は私の意志で憲兵隊に依頼してひとりの中国人を連れてこさせ、20数人の衛生補充兵に見学させながら解剖しました。そのころには手術演習そのものに対して、何も感じなくなっていました。私は29歳でした」

2年後の1945年。終戦。相原医師は残留を決めた。

「東京は焼きつくされているし、急いで帰る必要もない。多くの日本人が残るなら、医者も必要だろうと思ったんです。47年に結婚して二人の子どもに恵まれましたが、51年1月、考えもしなかった捕虜収容所に入れられたんです。手術演習が悪だとは思っていませんし、すぐに帰してもらえと思っていました」

毎日が地獄

だが数カ月後、数回にわたって罪状告白を求められていくうち、「あれは罪だったのだ」と感じ始めてきた。そんなある日、43年夏に生体解剖した犠牲者の母親が書いた告訴状を見せられた。

「相原よ。私はお前に息子を殺された母親だ。あの日、息子は憲兵隊に連れて行かれた。私は憲兵隊の門の前で見張っていた。次の日、後ろ手に縛られた息子がトラックでどこかへ連れて行かれ、私は必死で追いかけたが、纏足（てんそく）の足で追いつくわけにもいかない。翌日、知り合いの人が、息子は陸軍病院で生きたまま解剖されて殺されたと教えてくれた。悲しくて悲しくて、涙で目がつぶれそうだった。どうか相原に厳罰を与えてくれるように政府にお願いしたい」

「この手紙を読んで、初めて私はなんてことをしたんだと思ったんですね。犠牲者に家族がいる、その家族の気持ちを考えても見なかった。それからは、もう毎日毎日が地獄でね。死ぬほど苦しみました。私の友人は苦しみに耐えて収容所で自殺しました」

戦争の真実を伝えたい

収容されて5年後の56年6月、相原医師は、反省の態度ありと判定され、起訴猶予となり釈放された。

「中国人は、こんな大罪人をよく許してくれたと思います。今でも私は、あのろ安憲兵隊の前の道をね、纏足の足でヨチヨチとトラックを追いかける老婆の姿が、まるで目のあたりにしたかのように浮かんでくるんですよ。本当に申し訳ないことをした…」

相原医師は、そういつてうつむき、涙をぬぐいながら続けた。

「こうやって自分の罪を告白し、戦争の真実というものを伝えていくことが、せめてもの贖罪だと思っているんですよ。体の続く限りね…。でも妻にいわれますよ。妻はよほど収容所でつらかったんでしょ。『あのころのことを思い出すから戦争の話はしないでくれ』って…。それに軍医仲間とかね、右翼団体からのバッシングは、そりゃあすごいもんよ。でもね、やらなきゃならんのです。これがね、戦争の本当の実態なんですよ。今でもね、日本全体が権力に巻き込まれて、黙っちゃう世の中になっちゃってるのは、あの時と同じですよ。変わってなんかいませんよ。これが怖いんじゃないの？」

年老いた医師の決して癒すことのできない心の傷。それでも毎年夏

になると、戦争体験を語り続けるために彼は重い口を開く。

編集後記

大聖年準備の年、1997年（キリスト）1998年（聖霊）1999年（御父）の3年にわたり、四旬節の課題小冊子『叫び』を発行してまいりました。『叫び』のテーマは社会福祉委員会・カリタスジャパンの全国教区担当者会議で“カトリック福祉の原点と共通理解”を論議することから生まれました。そして、この『叫び』を発行することによって、“叫び”の分かち合いの大切さを教えられました。

この小冊子は“叫び”の分かち合いに共鳴して下さった、多くの方々の勇気、犠牲、奉仕によって作成されてきました。そして、これを読まれた多くの方々がご自分の“叫び”を編集部に寄せてくださいました。今、“叫び”は、ひとつの波となりつつあることを実感しています。

本誌は、『叫び』シリーズの最後の『叫びⅢ』になります。編集後記は、取材、編集、制作に携わった方々に“叫び”をあげていただきました。

- ▽ 私の「叫び」は、『叫びⅢ』のために取材に応じてくださった方の勇気と、取材のテープ起こし、編集と奉仕して下さった方々のご苦勞に対して読者の皆様が人々の「叫び」に耳を傾け意義のあるものとするため、アンケートに答えていただくことです。(B.L.)
- ▽ 現代社会は大人も子供も大変な競争社会にあって、なかなか他者の「叫び」というものが聞こえにくくなってきていると思います。そんな中、お互いにそうした「叫び」をより深く聞く耳のあるところにキリストの福音も、より深く聞き分ける耳も成長していくのだと思います。(G.J.)
- ▽ キリストは物静かで慎み深い方です。目まぐるしい現代社会にいとキリストの声さえも見失ってしまいます。今日も私たちの周辺で小さな叫びがあります。私たちは社会の中で動いている世俗的な力に揺さぶられて生きていますが、その社会的構造下に見えない川が流れていることに気づきません。今回「叫び」の編集委員会にかかわりながら、つくづくそのことを考えさせられました。(L.P.)
- ▽ 多くの叫びを直接、間接に聴かせていただいたが、叫べない人の叫びがどれほどあることか。とても気になる。又、自分自身が周囲の人達の叫びの原因になっているのではないかと反省する昨今である。(G.B.)

- ▽ 長い時間、あるいは長い生涯、心の中に「叫び」を抱えて生きてきた方々にお会いしてきました。『叫び』シリーズは今回で終了しますが、叫びを抱え、闘っている方々は、いつピリオドを打てるのでしょうか。その日が、そしてほんとうの意味での豊かな社会、教会が1日も早く実現しますように。(V.G.)
- ▽ ひよんなことから「叫び」発行のお手伝いをした2年間。卒論以来の大作(?)でした。たくさんの方の現実の生活を見聞きし、私自身と重ね合わせて考えることができました。「お前の生き方はそれで良いのかい？」という声が、どこからか聞こえてきます。(X.J.)
- ▽ 取材の2日後、Sさんから丁寧な礼状が届いた。「心のうちをすっかり吐き出して、今夜はぐっすり眠れそうです」飾らずに、構えずに、淡々と語ったSさん。彼女は、今の恨み、諦めから、やがては次のステップへと進まれるような気がする。何もできない私にいただいた礼状に、希望と、寂しさの両方を感じた。(Z.W.)
- ▽ 「痴ほう症」のご主人を介護されている奥様の「叫び」の取材でお会いしている時には、比較的落ち着かれている時期でしたが、「私の人生ってなんだったのか」というお話を伺い共に心痛み、そのお気持ちをどの位お伝えできたかと反省し難しさを痛感致しました。この「取材」の体験をさせていただいたことを感謝しております。(J.Z.)
- ▽ 97年の「叫び」にサラリーマンの叫びを載せるために努力しましたが、対象の選定がむずかしかったことで実現しませんでした。しかし、不況によるリストラなどでサラリーマンの悲鳴が段々大きくなってきているように感じます。人ごとではなくなっています。何かの機会に取り上げたい。(W.Q.)
- ▽ 「聖なる話しを…」と叫んだSさん。聖なるものへの渇きは魂の奥底からの叫び。偏見と誤解を予想しつつも、「私は同性愛者です」と叫んだTさんの勇氣。「叫び」の取材で、叫ばれた方々を通して、私はあふれるほどのものをいただいた。徹底的に弱者と共に生きたキリストの姿が迫ってくる。私は感謝を叫びたい。(G.X.)
- ▽ 世間体や見栄、人間が作った教会内のべからず集を乗り越えて、「叫び」

をあげる人がいて、その「叫び」に我がことのように真剣に耳を傾ける人がいて、その役割が常に一方通行にならなければ、家庭が、社会が、教会が変わっていくような気がします。20世紀最後の充実した3年間を本当にありがとうございました。(P.V.)

- ▽ 人はそれぞれの苦しみを心に溜めこんで生きているんですね。いろいろな差し障りに縛られて「叫ぶこと」もままならないのです。種々の妨げを乗り越えて話して下さった方々の勇気に感謝します。語り手の心の痛みを共有し、語られた内容だけでなくその心の叫びを伝えたいと努めました。それは辛く厳しい作業でした。(D.Q.)
- ▽ 同性愛者の男性は初対面の私を信用し、受け入れてくれ、自らの立場を告白し、その苦悩を語ってくれたのである。この絶対の信頼を裏切ってはならないと思った。そしてこの問題をどう訴えてよいのか悩んだ。結果、多くの反発や反論が寄せられた。どのような立場の人の苦しみもその苦しみそのものに差別はなく、してはならないと思っている。たとえ教会で認められていなくても「あなたの苦しみは間違っている」と誰が決めつけられるだろうか。(B.V.)
- ▽ 冷害で不作の秋、青々した稲束を持って上京した農民は、農水省の前でスピーカーごしに国の援助を要求する。ある人がいった。
「本当に困っている農民は、上京などできないはずだ」
「声なき声」とは月並みだが、それをどう見いだすか、どう周波数を重ね合わせられるか。柔らかなアンテナこそ必要だ。(J.W.)
- ▽ 叫べない彼らの代弁者として、彼らの本当の心のありかをさぐりながら共に叫んでいくためには、思いこみとか推測ではなく心を裸にして心を共に彼らと歩んでいくこと。祈りとありのままにうけとめることが大切な鍵とと思っています。叫ばなければ苦しみも中途半端になってしまい、乗り越えるのも難しいからです。(X.D.)
- ▽ “叫び”をあげることは勇気がいることです。“叫び”を理解してもらうことは難しいことです。何に向かって“叫び”をあげるのか。そんなことを考えると自分には“叫び”がないのか。いや、“叫びたい”ことがあるのです。

また、人の“叫び”に疎くなっている面もあります。自分の心に素直に、

人の“叫び”に敏感になることの大切さを教えられました。(Q.W.)

- ▽ 取材したほかに、アンケートの中にも様々な「叫び」がありました。隅に追いやられ、小さくされた人々の断腸の思いで書かれた叫び、自分自身、もっと人との「かかわり」を大切に「いま何をしなくてはならないのか」「ともに生きることのむずかしさ」を感じています。(Q.P.)



苦悩と絶望の叫びに思いを

I am with you always, to the close of the age

目 次

- 1 日本の教会の新しい「うねり」に沿って ……………125
横浜教区担当司祭 古川 勉
- 2 “叫び” から「共に歩む」へ ……………127
京都教区担当司祭 森田 直樹
- 3 痛みを共有する人たちの“叫び”
『叫び』に寄せられた“叫び” ……………131
「社会福祉委員会・カリタスジャパン」全国教区担当者会（編）
- 4 「教会全体が自分自身を整えてほしい」
というアンケートにこたえて ……………143
新潟教区担当司祭 町田 正

資 料

- A 1997年『叫びⅠ』編集担当者座談会
“なぜ『叫び』が反響を呼んだか” ……………146
(カトリック新聞1997年6月29日号掲載)
- B 1999年『叫びⅢ』シリーズを読んで
わたしの“叫び”、隣人の“叫び” ……………155
(カトリック新聞1999年6月27日号掲載)

二〇〇〇年大聖年のための
教皇ヨハネ・パウロ二世の祈り

父よ、教会が新しい福音宣教に、

力強く取り組むことができるように強めてください。

わたしたちが生活を通してキリストを告げ知らせ、

この地上の旅路を、

光輝く天の都に向かわせることができるよう、

わたしたちの歩みを

聖霊によって導いてください。

キリストに従う者が、

貧しい人や圧迫されている人々に愛を示し、

困難にある人々と一つになり、

愛のわざを行うことができますように。

すべてにあわれみ深くなり、

わたしたちもあなたからの

救しと免償めんしょうをいただくことができますように。

▲三位の神、唯一であるあなたをたたえます。

日本の教会の新しい「うねり」に沿って

横浜教区担当司祭 古川 勉

これまで、社会福祉委員会・カリタスジャパン四旬節キャンペーンのひとつとして、『叫び』小冊子を、3年間にわたって発行してまいりました。

この『叫び』四旬節小冊子のねらいのひとつには、これまでの日本の教会の動きを、より一層促進させることにあったかと思えます。

1987年と93年に行われた、2回の福音宣教推進全国会議は、一言でいえば、信仰と生活、ひいては社会と教会の遊離を克服し、根本的に福音宣教というもののとらえ方を見直し、現実根ざした信仰生活、または教会の存在の仕方を、祈り求めてのことであったと思えます。

実際に、福音書を読んでも、イエスのいた当時のユダヤ社会の中で、まず「貧しい人」に福音が告げ知らされている（ルカ4：18）とあります。またそこで、どういう人たちが、弱い立場に追いやられていて、どんな苦しみ、屈辱、悲しみを背負わされているかが、イエスの言葉や振る舞いを見ることによって、多々、手にとるようにわかってくるものです。イエスの、まさに社会の真っ只中で現実に向かってなされた言葉や振る舞いによって、私たちは、いわば、イエスの信仰とはどんなものだったのかがわかり、ひいては、神の思い、言葉、行いを知るに至るものです。

そんなことを思えば、私たちの信仰生活や教会から発信される言葉や活動からも、互いに同様の現象が見てとられることが、ひとつの理想でもあります。また、そうした社会の実現のために働いたり、目的を同じとする様々な動きに協力、連帯していくことが教会の大切な使命のようにも思えます。

社会的に弱い立場の人たちは、とかく社会の隅へ隅へと追いやられ、その“声”や“叫び”も表舞台に出ることもなく、受け入れられることもなくなってきました。これは、社会の自然の流れでしょうが、教会全体としては、いつもそうした社会の流れに逆らって、弱い立場の人々、また、そこから発せられる“叫び”を教会の中心的動機とする姿勢が、絶えず求められているような気がします。そうした“叫び”があり、そこから動く時こそ、神の国建設への、新たな一歩が始まるともいえるのでしょうか。

世の中には、こうした“叫び”が声として上がる時もあれば、声が上がらなくとも、生きている、また生活している姿勢そのものが“叫び”としてとれることも多々あるものです。そうした“叫び”の姿は、前述したように、隅へと追いやられていくがゆえに、互いに積極的に目を凝らしていなければ、あるいは、敏感にそれを感じ取り、共感する感受性を養わなければならないのかとも思います。

これまでの『叫び』の小冊子に載せられている内容が、普段の生活からは遠い話だ、という声もありました。しかし、ここにある事例の多くは、私たちの親族、友人、隣り近所、地域社会で、すぐ身近にある現実です。まさに現実です。それを現実として見出し、共感していく姿勢がないと、そこから展開される信仰も、まさに現実に根ざし、現実から出発したものにはなりにくい、といえます。

そうした意味で、これからの社会福祉委員会・カリタスジャパンとしての、四旬節小冊子をはじめとする推進活動も、こうした“叫び”により深く接し、共感、共有を共に求めていくものとなるかと思えます。

復活祭を前に、あらためてキリストの言葉と振る舞いに思いをはせ、より深く、キリストの神の国建設の業に貢献できるものとなるよう祈りたいと思います。

“叫び” から「共に歩む」へ

京都教区担当司祭 森田 直樹

なぜ“叫び”なのか

私たちは大聖年準備の「御子の年」から3年間にわたって、多くの人々の“叫び”を聞きました。今、大聖年を迎え、新たな21世紀に向かって歩み始めようとしています。私たちは、新たな千年期を迎える前に、これまでの歩みを反省しつつ、今後の歩みの方向を見定める必要があるのではないのでしょうか。

“叫び”を取り上げてから、多くの人々からの反響がありました。なぜ“叫び”を聞かねばならないのか、というご意見もありました。また、「教会にふさわしくない」という意見が寄せられた“叫び”もありました。「教会にとってのタブー」に触れた“叫び”もありました。なぜ、あえて私たちが様々な“叫び”を聞かねばならないのかをもう一度考えてみたいと思います。

“叫ぶ”「聖書の民」

深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。

主よ、この声を聞き取ってください。

嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。

主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら

主よ、誰が耐ええましょう。

しかし、赦しはあなたのもとにあり

人はあなたを畏れ敬うのです（詩編130：1－4）

聖書の民はいつも神に向かって“叫ぶ”民でありました。一人一人

が抱える苦しみ、悩み、困難はすべて神に向かって叫び続けられた祈りでした。“叫び”が祈りそのものであったといっても過言ではないでしょう。

主よ、わたしの言葉に耳を傾け
つぶやきを聞き分けてください
わたしの王、わたしの神よ、
助けを求めて叫ぶ声を聞いてください。
あなたに向かって祈ります。
主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。
朝ごとに、わたしは御前に訴え出て
あなたを仰ぎ望みます。(詩篇5：2-4)

このような民の“叫び”を神は必ず聞き入れられます。

“叫び”を聞かれる神

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを つぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出す」(出エジプト3：7-8)

特に“弱い立場に追いやられている人々”の“叫び”に対して、神は敏感であり、彼らと連帯するようにと私たちに求めておられるのです。

寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く。そして、わたしの怒

りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。あなたたちの妻は寡婦になり、子どもらは、孤児となる。もし、あなたがわたしの民、あなたと共にいる貧しい者に金を貸す場合は、彼に対して高利貸しのようにしてはならない。彼から利子を取ってはならない。もし、隣人の上着を質に取る場合には、日没までに返さねばならない。なぜなら、それは彼の唯一の衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまって寝ることができるだろうか。もし、彼がわたしに向かって叫ぶならば、わたしは聞く。私は憐れみ深いからである。

(出エジプト22：20-26)

“叫び”に対する関心を

これは、昔話ではなく、現代の私たちにも向けられた神のことばです。今の私たちにとって、「寄留者」とは誰でしょうか。誰からも手を差し伸べられない「寡婦」や「孤児」とは誰でしょうか。私たちは世界の貧しい国々に対して「高利貸し」になっていないでしょうか。大聖年を回心と祈りによって準備するとは、今までの私たちのあり方を反省し、神のことばに従うことではないでしょうか。神ご自身が“弱い立場に追いやられている人々”の“叫び”に対して、敏感であり連帯されるように、私たちも多くの“叫び”に対して、決して無関心であってはなりません。

“叫び”が封じられた過去

残念なことですが、教会が今までの歩みの中で「すべての人の救い」を説きながら、ある人々を救いから排除したり、その“叫び”に耳を貸さなかった事実を謙虚に認めることも必要だと思います。私たちの無関心や無理解から、多くの人々を傷つけ、排除し、彼らを罪に定めてきたことを、大聖年を迎えた今、真剣に受けとめ、反省する必要があるのではないのでしょうか。多くの“叫び”があったにもかかわらず、「世俗のこと」、「汚らわしいこと」、「信仰に直接関係ないこと」と決

めつけて、叫ぶ場すら提供してこなかったこと、叫ぶ声すら上げることを認めなかったことを、素直に反省したいと思います。

人よ、何が善であり

主が何を前にお前に求めて祈られるかは

前にお前に告げられている。

正義を行い、慈しみを愛し

へりくだって神と共に歩むこと、これである。(ミカ6：8)

21世紀に向かって

21世紀に向かって、私たちは多くの“叫び”を真剣に受けとめ、「具体的に何かをする」ことは困難であっても、その“叫び”を共感をもって受け入れ、その“叫び”を共有することはできるのではないのでしょうか。

「貧しい人はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない」(マルコ14：7)と、主イエスは弟子たちに仰せになりました。もし、私たちの周りに、教会の中に、「貧しい人」、「社会から貧しくされている人々」、「貧しさや苦しみ、悩みを抱えて叫んでいる人たち」がいなければ、本当の意味で私たちはキリストの弟子であるのかどうか、真剣に反省する必要があるのではないのでしょうか。

『叫び』シリーズは一旦、終わりますが、これで私たちは“叫び”を十分聞き尽くしたのではなく、私たちが“叫び”を神に向かって上げ、一人ひとりの持っている“叫び”を共感を持って受け入れ、「共に歩むこと」は、これから始まるのです。

すべての人を受け入れ、救いに招かれる主とともに、私たちの信仰の歩みをこれから始めましょう。

痛みを共有する人たちの“叫び”

～『叫び』に寄せられた“叫び”～

「社会福祉委員会・カリタスジャパン」

全国教区担当者会（編）

はじめに

教皇ヨハネ・パウロ二世は、毎年、四旬節メッセージを發表されます。メッセージに呼応して、過去3年間にわたって社会福祉委員会・カリタスジャパンは『叫び』を發行してまいりました。それは、現代社会の現実のなかで、さまざまな問題で苦しみ・あえぎ・声をあげている人々を「カトリック福祉の視点でどのように考えるか」を日本におけるカトリック教会に提起することでした。そのためにテーマを検討し、まず抑圧され、差別された「小さい人々」の“叫び”を聞くことから始めました。

『叫び』の取材は、悩み、苦しみ、悲しみ…の声を記録するだけではなく、相手の立場に立って“叫び”を理解しなければなりません。一回の面談だけでは十分でなく、記録を見返して、2回、3回とお話を聞かせて頂いた方もあります。いくつかの出会いを通じて、“叫び”に耳を傾けてきた方々にとって、その“叫び”と自分自身がどのようにかわり合うかという課題が与えられました。

イエスがそばに立たれた「小さい人々」の“叫び”のかたわらに自分自身も立つという共感が生まれ始めました。共感とは、『叫び』を読まれた方々から寄せられた多くのご意見に現れています。同時に、心の中に生まれ、まだ言葉にならない多くの思いにも現れています。ご高齢の方々の震える字、障害者の方が必死の思いで書かれた字、初めて長い文章をお書きになったのでしょうか、そして、点字のものもあ

りました。

寄せられたご意見の中から『叫び』に寄せられた“叫び”を分かち合いたいと思います。

- I 毎年、小冊子『叫び』では、障害者がいらっしやる家庭、自分自身が障害を持っている方々の“叫び”を聞いてきました。その“叫び”は『叫び』にこだましています。

仲間外れにされて

「私も障害があり、そのため子ども3人の内、長女が同じ血を受け継ぎ生まれ、いままで多くのいじめを受けてきました」(1999年主婦)このような書き出しで“叫び”は始まります。「私も」と書かれているところで共感が読み取れます。次女が長女のいじめをかばい続け、彼女が「自律神経失調症」にかかりました。母親は、近所の方とのトラブルに自分から「心からのお詫び」に出かけます。しかし、「表面だけで受け入れてもらえずに、というか、余計に仲間外れにされ、悲しく思っております。いのりをしてはいるけれども、どうしても悲しみというか、よけいつらく思ってしまう今日このごろです。助けて下さい」(同)と締めくくられています。

教会は仲良しグループではなく

「私たちは一人ひとりが神様の子どもです。優劣がありません。けれども、この世には価値観があって、どうしても他人と比較する日常だと思えます。注意していても、このような傾向になる自分を残念に思いつつ、また神様の価値観に変えて頂くよう祈る毎日です」(1999年匿名)

一般的に分けられている障害者と健常者という分け方、障害の程度で苦しみを量ることはできません。特に「内部障害は外見には見えな

いので、教会内でも大変困ることがあります。…障害者の集いだからと参加してみると、身体障害のことばかりです。信頼して訴えたら、その方が親しい人に相談したりして、アツという間にうわさとして広がってしまいます。…秘密が守られません」(同)

教会の司祭も気をつけなければなりません。「神父様が教会内の有力な方や事務の方たちと固く結び付いて、特定の方たちばかり用いるようなことも見てきました。告げ口などによって主任神父様から無視されるとき大変辛いものがあります。弁明の方法がありません。神様は私を決して見捨てることはありませんが、現実の教会は仲良しグループの集まりのようです。居場所がないと感じることさえあります。祈っても祈っても寂しい。小さな活動をしていても、祈りのグループを作っても寂しい。これは何なのでしょう？聴いて下さってありがとうございました」(同)

教会は障害者との関わりをもって

「洗礼を受けて丸5年になりますが、私が気づいたのは、教会は、善意の人たちの集まりであっても、やはり、世俗の社会と同じだということ。療育センターに通っていますが、ここにいるほうが、ずっと居心地も良く、人とのかかわりを持てるのです。でも、私のいいたいのは、批判ではなく障害を持つ人がいわなければ、他の人々もわからないので、お互いに何をしてほしいか、何ができるのかをわかち合うことだと気づきました」(1998年匿名)

この方は、私たちに発想の転換を教えて下さいました。

「障害を持つ人たちが、最も求めているのはかかわりです。『大変だからこなくていいですよ』ではなく、どうしたら参加できるかを考えてほしい。そのために、典礼の時間や方法、日曜学校のあり方も、変えていく勇気を教会も持ってほしいと思います。障害を持つ人の世界は、非常に福音的だと私は感じており、障害を持つ人を受け入れることは、教会自身の福音化になると思っています。私は、この子と共に、

降誕のイエスを思っています。また、ルカ福音の『イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった』そして、『貧しい人々は幸いである。神の国はあなたがたのものである』イエスはいつも、私たちの高さにまで（いや低さにまで）下りてきてくださいます。私は、この『叫び』の企画は、私たち教会自身のために、とても必要な良い企画と思います。そして、これによって、自分たちの小教区自身の人の“叫び”にも気づくこと…ができれば、と思います」（同）

「いのりをしても満たされない」のは、その人に問題があるのでしょうか。助けを求める人にどのようにかかわるのでしょうか。教会自身が物事に対する視点の転換を求められているのです。

Ⅱ 『叫び』に励まされて、自分も“叫べる”ようになったというご意見が多くありました。

告解場での涙を今、外に向かって

「離婚されたことで、心を苦しめて、73才のお年を迎えられた方の“叫び”を読み、私が昔、告解場で涙を流して以来、一度も口に出したことの無い過去を申し上げる気になりました」（1999年女性）

『叫びⅢ』の「73歳の男を解放させない離婚」という記事に励まされてのものです。信者でない夫は5番目の子を妊娠した頃から中絶を迫ります。

「私は迫害時代に踏み絵を踏んだ信者もきっとこんな思いだっただろうと思ひながら、告解を繰り返して、主から受けるつぐないは、どんなにきびしいことであろうかとおそれ続けておりました。でも主がくださる罪のゆるしにすぎりました。…神がゆるしてくださったことを、自分が許さないのは、神の言葉を信じないことになる、自分の心に繰り返し『私の不信仰を助けてください』と祈り続けました」（同）

自分が叫んだ時、自分自身と周囲とのかかわりが変わってゆきます。

「私は、今は独居老人として地域の方々や、教会の方々のお世話になっておりますが、神が私に与えられたつぐないは、子どもたちと離れていても、自分ができるだけのことをして、私より淋しい思いをしている方々の話し相手になることだと思っております。繰り返しておそってくる不信感に苦しめられた日々が長かったため、いつの間にかそのしがらみから解放されていた自分に気がついた時、神の恵みの大きさにただ感謝致しました。これからどのようなつぐないを私に求められるかわかりませんが、すべてをみ旨にまかせ、主がととのえてくださる十字架を感謝のうちに背負うことができるよう心がけて生きていきたいと思っております」(同)

自分の“叫び”を神様にむけて

「癒されることのない戦争の記憶」(『叫びⅢ』に収録)の記事に励まされてのものです。

「世の中には、私をふくめ心に叫びを持って人にはいえず生活をしている人たちが、数かぎりなくいらっしやると思います。そんな時神様を知ることによってその叫びを、神にむけることができればどんなに幸せかと思います」(1999年匿名)

この方は、今でも自分の苦しみをご主人の耳に入ったり、行動で感じられたら大変な状況に置かれて、「今は、自分を殺して主人を怒らせないように、いうままに、なすがままにしています。でも、(心の中ではいつも反発していますが)教会でも幸せな家庭の奥さんのような顔をしてふるまっています。これは神様の教えに反したことですが、どうすることもできませんから!!でも私の叫びは、私がガマンすればすむことですが、あの戦争の記憶の方からくらべれば問題にならない苦しみです」(同)

この方は、これからもずっと我慢の生活をされるのでしょうか。叫ばれたことで何かが変わっていくことを祈らずにはられませんでし

た。

今まで、誰にもいえなかった“叫び”

次の方は、幼い時から父親に性的ないたずらをされてきました。その頃の気持ちを次のように表現していらっしゃいます。

「私は、こんなことを母に話したら、父と母は離婚してしまうと思って、ずっとずっとひとりで黙り続けました」(1997年匿名)

「中学生ぐらいになった時、そのことがどのようなことであるか分かってきて心底苦しみました。毎日が憎しみと怒りにあふれ、泣き叫び、…毎日、自分のことなど誰も必要としてない、生きていても価値がない、私が死ねばみんな喜ぶ、死んでやろうじゃないかと思いましたが、死ねませんでした」(同)

少し大きくなって、この方は、母からどうしてそんなに父を憎んでいるのか問われて、昔のことを話します。

「母は特に動揺しませんでした。その夜、母から声がかかり飲みにゆきました。私と母はその頃から友達のようになりケンカも少なくなりました。私の中でもその頃から、そのことへの囚われ、縛られた気持ちから解放されてきて、父のことを、少し赦せるかもという気持ちに向いてきました」(同)

その後、この方は幸せな結婚生活を送られています。

「誠実な人柄の主人と出会ったことで私の人生は大きく変わりました。ずっとずっとあこがれ続けた幸せな家庭に恵まれ、生きてよかったと心から喜びを感じることができました」(同)

「今でも私は他人と話すのがこわく、…父とも表面で何事もなかったかのようにですが会話はほとんどしません。心の中では父の弱さを許したいです。今でもどうしようもなく苦しい時も（昔のことを思い出して）ありますが、神さまがいてくださるので大丈夫です。そして夫と子どもたちがいてくださるので」(同)

この方は、ご意見を寄せていただいた春に洗礼を受けられると書い

てありました。

「思わずたくさん書いてしまって申し訳ありませんでした。このような話は、心の中で蓄積されていたことで全体的に書いたり話すのもこれが初めてです。醜い思いをなるべく思い出したり書き出したりしなくなかったのが、感情的なことや、細かい心の描写や人にいわれて傷ついたりした、いろいろな苦痛をなるべくはぶいて書いたつもりです。大人になってから、誰かに、どこかで、書いてもらいたいと思う気持ちが強くなってしまい、書いてしまいました…。誰にもいえなし、また、いえることではないゆえに、誰にも分かってもらえず苦しかった。子どもの頃、誰か心から愛深く思ってくれる大人に出会いたかった」(同)

Ⅲ 小冊子『叫び』の取り上げ方に対する率直なご意見もありました。今日の価値観が多様化した中で、教会の使命を改めて感じさせて下さいます。また、ご自分の人生を振り返るきっかけにもなっています。現在の自分がいかに神様とのつながりを感じているか、私たちに分かち合いのテーマを与えて下さいます。

長く大きな試練を与えられて…

「『叫びⅢ』を読んで不快感と同時に強い腹立ちを感じました。とてもはがゆい思いがしました」(1999年匿名)

この方は、苦学して短大を卒業され栄養士として堅実な人生を歩まれますが、ちょっとした過ちから一夜にして性病にかかってしまいます。また、ストレスから精神病になり、それを隠して二児の子どもがおられる方と結婚しますが精神病の再発から離婚されました。

「その後借家を借りて、老人介護の仕事を15年つとめ、社会の偏見と闘いながら一生懸命働きました」(同)

長い間の重労働のため、脊椎、腰、両膝を痛め、結局解雇されま

す。

「週一回の精神科、整形外科への通院、そして教会、そして2週間に一度の食料の買い出し、(実家の兄が車できます) 以外は、借家に病身を横たえています。キリスト教の洗礼は8年前にプロテスタントで受けましたが、3年前にマザーテレサに憧れてカトリックに改宗しました。お友だちは教会では期待したほどできなかったけれど、神様が共にいて下さることを信じておりますので大変幸せです」(同)

この方は、今ご自分の人生を振り返って次の様な思いを持っておられます。

「生まれたときから不幸になるために生きてきたような私ですので、すべてを失って、来し方を振り返ってみますと、その中に善意に満ちた人々が私の心の中でキラ星のように輝いていることに気づきます。神様は私に長く大きな試練を与えられた、私が強情なため、神様との出会いが遅れた、人々が大きな失敗、不幸な人生を歩まないために、カトリックはもっと積極的に布教すべきだと思います」(同)

結婚は砂漠…、36年間の末に

「私はこの体験でいただいた亡夫を通して、初めて神の愛を感じ、イエス様はいらっしゃる(ことを実感しました/編集部加筆)」(1999年女性)「昭和10年代、小国民として大戦争の渦中、心身の鍛錬の中で愛国心を(忠誠)を培われ一応、順応性と忍耐力のまま、月並みの結婚をした者です」(同)

結婚相手は、世の中のこと、自分の生活のことなどの嫌悪感から酒に逃避し、アルコール依存症になりました。

「結婚は精神的(砂漠)、私たちは別れの状態ですね。そのままずるずるの36年間、やがて主人は回復不能者として病院直行です。目も、耳も体全体ストップ、彼の介護についての筆舌に尽くせない苦労話もう書きたくありません。入院、それから実に不思議なことが起こったのです。明日? 明後日? 葬式? そしてやっと私はこの家から解放さ

れる。(3人の子どもは社会人)それでこの家を初めて去る決心でした。本当にそう思いました。神は、6ヵ月入院、付き添いをお命じでした。そうです。かよわい命の綱をたよりに彼は生きているのです。36年の無意味な結婚生活に、この期間見事に花が咲き実ったお話をお聞き下さい。それから真の愛の生活が始まったのです。全く不思議なことです。退屈まじりの私に聖書を取ることを神はお命じになり、ベッドの主人に毎日毎日声を出して読んであげることをお命じになり、会話するようにお命じになり、頭から足の先まで指圧をお命じでした。地上を去る2ヵ月前の崇高な主人の顔はかつて見たこともなく、威厳に満ちていました。かくして、あれ程、憧れていた洗礼の恵みをいただいたのでした。霊名ヨハネとして。神に感謝」(同)

生きることの真剣さを

次の方のご主人は障害者の通所施設に長く勤務しておられました。人間関係から退職されました。15社の面接を受けられましたが、現在日本の雇用状況の中で採用されず1年間は全く失業でした。

「昨年12月に決まった会社には、縦の関係になじみず自分から退社、この時ようやく自分には以前のような障害者の方々とのかかわりしれないということに立ち戻ったようです。その間私の方は、他の人に話をするとう痴になってしまいそうで、人と会うことは避けていました。だから教会に行くことだけでした。主人は家の中のことはよく手伝ってくれ、買い物、都合がつかない時は掃除等細かくしてくれ、感謝はしています。でもずっと主人が家にいることに、イライラした時期があり、けんかもありました。私の方が、カリカリしていたことが多いようにと思うと申し訳なかったと思います。でもこんな私を主人は受け入れてくれていました」(1999年匿名)

今、ご主人は小さな通所施設に就職が決まり、実習中です。「この一年を振り返って問われていたことは、私自身の神様への生き方、姿勢、生温さのなかに浸かっているのは分からぬことを、生きることへの

真剣さを、身をもって知る機会だったと思います。私の人生の中で最大の出来事でした。どうか乱筆、乱文をお許し下さい。思いつつ書きました。この機会を与えて下さってありがとうございました。(同)

『叫びⅢ』に書かれた人生と私の人生

この方は、点字でご意見を寄せられました。小冊子『叫び』は、点字に翻訳され、またテープに録音され、多くの視覚障害者の方々にも読まれています。

『叫びⅢ』の点字版を読ませていただきました。ありがとうございます。『虐待される妻、妻としての人格を踏みにじられて…』や『中途失明者 すべてを失ったものの嘆き』を読んでの私の思いです」(1999年匿名)

「胸は千々に乱れ、19歳で見合い結婚した相手が酒乱とは夢にも思いませんでした。昭和15年、家庭の事情で上級学校に行けなかった私、ひとりで働きながら勉強しようと東京に出ましたが、16年世界大戦となり、勉強は思うようにいきませんでした。たったひとりの兄が海軍航空隊に出征したため故郷に帰り、よく病弱な母を看、幼い妹弟を看、今考えても完璧な健康体でよく働きました。その働き者の私に目を付けたのが東京から疎開していたご夫婦、いろいろ条件を出して結婚しました。けれど全部適うことはありませんでした。結婚後まもなく暴力を振るわれて意識不明となり、5分遅く発見だったら命がなかったそうで、生まれつき健康な体なのか、命は助かりましたが、酒乱の主人は治らず、生活費も思うようにくれません。初めての子どもを出産しても全部私の親が面倒みてくれました。実家で息子を出産し、1ヶ月後には母は48歳の若さでなくなりましたが、主人はお葬式にもきませんでした。30歳で失明しました。なにしろ『医者に金をかけるくらいなら酒を飲んだ方がいい、子どもの教育に金をかけるくらいなら酒を飯んだ方がいい』と主人。でも主人が肺癌になり入退院をくり返しても、私はマザーテレサの言葉、“路上で行き倒れの人もキリストと

思い、手厚い介護をする”という言葉聞き、最後まで看取ったつもりです。私自身いろいろ積み重ねから病に冒されても、自分を“これが神様から与えられた役割”と思うようにしました。大正生れの私、失明しても習い事は許されず、点字も仮名タイプも独学です。下手な点字お許し下さい」(同)

この方のご主人は4年前に亡くなりました。知り合いから「あなたの人生波乱万丈。あなたはいつも明るい、苦勞なんかなかったみたい」(同)といわれるそうです。この方は「皆、神様のおかげ、多くの方に助けられているから」(同)と答えるそうです。現在は多くのお孫さんに恵まれています。

『『叫びⅢ』の「虐待される妻」の春子さん、娘さんたちのお孫さんがいらっしゃる。顔を見ることができて嬉しいでしょう。私、末息子の顔は一度も見たことはありません。…中途失明となると世間では何もできない人と思われるようです。トンカツを揚げるのよ、といえど不思議に思われる。ミシンをかける、といえどまた不思議そうに思われる。でも私は火傷も、ミシンで怪我をしたこともありません。失明するまで洋裁和裁をやっておりました。74歳の現在、生かされていることは神のみ摂理、波乱万丈であっても常に守られているということに感謝し、無理は禁物と与えられた役割を続けようと思います」(同)

毎年100通を越えるご意見をお寄せいただきました。いかに多くの人が、心に“叫び”をもっているかを痛感致します。分かち合える場が作られ、もっと多くの発言の場が与えられ、教会に取り入れられることを期待しています。(アンケートからの引用文は原文のままです)

本稿は1999年10月19日～21日に開催された定例全国教区担当者会議で事務局に寄せられた『叫び』アンケートを読み合わせ、分かち合った内容をまとめたものです。

全国会議に参加された各教区の担当者、代表者は下記の方々です。

森 一弘司教	森田 直樹 (京都)
場崎 洋 (札幌)	後藤 進 (大阪)
田中 丈夫 (仙台)	原田 豊己 (広島)
町田 正 (新潟)	多田 洋 (高松)
矢吹 貞人 (浦和)	中村 信哉 (福岡)
前田千恵子 (東京)	川上 忠秋 (長崎)
古川 勉 (横浜)	牧野 早智 (社会福祉委員会)
リチャード・シゼフスキー (名古屋)	野坂 秀男 (事務局)

「教会全体が自分自身を整えてほしい」 というアンケートにこたえて

新潟教区担当司祭 町田 正

『叫び』シリーズは、教皇ヨハネ・パウロⅡ世の四旬節メッセージのテーマにそって、その理解を深めるために編集されてきました。巻末の用紙で寄せられたアンケートは総数で420通をこえます。この反響の大きさに喜びながら、これをどのように受けとめたいかが、私たちの課題として残されました。

教会への期待

教会に対する期待がたくさん述べられました。「どん底にいても求めさえすれば、救いの手が差し伸べられるかも知れない」という思いが多くの人に届いた結果といえましょう。自分も“叫ぶ”ことができる。“叫び”が受け止められるかも知れないという期待の表れといえるでしょう。

ただし、教会への期待は多くの場合、現状に対する不満の形で表現されています。「若者の教会離れ」「他人への無関心」「典礼」「相談に乗って欲しい人がとりつく島がないように感じる教会」等で『叫び』のⅡ、Ⅲ号と次第に投書の数が増え、その内容が濃くなってきているように思います。

司祭についての要望或は率直な批判もいくつかありました。お書きになっている本人の事情は読んで理解したつもりですが、批判の対象になっている司祭が数年に亘る大変困難な仕事に携わっていたことを、私は知っています。他に厳しい言葉で責められている司祭は土地柄が全く違う所に転勤したばかりで、お互いの出会いがこれから発展していこうという状況を考えながら、再度読み直してみて、信徒同士、信徒と司祭、つまり教会内部の一致のために時間と忍耐も必要でしょうが、基本的に人間として互いの尊敬に基づくかわりを忘れ

ないようにしたいものだと思います。神の民として一致の基本は、秘蹟特に聖体と赦しの秘蹟、又神のみ言葉を通しての交わりであり、それが文字通り人と人、心と心を結ぶという体験が望まれます。

もしかすると、今日の日本の教会にこれが足りないのだろうか、その意味からすると霊的ケアを求める“叫び”がこのように表現されているのかという思いでアンケートを読み取りました。

“叫び”と小教区の現状、今後の課題

教会は小さい人々を大切にすべきですが、その現実通常、司祭がひとり、しかも広い地域の宣教司牧を受け持ち、多種多様な要望に対応していかなければならない。小教区、担当する組織の仕事、多くの人々の善にかかわる判断を下し、多くの場合自分で直接携わらなければならない。多くの場合、日曜のミサの後で、相談を受けたり、打ち合わせや会合、転出転入の手續依頼等が田舎司祭に一度に迫ってくる。傍らを、声をかけて欲しい人が通り過ぎて行く。

平日にできることは平日にまわして、フリーで多くの人に対応したい。それでも今の小教区制度のもとでひとりの司祭が多様なニーズにどのように対応できるのでしょうか。

その意味で、このアンケートから垣間見る多くの人の望みに応え、よりよく教会が使命を果たすことができるために解決しなければならないことがあるはずだし、それが何かを究めていかなければならないと思います。せつかく、自分たちにこのような場が開かれたと理解し、現に徐々に心を開き始めた“叫び”の場が、絵に書いた餅で終わることのないように。叫んだがこだまも返ってこないと感じさせるようになってはならないでしょう。この“叫び”のうねりの後で、「甲斐のないことだった」と心を閉ざす人を出してはならないでしょう。

カリタスジャパンが使命に燃え、“叫び”を聞き、共感し、共に歩もうという思いで『叫び』シリーズを始めましたが、“叫び”に応えていくためには「カリタスジャパン」という組織の一部門の域と対応力を超えています。

今日の人々に応えることができるように、教会全体が自分自身を整えて欲しいと、アンケート全体が叫んでいると思うのです。

“なぜ『叫び』が反響を呼んだか”

《出席者》

社会福祉委員会・カリタスジャパン教区担当者

浦和教区担当 浦和教会主任司祭

シャルルアンドレ・
フロアラック神父

札幌教区担当 教区本部事務局長

場崎 洋神父

福岡教区担当 教区本部事務局

松井忠之神父

横浜教区担当 由比ヶ浜教会主任司祭

古川 勉神父

(司会者)

社会福祉委員会担当司教 東京教区司教

森 一弘司教

社会の原点として… “叫び” に耳を傾ける

森 今年の四旬節キャンペーンの課題小冊子は“叫び”というテーマでしたが、個々の生きた人間の“叫び”を取り上げたら、今まで以上に大きな反響がありました。どうして、こんなに反響があったのか、皆さんの感想、印象を自由に話してください。

松井 小教区で聞いたところでは、取り上げている問題が身近な話題ということで、自分たちとかかわりがあったり、自分も同じ体験があるので共感を覚えたという声がありました。また、これを読むことで、偏見をずいぶん持っていたことに気付かされたという話をしていました。

フロアラック ある青年は「初めから終わりまで読んで、今までこういうものに気が付かなかった。だから目を開かれた」と言っていた。

それから、言葉が悪いかもしれないけれど、専門家でない人が取材したことがすごく良かった。問題は、この“叫び”が聞こえるかどうか、聞いてどうしようかということ。“叫び”を聞いて、「何かできないか」と考えた人もいる。

古川 今までは四旬節の小冊子に限らず、教会に届く雑誌は、教えなきゃいけない、お説教しなきゃいけない、教会のあり方はこうであるから…、と先走っていたと思います。この『叫び』は、教会は本当に知らない世界に、もっともっと深く入って、神の国の視点、信仰のあり方、教会のあり方というものをここから生み出していく、そこから教えていかなければいけないといったことが表れていたの、皆の関心と呼んだのではないのでしょうか。

場崎 実際に、取材者が痛みを持っている人の所に駆け寄って、聞いて理解する。これは聖書のキリストの生き方と同じなんですね。キリストが憐れみの心をもって、哀れに思っただけで抱擁したとかに近い感じがしました。それが反響を呼んだのではないのでしょうか。

森 これまでは、教えることが先走っていて、教えで人を変えていくという傾きが強かったようですね。

フロアラック 確かに今までは、こういうふうにしましょうと教えることで、それから何かできないか、しなければいけない、と…。『叫び』を読むことで、自分たちに何が出来るか、自分たちで感じて、結論を出すことができる。

場崎 上からというのが、教え方にしても確かに強かったですね。でも、取材者がしたように、実際に、小教区や地域の中に入っていくことが、すごく大きな狙いではないかと思います。私はこれを読んだ時、自分に問われている大きな課題が残ったな、と感じました。

松井 結論は出さずに、すべて自分たちでどうするかということを考えなければならぬということが、今までの教会のやり方と違い良かったと思います。

古川 こういう現実を目にして、あるいはより深く知ってみて、自分

がどのような態度を持つのか、心の持ち方、感受性、価値観、それは同時にキリストへのかかわり方というものを表してきます。つまり自分で現実を受け止め、自分で信仰案内の判断にしていく、それがこういう形なのでしょう。

森 人々の“叫び”に、神は耳を傾けられることで、人々の“叫び”に黙ってられない。思わず、駆けよってしまう。

場崎 そうですね。今回は編集のために行ったのだからといえばそうでしょうが、実際に私たちが自ら、本当にそこにキリストがいるんだという思いで、一人ひとりが人々の“叫び”に耳を傾けられるようになったらいいな、素晴らしいな、と感じました。

生の“叫び”を受けて自分が変わる、教会が変わる

森 自分が裸になって、人間の本当の生の“叫び”、人間の真実に出合うことによって自分が変わっていく、それが本当の神への道の歩みではないでしょうか。人間の真実に出合って、動かされて変わっていく、人間の真実に出合うことが宗教の豊かさであると思いますね。

古川 人間の真実について教会の教えは、大きな役割を果たしてきたと思うんですが、信仰を生きるということでもどうしても必要なのが、現実への正確な、広い認識。広ければ広いにこしたことはないのですが、どれだけ世の中のことが正確にしゃべれるかということではありません。より広い認識というのは、世の中の、とかく社会の中で忘れられている部分、見捨てられがちな部分、見落とししがちな部分をどれほど信仰をもって知っているかが問われます。

社会はどうしても、力のある側の意見、考え、傾向などに注目し、見捨てられた人、底辺の人は注目されない。私たちの現実の認識はそこから始めていかなければ、信仰にどうしても偏りがでてきてしまいます。現実をより良く見れば、信仰はそれだけバランスのとれたものになるでしょう。

忘れられた人々のことを単に統計上で何パーセントだということを

知る以上に、彼らが何を考えどういう気持ちでいるか、それを知ることが、私たちが信仰を維持する上で、もっとも大切なことなんです。聖書を見ても、そのときの「やもめ」や「重い皮膚病にかかった人」などが、聖書の時代の中心的な人物のようにいわれて錯覚を起こしてしまいます。あの時代の社会では、あの人々は忘れ去られていた人たちでした。だからこそ、現代の教会のもっとも中心的に注目すべき人たちとして真ん中においておかないと、私たちの教会の持っている信仰はどうしても偏りがちな、変な方向に行ってしまうことになるのではないかと思います。

フロアック 私たちは個人として、信仰を通して、この人たちの人生観、社会問題に関心を持たなければならない。すなわち、自分の立っている高いところを外れて、実際に生の声を聞くこと。祈りはもちろん大切だけど、祈りだけでなく、忍耐をもってこのような人たちの話を聞く。「聞くだけでは意味がない」という人が多すぎる。だけど、忍耐を持って聞く。これだけでも、結構相手は精神的に助かりますね。

森 松井神父様は、多くの人が共感を持ったとか自分の偏見が壊れたとか、おっしゃいましたが…。

松井 耳の聞えない人たちだったら、外見上全然わからない。教会の中でこういう人たちに対する感性、一人ひとりを見る目を養っていかなければなりません。

日本の社会に充満する“叫び”

森 現代の日本社会は、組織を中心にし、役割分担的に動いている面があり、一人ひとりの“叫び”は無視されやすい状況の中にあるような気がします。こういう“叫び”を拾い起こしていく営みは、現代日本の社会にとっても意味があるように思うのですが、皆さんはどう思われますか。

古川 今の社会では、ひとり暮らしの人や障害者がこういうことで困

っている、だからこうすればいいと、表面的にとらえてしまいがちです。福祉にしてもそうです。だれもが忙しい時代になって、経済的に豊かになって、困っている人を見ると、お金を出して済ませてしまう。結局、何にしても、いろいろやっているようで、お互いのことを知らない。お互いがもう少しゆとりをもって触れ合うことで、人に対する尊敬が生まれてくるということ。

場崎 日本のカトリック教会の信者数は、日本の総人口の約0.35パーセント。この小冊子も4万部ほどですけど、『叫び』を地域に提供してアピールしていくことはできないでしょうか。一般社会の原動力になれるのではないかと思います。現代の社会組織の中で、本当のいのちが失われていく中で、復活のいのちを示したい。これが私たちの目的です。『叫び』は小冊子ながら、少しは社会に対する前進だと思います。そして、紀元2000年の大聖年に向けた歴史の流れの中でひとつの節目として、小冊子『叫び』の意味を再確認してもいい。社会と共に歩んでいこうという教会にとって、このような小冊子の試みは貴重です。

フロアラック 社会ののけ者になった人に、学校やお母さんがどういう教育をしたかと聞いてみると、皆に迷惑をかけない人になるように教育されたという。迷惑をかけないためには、隅っこにいけばいい。「他人に迷惑をかけないだけでいい」では足りない。社会のためにまじめに働くと、「お金をとられる」「暇が全部とられる」という。私はこういうことを聞くのが怖い。事実を聞いて、叫んでいる人々を積極的に受け取っていくことが大事なんです。

松井 『叫び』が出てから、“小さな人たち”がもっと身近になったとか、“小さな人たち”がどういう人か、具体的に分からなかったという声もありました。社会の見方の中でもそうじゃないかと思いません。

「お金ではなく時間を…」

森 この“叫び”を聞いた後、司祭としてこたえていかなければならないと思いますが、これについては。

場崎 マザー・テレサの言葉の中で、「二人の子どもが川に溺れていて、自分が親だったら、どちらを助けるか」という話があります。ある人が「自分の子どもを助ける」といったんです。答えは「近いほうから助けなさい」教会の体質を考えたとき、教会の中が先で、外の近い人が後になる。教会の中にはまだまだ古い体質があり、変えなければなりません。

フロアラック 私のいる教会は集会所がないため、ミサが終わると、聖堂の中で互いに話します。外国人もいっぱいいます。そこで私は「毎日曜日に一人ひとりの顔をおぼえなさい」「変な顔をしないで、ニコニコしてその人の存在を認めなさい」と指導している。

それと家柄と学歴、日本人はすごくうるさいですね。家柄は選べない。教会の中で差別とか、平和的でないことをつくりないようにしています。

古川 社会的に弱い人たちは、どうしても隅に、隅にといつてしまう。これは社会の自然の流れでしょうか。教会全体としては、いつも社会の流れに逆らって、社会的に弱い人たちを社会の中心にもってこよう、もってこよう、こういう人たちこそ、主役なのだという姿勢に育てていくことが大切です。カトリックの信仰における福祉のあり方、共通理解を求めて、世の中の福祉のあり方とどういう点で、どういった原点が違うかを明確にして、自分たちのやっていることを見直すことが大事なことだと思います。

また、“小さい人たち”のことを聞いて、「バザーをやりましょう」「お金をこれだけあげましょう」ではなくて、「お金より大切な時間を、それなりに割くこと」の方が大事であるという意識改革が求められます。信仰とは、そういった人たちのために何かを考え、そしてそれぞれの生活に自然に次の行動が出てくる、これが大事なことだと思います。

す。

松井 「神父さんが、こうこうおっしゃるからボランティアします、病人を訪問します」ではなくて、自分で気付いていく。自分たちで“小さな人たち”を見つけていく。そして、何ができるかということを考えていくことです。

聖書全体が社会福祉を訴えている

森 社会福祉のカトリックの原点になる福音の根拠は何かと問われたら、皆さんはどう答えられますか。

古川 私にとっては聖書全体です。でも具体的に上げるとなると、直接的には「貧しい人は幸いである」とか「悲しむ人は幸いである」といった状況にある人の中で、「神の国の建設」が始まるということです。教会もそこに方向づけないとだめだと思います。それ抜きで神の国のことを語り始めると、偏った方向への信仰の話が出てきてしまいます。

フロアラック ご復活です。

森 ご復活。もう少し説明してください

フロアラック 苦しむことや病気は神からではない。13歳の子どもが亡くなったとき私は一緒に悲しみました。病気になって、初めて自分の弱さを分かって、病気になった人や他の人にやさしくなるとか、神の必要性を認めるとか。病気になった人、苦しんでいる人は、何かに頼りたいから教会にくるんです。

場崎 聖書の原点は、キリストの行なった行為そのものですね。善きサマリア人も憐れに思って介抱した。「放とう息子」に出てくる憐れみ…、いろいろありますけど、そこに神がいるんですね。神が、私たちと一緒にいてくださる。「あなた方のところに神がおられる」というところが原点になっている。苦しみのときに神がいた。重い皮膚病のときに近寄ってきてくれた。それが彼らのいのちであって、復活と呼んでいいのではないのでしょうか。

フロアラック キリストはただ、そばにいただけではない。自分も一緒に背負い、そこに触れた。私たちにはそこまでできない。そばにいるけれども、その人の苦しみを背負えない。

松井 人間の弱さ、痛みからでてくる“叫び”、そこにこそキリストが現存していて、キリストとの一体感というのか、神秘的な意味で、痛みとの共生が始まるのではないかと思います。聖書の根拠としては、キリストの十字架です。

古川 聖書には、しつこいほど、「やもめ」とか「貧しい人」が出てくる。福音書を見てみると、「貧しい人」のオンパレード。私たちが聖書と同じくらいのバランスをもって信仰を語ろうとするならば、貧しい人、弱い立場にある人抜きで語ることは非常に難しい。

森 パウロは「私は弱さを誇りとする」といっていますね。病、老い、挫折などなど、現代人が目をそむけようとするものの中に救いの道がある、ということを書いていかないといけませんね。

フロアラック 私たちには目標が必要です。お正月はたいてい、教会に行きます。何を神様に頼みましたかと聞くと、健康のこと、家族のこと…。中心になるのは個人。教会は、共同祈願で、皆が幸せになりますように祈り、平和の祈り、そして最後に自分の家族のため。神の国は皆のものだから。

民生委員は、地域のおじいさん、おばあさんの面倒をよくみるけれど、いじわるな人のところには全然行かない。私たちは反対になるわけ。昔、難民がたくさん出たとき、スイスは小さい国だから、身体の不自由な人を選んで1,800人だけ受け入れた。すごいと思った。クリスチャンの私たちは、面倒見れない人の面倒を見る、教会は昔からやっていたのです。今、忘れてるんじゃないですか、キリストを見ることを。

これからも共感の輪を広げていきたい

森 これから、しばらく『叫び』を四旬節に出していきたいというこ

とですけれど、継続することによって、担当される皆さんの抱負、夢は。

フロアラック 『叫び』に出てくる人がいる、というだけではなく、信者の人なら、これを見て、今の私たちは何をしたらよいか、もう少し実行するようにしてほしい。

場崎 まだ『叫び』を知らない人が多いので、もっとキャンペーンをしていく。それから使い方を考えていく。叫んで、“叫び”がかれてきて、で終わってしまったらよくないと思いますが、声に出てこない“叫び”もあります。小教区で自分たちの小冊子『叫び』を作ってみる。例えば、地域にどのような“叫び”があるのか、ひとつの団地にこれだけの“叫び”があるとか、今回の小冊子『叫び』のあとがきに書いてあったように、探し、訪ね、歩き、そして理解する。そういうことではじめて分かる。そうやっているうちに救いの芽生えが出てくるのではないのでしょうか。自分にとっての課題です。

松井 司祭の反応が少ないのに、がっかりしました。こちらからアピールしなかったからでしょうか。

古川 読んだ人から、「われわれの現実から遠い話」という声も聞きました。ひとり暮らしの老人や障害者は、地域社会の中で、隣と隣、すぐ横にある現実です。しかし、その人にとっては現実ではないのです。現実根ざした信仰ということを推進していくためにも『叫び』を続けていく。そして、助け合えるような教会ができればいいと思いました。世の中で忘れられているからこそ、教会がその人に注目し、注目することによって教会が道を踏みはずすことはない、誤ることはない方向性をはっきり出していくことです。

森 よい結論をありがとうございました。

わたしの“叫び”、隣人の“叫び”

☆子どもの暴力に耐えかね、自殺を思い立つ一歩手前で救われた方の、必死の“叫び”を思い出しました。(女性 63歳)

☆離婚した人は、悩んだり、孤独だったりしているのに、教会からは白い目で見られて、知っている人のいない教会でしかミサにあずかれなかったり、ご聖体をいただけなかったりしている。

(主婦 45歳)

☆私自身、子どもができないつらさを5年間経験しました。不妊のつらさは身をかきむしるくらい苦しいです。(主婦 31歳)

☆同性愛者の問題を取り上げているのに驚きました。同性愛はカトリックでは赦されないと考えていたからです。こういうふうに取り上げてくれるとうれしいです。(女性教師 28歳)

☆子どもがいないことを見下さないで！ 「年をとった親は子どもがかわいそうだ！」なんていわないで。会う度に「子どもつぐらないの」と、何度も何度もいわないで！ 子どもがいないのは、そんなに悪いこと？ もうほっといて！(主婦 34歳)

☆無知と貧困のため売春した女性がどんなに疎外され、軽べつされて自分たちの力では立ち直れないで苦しんでいるか。私たちはその人たち(15歳～20歳)の世話をしていますが怒りでいっぱいです

(女性 77歳)

☆自分自身を貫こうと思いつつ社会の流れに流されそうになる時、「助けて」と叫びたくなる。(主婦 52歳)

☆外見上は幸福そうに見せているからこそ、悩みや“叫び”を上げられない人たちの心の奥底の“叫び”に耳を。例えば学校での優等生、

勤勉な会社員、派手な生活にうつつを抜かす人…。案外隣りの人。

(修道女 67歳)

☆教会の人は、精神の病の人を差別している。早く死にたいので、タバコをいっぱい吸っている。カトリック精神障害者の会があればいいと思う。

(女性 38歳)

☆小生は、移民の子で学校に行ってません。すべて独学で、無一文で帰国して学んできました。『叫び』の内容は恵まれているようにしか見えません。担当者の認識も恵まれた人の範囲内のようです。

(男性 54歳)

☆神が第一といいながら、人への思いやりに欠けるクリスチャンに対して、怒りを覚えます。自分たちの教義を守るため、他教派を引きずり下ろす日本のクリスチャンの現実に憤慨しています。

(主婦 38歳)

☆教会、特に司祭に対して、私は叫びたい。「聖書に『癒される』ことが書かれていますが、そのことで教会に行ってもいいですか」という電話。司祭は「ここは病院ではありません。学びたいのなら来て下さい」という返事。医学では治せない治療（心の癒し）を知ってほしい。

(女性 69歳)

☆「一匹の迷った羊がいれば、九十九匹を残して探しに行く」と、み言葉があります。ご聖体を拝領したくても、み言葉を聴きたくても教会に行けない人々がいます。家族のため、教会が近くない。司牧する側はそんな迷った羊の“叫び”を大切にしているのでしょうか。

(男性)

☆幼いころに受けた性的虐待のトラウマを乗り越えて、温かい人になりたい。そしていつか大切な人の赤ちゃんを産み、童話を書きたい。今は苦しいけど苦しいところを通ったら、つかめる幸せがあると信じています。

(学生 27歳)

☆私も母に愛されたい、愛されたいと思っていました。そのためにも「いい子」を演じ続け、ストレスのために精神障害になってしまい

ました。今カウンセリングに通っています。 (女性 29歳)
☆長男がこわい。勝手に高校を中退し、アルバイトをしている。

(主婦 50歳)

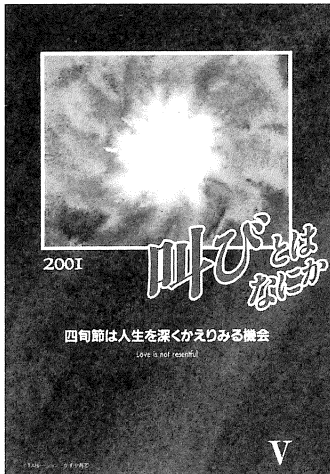
☆企画の意図はいいことだと思いますが、どうしても同情を強いる感じになってしまい、好きではありません。 (男性 51歳)

☆私は死刑判決を受けた人たちとかかわっています。事件の被害者、その家族のことも見えてきました。加害者も被害者も、疎外され、“叫び”を上げることさえできずにいます。

☆信者でありながら離婚し、特に信者の母を苦しめた。幼児から父を奪い、精神的にも経済的にもつらい思いをさせることになった。温室育ちで自立できない自分が情けなくて自己嫌悪に陥る。元夫とその家族に対しての憎しみが消えない (女性 40歳)

☆アルコール依存。努力しているが、時として誘惑に負けて一杯。あ
とが止まらない。 (男性 60歳)

☆「あとがき」の後半部分に「その“叫び”とどうかかわり合うのか」という課題が与えられました」とありますが、私たち読者の実感でした。次回には、この「課題への取り組みの実感」の報告集が出されると大変助かります。 (男性教師 59歳)



四旬節は人生を深くかえりみる 機会

Love is not resentful

目 次

はじめに	
“叫び” …聖書から ………………	160
1 精神を病んで =回答者の取材記=	
私は、お前をこの世で幸せにするとは、言わない ………………	167
2 閉ざされた親子関係 =アンケート補足〈自分史〉 =	
虐待・50年の謎 ………………	171
3 教会の信徒として =アンケートを読んで=	
自分らしく生きる ………………	175
4 生活保護をうけても =回答者の取材記=	
神とともにいて ………………	178
5 生活からの“叫び” =アンケート引用=	
許せない ………………	181
6 すべてにおいて、すべてとなる教会 =アンケートの感想=	
共 に ………………	186

“叫び” … 聖書から

横浜教区司祭 古川勉

四旬節を迎えることとなりました。社会福祉委員会・カリタスジャンの四旬節キャンペーンのひとつは、今年も数年来発行してきた『叫び』小冊子に寄せられたアンケートをもとに、あらためて、信仰と生活、社会と教会、福音宣教について見つめ直すことといたしました。

“叫び”、それは旧約の時代から、障害や病気の有無、性別、出身地、職業、家柄、民族の違いなどによって、多くの人々が、差別、不公平、人権無視、貧困の状況に追い込まれ、いたるところで、様々な形であらわれています。現代と変わらない、暗い、現実の人間社会の一面が、そこに見てとれるものです。

そして、同時に、多くの悲しみや苦難に襲われ、そこから出てきた“叫び” に対してのいくつかの反応もあるものです。

“叫び” があって

苦難からの“叫び” として、よく思い出されるものに『ヨブ記』があります。

家や子までも失い、病に犯されているヨブの叫びは、

「私の生まれた日は、消え失せよ」(3：3 a)

「なぜ、私は母の胎にいるうちに死んでしまわなかったか… (そうすれば) 今は、黙して眠りについたであろうに」(3：11—13)

と、極限に達しています。そして、

「なぜ、私に狙いを定められるのですか。なぜ、私を負担とされるのですか」(7：20)、「なぜ、神に逆らう者が生き永らえ、年を重ねてなお、力を増し加えるのか…その家は平和で、何の恐れもなく…太

鼓や豎琴を合わせて歌い、笛を吹いて楽しむ」(21：7—12)と、なぜこれほどの苦難を自分だけが背負うのか。苦しみが罪の結果とする因果応報的な考え方があったとしても、それだけの罰を背負わされるほどの罪は決して犯していない、と自らの潔白を主張します。そして、むしろ、神の道から外れている者たちの方が、世の中では成功者、富裕な者として歩んでいるではないか…と、自らの疑問と“叫び”を挙げ続けます。

それに対して、ヨブの3人の友人やエリフという人物らは、ヨブの、神の正しさを疑う主張に対して、「どうして人が神の前に正しくありえよう」(25：4 a)とか、

「あなたが、神を捜し求めるなら…過去のあなたは小さな者であったが、未来のあなたは非常に大きくなるであろう」(8：6—7)、「神は人間よりも強くいます。なぜ、あなたは神と争おうとするのか。神はそのなさることを、いちいち説明されない」(33：12—13)

などと、潔白を主張するヨブに対して、全ての者は罪人であるとし、また、神の絶対的な正しさと思慮深さは、到底、人の知る限りのものではないことなど、いろいろ強調していきます。苦しみは、ひとつの神の教育方法であったり(36：15)、また、罪人の繁栄も空しいもの(20：5)であると、当時の、いわば伝統的、かつ正当な神学が、ヨブに対する4人の論者によって語られているものです。

しかし、このヨブの友人たちは神の怒りを受けることになってしまいました。(42：7)ヨブにいろいろ神の正しさを説くものが良しとされなかったというものです。これは、何も、正統な神学というものの存在価値を疑ったり、低めたりするものではもちろんありません。いいたい点は、ヨブに対するこの論者たちの視点だと思われまゝ。ヨブの立場にならず、また、神の助けを待つようにいいながら(36：15—16)、自らは、ヨブのためにとりなしを懇願することもなく、また、神の正統性をいう理論を守ることに熱心で、一生懸命なことは説教することで、決してその困難な状況に手を触れることも、それを理解し

ようもしなかったことにあります。それが逆に神からマイナスの評価を得ることになってしまったものと読み取れます。

でも、こうした心の姿勢や実際の態度というものは、ともすれば私たち自身、信仰する者として、あるいは教会として、とかくとろうとしてしまう心の有り方や態度であるといえる時も多いかと思えます。

そんな中、第Ⅱバチカン公会議をはじめ、近代の日本の教会の動きは、福音宣教というもののあり方をあらためて見つめ、問い直し、よりキリストの教会として発展することをめざして行われたといえるものです。15年も前に出された「福音宣教推進全国会議」に向けた、司教団メッセージにも、「生活と日本社会を見つめながら信仰の態度を改め、それを育て、証ししたい…それは、決して現実に迎合したり、妥協したりすることを目指すからでなく、生活の中で、キリストの十字架と復活の神秘を真剣に生きることこそ福音宣教の源泉だからであります」（1986年12月12日）とありました。

ここではまず、福音は、現実のあらゆる場において、その道が見出され、現実の生活における様々な分野、立場、状況においてこそ発揮されていくものであるとされました。そしてさらに、同じ司教団の出した『日本の教会の基本方針と優先課題』（1984年6月22日）では、「今日の日本の社会や文化の中には…多くの人々を弱い立場に追いやり、抑圧、差別している現実もある…このような『小さな人々』とともに、キリストの力でこの芽生えを育て、全ての人を大切にする社会と文化に変革する福音の担い手になる」ということを基本方針のひとつとして大きく据えました。小さくされた人々、後回しにされた人々、苦しみに追い込まれた人々、そこからの“叫び”に神の示す指針、招きを見出していくというものでした。

社会の中に埋もれる弱き立場の人々

「あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心ひかれて、あなたたちを選ばれたの

は、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった」(申命記7：6—7)

神が救いのために選ばれたとされたイスラエルの民は、何によって選ばれたのかといえば、他の民よりも徳や才能、業績などに秀でていたから、というのではなく、むしろ、世の中で数も少なく、社会の中に埋もれた存在で、無力で、貧しく、最も弱い立場にある民であったから、ということでした。そのことは次の文章からも読み取れます。

「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに寄留しました。しかし、そこで、強くて数の多い、大いなる国民になりました。エジプト人は、このわたしたちを虐げ、苦しめ、重労働を課しました。わたしたちが先祖の神、主に助けを求めると、主はわたしたちの声を聞き、わたしたちの受けた苦しみと労苦と虐げを御覧になり、力ある御手と御腕を伸ばし、大いなる恐るべきこととするしと奇跡をもってわたしたちをエジプトから導き出し、この所に導き入れて乳と蜜の流れるこの土地を与えられました」(申命記26：5 b—9)

イスラエルの民自身、「数の多い、大いなる国民」であった時は特に、そこで神の証しがなされるということはなかったものでした。しかし、エジプト人に虐げられ、弱い立場や貧困の労苦に追い込まれた結果、神の力が彼らを通して現されていった事実が報告されています。抑圧され、弱い立場に追われ、貧しさに苦しむ人々に神の国はあるということでした。

「貧しい人々は幸いである。神の国はあなたがたのものである」
(ルカ6：20)

貧しさは世の中で、弱い立場に人々を追い込む最も大きな要因のひとつです。その被害を被る人々に神の国があるというものです。神の国の指針や、神の国建設のための原動力が、そうした人々の“叫び”、奮闘のうちに見出されると断言するものです。

が、しかし、貧しさをはじめとした弱い立場の人々に、神の国、神

の選びがあるといっても、もちろん、貧困や被差別が善いことだということではありません。また、貧しい人や差別される人が理想的な良い人、聖なる人で、金持ちや差別されることのない人が良くない人、罪人というわけではありません。神がそうした“叫び”をあげる小さい立場の人々を選ぶというのは、「全ての人々」を愛しているがゆえのことといえます。小さく弱い立場だからこそ、置き去りにされた人々と共に、神は、また神の国はあるというものです。

全ての人を愛する神

神の救いは全人類に及ぶものである。

「神はすべての人々が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます」(Ⅰテモテ2：4)

「その一人の方はすべての人のために死んでくださいました」(Ⅱコリント5：15a)

その神の愛に応えるためとして、また、神と共に生きるため、聖書のいい方では掟や律法というものがあります。

「イスラエルよ。今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。ただ、あなたの神、主を畏れて、そのすべての道に従って歩み、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、わたしが今日あなたに命じる主の戒めと掟を守って、あなたが幸いを得ることではないか」(申命記10：12—13)

「あなたは隣人を虐げてはならない…自分自身を愛するように、隣人を愛しなさい」(レビ19：13—18)

この二つの内容が、イエスの口から、ひとつにまとめられ、神、隣人を愛することこそ、人や社会の営みのうえでの最大の目的であり、その実現は最高の価値であるとされました。(マタイ22：37—40など)

すべての人々を愛する神、それに倣い隣人を愛するようにと促す神、またキリストの言葉。それを生きようとした時、どのように私たちは隣人やすべての人々を愛することができるのでしょうか。隣人といっ

でも、身近な人から数えていっても、全ての隣人に対してなどと、到達することは不可能な気がするものです。

しかし、そうした思いに対して、福音書の良きサマリア人のたとえ話（ルカ10：29—37）や、百匹の羊の話（ルカ15：1—7）は、隣人についてのとらえ方を述べていました。自分の身の回りから優先的に数えてどこまでを隣人というのではなく、「追いはぎに襲われ、瀕死の状態の人」に出会ったら、その人の隣人になることが根本であり（ルカ10：37）、「全て」の羊を大切にす良き羊飼いは、当然見失われた危機的な状況にある一匹の羊に集中するというものです。もしかしたら世の中は、群れをはずれた一匹より、残っている、より多くの99匹を大事にする方向へ、動くものかもしれません。一匹を捜すことより99匹を大事にした方が、出てくる不満も少なく、無難で、何かと得なことも多いでしょう。でも、その姿勢は最後まで「全て」を愛することは不可能な道を行くことになるといえるかもしれません。

結論として、隣人を、または、すべての人を愛するということの具体的な振る舞いは、最も最後の立場、その「叫び」もとかく聞き取られることも少ない弱い立場のところ、最も優先的に集中力と振る舞いがいくといえるものです。私たち自身、隣人やすべての人を愛する、とは家庭や親族、学校、職場の中で、また、地域社会や目や耳にする日本社会や国際社会の中で、最も弱い立場、最も貧困、差別に追い込まれた人々の状況に近づき、その立場に立ち、振る舞い、生きることであるといえます。そして同時に、その時こそ、より神の国建設の源を見出すことができ、神の国に向かっての、歩むべき道標が見えてきて、より確かな貢献、協力になることができるものと思われるものです。

「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。

わたしを遣わして貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。

打ち碎かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、

つながれている人には解放を告知するために。

…

彼らはとこしえの廢墟を建て直し、古い荒廢の跡を興す。

廢墟の町々、代々の荒廢の跡を新しくする」(イザヤ61：1—4)

はじめに、イエスは自らこのイザヤ預言の言葉を御自分の宣教活動の基本的な位置づけと姿勢として示されました。(ルカ4：18—19)

そこには当然、イエス自身における、前述したすべての人を愛する姿と、神の国建設における原動力と実現をどこに見ているかが、読み取れるものです。

今年も迎えた四旬節、イエスの業にならい従うことを望む教会は、こうして打ち砕かれた心からの“叫び”に、自らの関心と歩むべき指針を絶えず見据えていくということ。ここに、教会自身の歩むべき道があることを、あらためて確認したいと思うものです。

私は、お前をこの世で幸せにするとは、いわない

—1858年2月18日、ルルドの聖母の言葉

神経を病み、精神科に通っている者の苦しみについては、よほどの専門家でなくては、なかなか理解してもらえないものです。私の場合、離人症という病気で、神経症のひとつですが、現実が現実には見えない、非現実の、この感覚は、看護婦さんや看護師さんでも理解できません。普通の方ではまず絶対に理解の及ばないところではないかと思えます。

内臓疾患の友人にいわれたことがあります。「あなたの場合は、実際に肉体のどこかが痛むというような苦しみが無いので、まだ良い方だわ」しかし、そういうものではありません。神経症の当事者でなくてはわからない、その苦しみを、肉体的な病気の苦痛と比較できるものではありません。

以前私は甲状腺ガンに罹ったことがあります。それと知った時、ちょうど神経性鬱の状態にあって、正直なところ、即座に、これで死ぬるとほっとした気持ちで思いました。その頃、自殺も考えました。ともかく手術を受けましたが、その後も大変で、温熱療法のためにやけどをして皮膚がケロイドになって痛んだり、コバルト療法で喉に炎症ができ、物を食べても味がわからなくなったりして、とても耐え難くて、お医者さんに頼み、治療をやめてもらったくらいですが、それでもそれは神経症の苦しさと比べてどうこういえるものではありません。

今年の2月に父が胃ガンの手術で入院しましたが、親戚など多くの方々が見舞いにきてくれました。そういう病気は見せることができます。自慢とっては変ですが、こんな具合ですとお見舞いの方々に堂々と示すことができるのですが、神経の病気はできません。

親戚にすら知らせることができません。私も知らせていませんでし

た。そのためにほとんど親戚付き合いをしていなかったもので、今回親戚の方々に会っても知らない顔ばかりでした。これで私の病気も知られてしまいました。「地元に住るな」といわれました。私の実家は病院のすぐ近くで、そこから入退院を続けていたのです。私が地元にいるのは親戚にとって都合が悪いというわけです。

実際近隣の人々が私を見る目はとても冷たいものです。みんなが私の病気について知っています。あれは～さんの所の娘だと、私を見ると指差してささやきあいます。できるならここを離れ遠くに行ってしまいたいと思わないでもありません。でも私はここに生まれ育ちました。20年来の主治医の先生とのかかわりもあり、適切な治療を受けるためにはこの先生の近くにいないてはなりませんので、やはりこの地を離れることはできないのです。

神経の病気に罹った者は、万一症状がよくなったとしても、帰る家のない場合がほとんどです。引き取り手がいないのです。

私の場合は実家に帰ることができますが、老人と神経症の病人が住む家といったら、思うだに寒々しい気持ちになります。父親は手術をしてから、一層、年をとってしまい、一日中ほとんど口をきかないこともあるのです。まだ病院に居たほうがましなくらいです。

「あなたに何かあった場合お嬢さんの面倒は見るから安心して」と父に親切にしてくれた親戚の方がいました。そういつて、父からお金を借りて、それっきりで、返してくれません。

私の生涯はこのようにほとんど病気の苦しみと災難の連続です。

生まれつき両足が不自由です。この障害のために小さい時からいじめにあいました。実の母親は私が三歳の時に亡くなりました。後妻にきた人は私をいじめました。「おまえのように障害をもっている者は生まれてこなかった方がよかったんだ」などといっぱいいわれました。彼女も不安障害を抱え精神科に通っていました。数年前父親と私を見捨て家を出て行きました。その時に祖父から相続した私のお金を持っていつてしまいました。大学時代に乗り物恐怖症が起こり後に神経症

になりました。そのために結婚することもできませんでした。病気に
対して強い睡眠薬を服用するので指が曲がらなくなりました。また今
では変形性股関節症で歩行困難になっています。更に年をとったら手
術をしなくてはなりません。

ルルドでマリア様のご出現に出会ったベルナデッタは、「おまえを
この世で幸せにするつもりはありません。あなたはあの世で幸せにな
れますから」といわれたそうですが、この世で幸せになれないのなら、
どうして生きているのかわからなくなります。

時々見舞いにきてくれるシスターが励ましてくれます。フランス人
のシスターです。

「あなたの苦しみをイエスさまにお捧げ下さい」とおっしゃいま
す。

他人の不幸は3年でも耐えられるものです…。

「世の中にはあなたよりも、もっともっと不幸な人がいます」とお
っしゃいます。

下を見ればきりがありません…。

ヨハネによる福音書の中で、障害は「神の栄光が現れるためだ」と
イエス様がいわれます。

私にはよくわかりません…。

それでも、シスターや教会の方々がきてくれるのはありがたいもの
です。一人ぼっちですから、たまに人と話すことは楽しいのです。病
院には勿論同じ病気で苦しんでいる方々がいます。しかしなかなか心
を割って話すということは難しいものです。同じ病院に住んでいると
いうことで、話すことにも、それなりの差し障りがあるのです。

プロテスタントの教会の方は活動的です。カトリックは、どこに信
者がいるのかわかりません。プロテスタントには、私のような障害を
持った者の心のケアをしてくれる団体がありますが、遠くなのであ

まり電話をかけることができません。近くでは厚生省のセンターがありますが、保健婦さんの対応は事務的で、受け答えはワンパターンで、当たり前のことしかいってくれません。健常者の方に、もっともっとこうした私たちの病気について知ってもらいたいと思います。バスジャックなどの事件が起こると煩しいほど細かく報道されますが、私たちのことについてもそれぐらい理解をしてもらいたいと思います。そして電話で話したり、買い物に連れて行ってくれたり、具体的なかわりを持ってもらいたいと思います。

詩 編 6：3—5

神よ、弱り果てている わたしをあわれみ、
痛み苦しむ わたしのからだを いやしてください。
神よ、わたしを顧み、
健康を回復させてください。
あなたのいつくしみのゆえに、
わたしを救ってください。

虐待・50年の謎

50才を過ぎたある日、実家の母のところへ立ち寄った時のことである。80を越えて幾らか気弱になってきた母が、私の顔を珍しくしげしげと眺め、「いくつになったか」と聞いた。「50才よ…」と少し照れながら答える私に、母は遠い彼方を見るような目をして、「50年も、50年も…」と口ごもった。やがて思いもよらない言葉が告げられた。「アンタが生まれてからずーっと、A子なんか死んでくればとばかり思い続けてきた…」血の気がサーと引いていくのを感じ、夢中で飛び出したあとはどのように帰ったのかも憶えていない。あまりのショックに、その後何年か母の元へ寄れなくなってしまった。いって欲しくなかった言葉であった、がその一言によって長い間の疑問が見事に解けたのである。

最初の不運

昭和初期、共に旧制中学校教員で共働きの両親の三女として生まれた。母は姉二人を育てながら8年勤めていたが、3人目は無理と、私を身ごもった時、辞める予定で学校近くの住居から郊外へ引越をした。ところが私が生まれて女兒だとわかると、意をひる返えして勤めを続けることにしたのだ。「また女か！」とがっかりしたと、何度も聞かされながら育った。これが私の人生で最初の不運であった。

乳児期発育不良

それ迄育児・家事を一切引き受けていたベテランのねえやが急に辞めてしまった。慌てた両親は郷里から小学校を了えたばかりの少女を連れてきてもらったが、その子が特別小柄で、まだ幼く、さすがの母もすぐ帰そうかと思ったそう。結局、12才の子供が4才と2才、そして生まれたばかりの赤ん坊の3人の面倒を委された。よく何事もな

かったと不思議な気がする。母の昼休みに授乳させるため、その小さな背中に私をおんぶして、市電駅の3つ4つを歩いて通ったという。粉ミルクのなかった時代とはいえ、生まれたばかりの乳児に、昼休み一度の授乳だけで充分であろうはずがない。かかりつけの医者から、乳児期発育不良と警告を受けたと後から聞いた。

アルバムの私の姿を嘲った

当時の家族のアルバムに、当然生まれているはずの私の姿が見当たらない。たくさんの写真の中に、父と母が二人の姉をひとりずつ抱いている幸せそうなものばかりで、私が父母に抱かれているものはない。3才からやっと写っているものは、どれも何かに脅えたような悲しそうなものばかり。栄養失調の特徴で水に濡れたように写っている私の顔を見て、母は嘲った。戦後成人してから知ったのだが、食を欲すれば叩かれ、泣けば「うるさいっ」と学究の父が叩いたというが、私には笑えなかった。

祖母の笑顔と熱いうどん

物心ついた3才頃から、冬の間はいつも北側の女中部屋にひとりで寝かされていた。盆にのせた食事を、母が黙っておいていくほかは、誰も近寄らない。茶の間の父母や姉弟たちの賑やかな声が聞えてくる。子ども心にも、こんな所に寝かされているのが不思議でならなかった。時々起きて行くと、母はすごく怒って、たちまち戻されてしまう。「病気じゃない、起きる、起きるっ」と騒いでも効き目はなかった。うすうすわかったのは、私の着る物がなかったということだった。

ある時、田舎から母方の祖母が突然訪れ、私の様子を見て取るや、カンカンに怒った。私を起こし、綿入れの着物（母はそれを次姉のものだといってなかなか出したがらなかったが）を着せて炬燵に入れ、熱いうどんを食べさせてくれた。お腹にしみ入るよううどんの温かさ、ニコニコと愛情に溢れた祖母の顔。私にはこの世の楽園のように思われた。もうそれだけで元気がモリモリ出て、部屋中を兎のように飛び回ったのを憶えている。たった一度のこのことを、その後何度思

い出したことだろう。

母の生い立ち

母は、明治の教育界の先駆者といわれた祖父と、賢婦人と名のあった祖母の長女として生まれた（兄ひとりあり）。3年後に妹が生まれると遠縁の石屋に里子として預けられた。お盆と正月だけは親元に帰されたが、また、オイオイと泣きながら連れて行かれたという。3才下の叔母は、母とはこれが姉妹かと疑う程何もかも正反対。小さくがっちりした母と、すらりと背が高く美しい叔母。当然祖母はことごとく比べては口にしたらしい。そんな叔母を母は生涯憎み疎外し続けた。叔母の就職と結婚に、実に巧妙で残酷な復讐をした。そして私にも全く同じことを繰り返したのである。

叔母に生き写しの私

二人の姉たちは母に酷似している。叔母に生き写しといわれた私に、叔母への憎しみと報復が向けられたのではないだろうか。母の膝の暖かさも知らず、傍らに寄ることさえ冷たく拒まれた幼い頃。体の弱い私を庇うどころか、弟姉の世話や家事労働は、姉たちにはなく私ひとりにかかってきた。何より不思議だったのは、姉たちとは楽しく談笑する母が私だけには、殆ど口を利いたことがないことだった。ことに母と二人だけになった時、上目づかいで睨みつけられることは生涯続いた。祖母は将来結核になってしまうこと、不妊の体になってしまうことなどを警告してくれた。難病を患い、親戚からの名医の紹介状も握りつぶされ再発を繰り返し、35才までの青春を棒に振った。それを知人に話し、高笑いをしていた母の姿を思い出す。祖母の予言は見事的中した。

後日譚

長弟に引き取られていた母（88才）が入院した。病気ではなく、下の始末が出来なくなったためで、頭は少しのボケもなくしっかりしていた。手作りの食べ物を用意して、週に何度か訪れ「長生きしてね」と励まし続けた。あれ程嫌っていた私に、オムツを替えてもらって

た母、60年の歳月は二人の立場を逆転させていた。いよいよ最期が近づいた時、母は肩で息をしながら布団に顔を埋めていたが、ふと顔を上げ、傍らに腰掛け祈っている私の姿にハッとした様子だった。二人の間に深い沈黙が続いた。50年否、生涯続いた家庭内いじめをもうこれ以上書くには忍びない。それは母ひとりの罪ばかりではなく、母自身さえ、どうにもならなかった巧妙なサタンの仕業といえるであろう。

詩 編 55：1—4，24

神よ、わたしの祈りに耳を傾け、
わたしの願いを退けないで下さい。
わたしを顧み、こたえてください。
あなたに逆らう者の叫びと試みに おびえている。
かれらは怒りと憎しみに満ち、
わたしに災いを望んでいる。
神よ、わたしはあなたに寄り頼む。

自分らしく生きる

『子供の基本的人権条約』のなかに

- ・私には自分の感情と意見を持ちそれを表す権利がある
- ・私は自分にとって大切なものを自分で決める権利がある
- ・私には自分がほしいものをほしいといい、したいことをしたいという権利がある
- ・私にはまちがいをする権利がある
- ・私には考えを変える権利がある
- ・私には「わかりません」「できません」という権利がある

48歳の筆者は、ある時、この『人権条約』を読んで、眼からうろこが落ちたような経験をします。というのは、教会の信徒として、いつも、聖人のようになることを最大の目標として生きてきたからでした。

教会の司祭も信徒もそれが当然のように受け取られ、それに反することをいったりしたりすると、とたんに白い眼が注がれる雰囲気でした。

筆者も、当然、聖人のような生き方をすべきだと思っていました。しかし、そこには、いつも無理があり、表面だけをつくらっているような空しさがありました。その空しさは結局、愚痴と悪口になって出てくるようになり、教会ではいい子、外ではいけない信徒という二重の生き方になってしまいました。

せっかく信仰というたまものを頂きながら、現実には二重生活の苦しみの中に陥っているという矛盾した生き方が続きました。

そんな中にあっても、確かにキリストを求めているし、キリストの

言葉の中に大きな救いと慰めを得てはいました。多くの霊的な本も読みました。しかし、聖人のような生き方が信徒の本来の生き方だという教えがつきまとして、自分らしく生きるという決心がつきませんでした。

人をがんじがらめに縛ろうとする今の教会から席を移そうとしても、教会法を盾にとって赦してくれない主任司祭。これが神のみ旨にかなう生き方だとひとつの生き方を押しつけるのが教会なのでしょうか。

そのようなときに、偶然、子どもの基本的人権条約が目にとまったのです。この条約を読んで、涙が出てくるのを止めることができなかつたと筆者はいいます。

人間には、その人その人にその人なりの生き方があるのだ。しかも、その一つひとつ、神様が与え、祝福してくださっているのだ。また、人間は、失敗を重ね、まちがいを繰り返しながら本当の生き方を見いだしていくものなのだ。できなければできないといい、わからなければわからないと、その都度、はっきりいっていいんだ。それが、生きている人間に与えられている当然の権利なのだ。

この条約の文章に、筆者は神の声を聞いたようです。そして、これまでもやもやしていたものがすっかり晴れて、自分なりに生きていく元気が出たようです。

何とか自信を持って生きていくようになってから、改めて教会や司祭をみると、柔軟性を失った社会であるかがわかったとのこと。知らず知らずに、ひとつのスタイルを選び、それを最高のものとして他のものを受け入れない体質があるのかも知れません。

詩 編 80：8—10, 13—15

すべてを治める神よ、
わたしたちを新たにし、
あなたの顔の輝きで救ってください。
あなたは ふどうの木をエジプトから移し、
ほかの民を退けて そこに植えられた。
まわりが耕され、
その木は根を張り、おい茂った。
どうして あなたは石がきを こわされたのか。
道行く人が その実を摘み、
森のいのししが荒らし、
野のけものが食い荒らしている。
すべてを治める神よ、あなたの目を注いで、
また このぶどうの木を顧みてください。
あなたが ご自分で植えられた苗と、
強められた若枝を守ってください。

神とともにいて

「45年の結婚生活中20年、重度障害児と一緒に暮らしました。20年前に死んだその子が生きている頃からずっと生活保護を受けています。客観的に見れば、もしかしたら叫びをあげる側かもしれません。経済的には底辺に近い暮らしですが、でも自分では豊かだと思っています。それで時々チグハグなことがおこるのです。例えば今日も四旬節特別献金の箱が教会に出ていました。私の心は騒ぐのです。この1000円札を入れたら、あと困るかな、教会へのバス代が足りなくなるかな、と考えるのです。娘と二人で教会にくると片道で1000円かかります。確かに生活保護を貰っている人は寄付行為は禁じられております。でも、やっぱり地震被害者のためとか、高齢司祭のための司祭館建設のためとかいわれると受ける側ばかりにまわっているのはたとえ正しくとも気になります。いったい自分はどうしたらよいのか、と長年考えてきているのですが、なかなかうまくこの感じ方を説明できません。つまり人間は多かれ少なかれ、神の恵みの受け手であり差し出し手であると思うのですが、私の場合はどういう手が神に応えることになるかということです」

このようなアンケートを寄せられたTさんを高原の駅からバスで15分、バス停からさらに谷を越え、山道を3キロ登った急な傾斜地に建つお宅に訪ねた。8月の青空の下、緑の尾根に囲まれ、野の花の咲き乱れる南側の険しい斜面の向こうに遠く信州の山々を望むまさに絶景の地である。

「37年前ここに越してきた当時は電気も水道もなかったんですよ。でも自然は今よりもっと素晴らしいでした。春の山菜から秋のきのこまで山の幸で何とか暮らせます」今朝、前の斜面で摘んだという野イ

チゴは甘く新鮮だった。

「冬は零下20度位にはなりますけど慣れてますからたいして苦にもなりません。ただ雪が降ったりすると教会に行くのにバス停まで3キロの道がちょっと大変ですけど、歩いて1時間以上かかってしましますね」とさりげなくいわれるTさん、気持ちの良い涼風が吹きぬける玄関ポーチで、心境を語られた。

苦しみとは何か

『『叫び』を読んで感じたことは『苦しみ』とは何だろうということ。人は他人の苦しみに対して、どの位判るのだろうか。よく、私が人から同情された時、思うことですが、人が見て『苦しみ』に見えることと、自分が苦しみに思うことの間にはズレがあるように思います。もしかしたら『労苦して重荷を担うもの』として、イエズス様が、私にたくさんのお恵みを下さっての平安を私が持っているのだとしたら、どういうふうに現実に苦しんでいる人に、何かをしてあげられるだろうか。客観的に見て、余り苦しんでいるように見えない人も、主観的には苦しんでいる人もあるでしょうし…」

「皆で考えたい」

「アンケートを書いた時に、もうひとつ考えていたことは、私自身については、『はかり綱が良いところに落とされている』と思っているので“叫び”をあげる必要はないのだけど、教会にきたい人、行きたくても行きにくく思っている人のかわりに書く必要があるのではということです。たまたま、当時、家計簿つけをしておりましたので、教会関係（交通費を含めて）で必要なお金が意外に大きな割合を占めていることに気がつきました。これでは、私のようにミサを大切にすようにきつく教え込まれた人間でなければ、教会へ行くことをためらう、まして行くと献金が待っているとなると…、と考えました。山の中の特老に入った知人はミサどころかご聖体もなかなかいただけません。また別の知人は町の中に住んでいて、教会までそれ程遠くはないのですが、ミサに行っても役割が若い人に移ってしまつて…とかい

ってミサに行かなくなった人がいます。その方の家は50年前に建てたので、周りの家から取り残されたような古家ですが、そんな状態でも、教会維持費の袋だけはくると嘆かれて困ったことがあります。問題は両者にあるのですが、やはり何か考えなければならないことだと思います」

詩 編 16：7—11

わたしに すすめを与えてくださった神をたたえよう。
夜、わたしは深く悟る。
わたしは絶えず神を思う。
神はそばにおられ、わたしはけっしてゆるがない。
心は喜びに満ちあふれ、
からだは やすらかに いこう。
神よ、あなたは わたしを死の国に見捨てられず、
あなたを敬う人が朽ち果てるのを望まれない。
あなたは いのちの道を示してくださる。
あなたの前には あふれる喜び、
あなたのもとには永遠の楽しみ。

許せない…

自分に対して

とても夫にはいけません。夫に何の不満もありますが、他の男性に好意を抱くようになってしまい、それを許せない自分自身と、どうしようもない気持ちとの板ばさみで、自分が何をしたいのかさえ分かりません。
(40才、女性)

親も夫も許せない

32年前、貧しい、しかし自分勝手な親の犠牲になり、ひとり息子を夫に残し離婚を余儀なくされました。夫は私の親のことを盾に、外で女性関係を当然のように続け、身も心も疲れ果てた私は、そんな夫に子どもを残し離婚しました。信者となり20年近く経っても心からは親も夫も赦すことができません。
(55才、女性)

ある新興宗教団体信者の夫から、20年間暴力を受けつづけ、命の危険にさらされた。私は自分も同じ信仰を持てば明るい家庭が築けるのではと考え、数年前に入信した。しかし、状況は悪くなる一方だった。それどころか、夫の暴力について相談すると、「たとえあなたが殺されても、夫婦が一緒に住むことは神の命令だから家に帰って暮らさない」「夫の暴力を止められないあなたが悪い」というようなことまでいわれ、精神的にも、肉体的にもボロボロになりました。

(年齢不明 主婦)

子どもを産めない者として

私は結婚してまだ1年ですが、子どもができなくて本当に辛い思い

をしています。結婚後すぐ母を亡くし、淋しい気持ちが募りながら「早く赤ちゃんができれば楽になる」と思っていました。夫婦共に不妊症だと分かりました。人は、軽い気持ちで「赤ちゃんまだ?」と聞きますが、気にしている私は「赤ちゃん」という言葉だけでいやになります。後から結婚した人たちに子どもができて、本当に女ではないような目で見られるのが耐えられません。神様は本当にそばにいて下さるのでしょうか。そんなことまで考えてしまうほど辛い毎日なのです。私の叫びなど小さなものだけど、人の悪気のない一言で人を傷つけてしまうんだなあとと思うと、人と話すのも、教会に行くのも辛くなる。教会はこんな人のためにあるところでしょうか? (30才、女性)

教会に対して

私はカトリックの信者で、信者でなかった夫と教会で結婚式を挙げました。しかし口論しあうと次第に最後のとどめのように暴力を振るうことがあり、子どもの前でも平気で自分の怒りをぶちまけ、私に対しては「女」という見下げた態度をよくとっていました。

私は、心の中で、彼を夫と慕う気持ちがどんどんなくなり、愛されていない、必要とされていないと感じるようになりました。ある日、いつものように喧嘩が始まり、夫の「出ていけ!」という言葉で私の離婚への決心が固まりました。昨年3月、離婚調停をしましたが、教会はそんなに簡単に離婚を許さないこと、裁判も必要になるとのことで、人の心の苦しみや悲しみは教会では優先されないのだと感じました。

以後、教会に行っていませんでしたが、今はプロテスタントの教会の礼拝に出席させてもらっています。「心に重荷を負った人は私の元にきなさい」とキリストはいわれましたが、本当に自分の弱さ故に打ちひしがれた者を教会は見捨てるのかと疑問を持ちます。人は自分の量りで人を裁くのだと私は身をもって体験しました。(39才、女性)

私は今、いろいろな事情で無収入です。信者同士助け合うものと思っていましたので、その人の収入の額により維持費を払っていくわけですから、当然少ない人も多い人もいるでしょうし、払えない人もいると思っていました。でも信者さんの中には少ない額の人を悪くいう人もいるし、維持費の担当者でもない人が知っていることが悲しく、ショックでした。そのことがずっと心に残り、もう3～4年所属教会に行っていません。無収入の私が維持費として払えるのはわずかですので、そのことをまた誰かが陰口するのは辛いですから… 教会の中にもそんな人間関係があるのだと思うと悲しいです。

(51才、女性)

なぜ、皆、自分のことばかりいうのですか？ 司祭は「生活の中で…」とばかりいうのですか？ 教会のため何かしたい人は迷子になっているのに、どんな小さいことでも使って欲しい小さな者もいることを分かって欲しい。なぜ司祭は若い人、役に立つ人ばかりに声をかけるのですか？ 日曜しか行けない教会は淋しい所。教会内のことにもっと心を向けなければならないのでは？

(63才、女性)

私は幼児洗礼を受けましたが、今現在、自分では「無信仰、無宗派」であると思っています。というのも、他界した両親はクリスチャンでしたが、ある事情で離婚をし、そのため教会の人たちから白い目で見られるようになったのも見てきましたし、神父様は教会献金をしない人は信者ではない、というような態度のようですし、教会がとても冷たく、遠い、裁判所のような所だと感じている私です。

(33才、女性)

障害を持つ者として

私は耳の不自由な者です。神を第一といいながら、聴覚障害者同士が同障害の人を傷つけたり、のけ者にするなどよくありました。同じ

聴覚障害者の信仰に欠けるクリスチャンに対して怒りを感じます。また、障害者に冷たいクリスチャンにも怒りたい気持ちです。

N教会で、神学校の台所パート募集がありました。耳が聞こえないのは台所仕事やりにくい、と神父さんにきっぱり断られ、ショックを受けました。イエス・キリストは貧しい人、病人、身体障害者などの弱い者の味方なのですが、神父様は身体障害者に理解がなく、腹立たしい気持ちです。

(51才、女性)

飢え・渇き

ある日、仕事から帰宅した私に妻は「きょうね、占いをするという人が家にきたの」といい、「ちょっと面白そうだから、私も勉強してみようかと思って」とにこやかにいった。私もその時は、さほど気にも止めなかった。が、数ヶ月して、私名義のクレジットカードの請求書が山のようにになっていることに気付いた。その額は数百万にもなっていた。妻を問い詰めると、ようやく、ある新興宗教団体に入信していることを告白した。宣教活動の一環だといつては、あらゆる商品を買っているのだという。そのためには自分でも在庫として数十万単位で購入しなければならないのだと。怒り狂った私は、妻から財布や通帳、印鑑、カードなどの一切を取り上げ、それから、私と妻との長い闘いが始まった。

幼児洗礼で生きてきた私と結婚する、と決めた時に妻もカトリックの洗礼を受けた。子どもが生まれてからは、むしろ私よりも妻のほうが積極的に教会の活動に参加していた。「なぜ？」の問いかけに妻は「教会は、私を受け入れてくれなかった」とつぶやいた。ある行事の時に婦人部の中で意見が割れたことがあり、妻が反体制側についたことで、いじめられていたのだそうだ。「まさか。教会の中でいじめなんて」と私は笑ったが、妻はそれ以降、態度をかたくなにしまった。毎日のように繰り返される話し合い、怒鳴りあい、ののしり合い。

それでも、私は祈ることで「自分」を保っている。もう8年目になる。最近では、妻が新興宗教にはしっていると、教会の中でうわさが広まり始め、私自身も居づらくなってきている。ようやく、妻が教会でいじめられていたということが信じられるようになった。

(40代、男性、会社員)

詩 編 51：3—4，12—14

神よ、いつくしみ深くわたしを顧み、
豊かな あわれみによって
わたしのとがを ゆるして ください。
悪に染まった わたしを洗い、
罪深い わたしを清めてください。
神よ、わたしのうちに きよい心を造り、
あなたのいぶきで わたしを強め、新たにしてください。
あなたのもとから わたしを退けず、
あなたの聖なるいぶきを取り去らないでください。
救いの喜びを わたしに返し、
あなたのいぶきを送って、
喜び仕える心を ささえてください。

共 に

次のようなアンケートが寄せられました。要約すると、

『叫びにこたえて』の提言や各座談会の文書の中にある共通した考えは、教会とか自分の中に“叫び”はもともとないのだけれど、私たちの回りに“叫び”を持つ人が確かにいるのだから、その人たちの言葉に耳を傾けてあげようではないかという感じを受ける。

「この『叫び』の中に出てくるような人やできごと、ことがらと私とは一切何の関係もない」という断固たる動かし難い認識が、多くの人々の中にどっしりと鎮座していて、そこからすべてが始まっていくのではないか。

心の中のどこかに「自分だって同じなのだ。自分も大して変わりはないのだ」という共感にも似た思いが常になれば、社会的に弱い立場に立たされている方に何か働きかけても、その人から迷惑がられるだけだと思う。

その人の立ち場に立つことは、神以外にはできない。

異なる人間として自分の立っている場からものごとを考えていくのは一向に構わないと思う。しかしその時に大切になってくるのは、「かかわり合い」ということ。

イエズス様がおっしゃったように、「共にいる、あなたのそばにいますよ」ということが何よりも大切であり重要。

お互いの弱さをさらけ出しつつ、それでも接点をもち続けるということ、そしてやがては友になっていく…これこそが、神が私たちに望んでおられる姿ではないか。

私が望むことは、教会が悩める人そのものになってほしいとい

うこと。それに限りなく近づいて欲しい。

「小さな人の“叫び”に耳を傾けて」というスタンスをとっている限り、教会は小さい人々の苦悩の本質が永遠に分からないだろう。

教会こそ悩める魂の持ち主になって欲しい。

自分を含めてすべての人がそのような柔らかい心を神から与えられ、隣人とその心を分かち合うことができるように祈る。

以上のような要旨のアンケートを読みました。心にしみ込んで、いろいろなことを考える機会となりました。

二つの思いを記してみます。

なぜ“叫び”を聞こうというのでしょうか

モイゼを通して「近い人を自分のように愛しなさい」とお命じになった神は、イスラエルの民が約束の地に定住後、預言者を通して更に詳しく命じられます。

「畑の境目ぎりぎりまで刈るな。落ち穂も拾うな。畑に忘れた束を、取りに戻るな。オリーブの木を二度揺するな。残ったそれらのものは、みなし子と、異国人とやもめのものとなる」

「旅人を懇ろにもてなすように。あなたたちもかつては旅人だったではないか」

「みなし子を正しく扱い、やもめの訴えを守るように」

「みなし子とやもめ」という言葉で表現される、小さくされた人、社会の片隅に置かれ、人々の関心の外に置かれた人を放っておいて、捧げる礼拝や祈りや供え物などは神にとって無意味であり、目を背けたくなると神はいわれます。

聖パウロが、異邦人への宣教が自分に与えられた使命であると自覚して出発するとき、「貧しい人々を省みること」が勧められました。

聖書の中に、それぞれの時代の状況を踏まえた表現で、まだ声にな

っていない“叫び”もあること、それを聞くように教えられます。“叫び”と表現されていますが、「叫ぶ人はまだ恵まれている。叫ぶことすらできない人がある」というアンケートがあります。叫ぶことのできない人の最たる者は子どもたちです。例えば夫婦間のトラブルで“叫び”をあげても、その陰で小さくなっている子どもたちは問題のらち外にあるとアンケートは指摘します。今日の学校や家庭での教育を危惧するものも多くあります。自分のことに強い関心を持っていると、“叫び”を聞き漏らします。「叫びを聞こう」と呼び掛けることは教会の大事な使命です。今もこれからも「叫びを聞こう」と呼び掛けるでしょう。

すべてにおいてすべてとなる教会

キリストから受けた使命を自覚した教会は、「小さな人」「貧しい人」「みなし子とやもめ」、つまり“叫び”をあげている人を忘れないだけでなく、自分自身「小さな人」になってしまった多くの人をもっています。神は聖霊を通して一人ひとりをそれぞれの場に導かれます。聖パウロは「すべてにおいてすべてとなる」という表現で、遣わされている場を見渡します。そして、どの場にあっても「キリストの心を心とせよ…」で始まる勧め、「本性として神であったのに、神と等しいことを固持しようとせず、却って奴隷の姿をとり、自分を無にされたキリスト」の姿を思い起こさせ、叫ぶ人も叫びを聞く人も同列にあることを心するよう戒めます。言葉の足りなさを自覚し、誤解を恐れずにいわせていただければ、言葉を持たない人(=infans)が「言葉」を持ち始め、沈黙していた人が語り始めるとき、その発言で叫んでいる人と自分は違う座標にあると思いがちな、人間の弱さを修正して欲しいと思いますし、先にあげたアンケートは、大切なことを思い起こさせる貴重な提言と喜んでいきます。

詩 編 40：17—18

神よ、
あなたを求めらるすべての人は、
あなたのうちにあつて喜び楽しみ、
救いの力を とうとぶ人は、
「神は偉大なかた」と いつもたたえる。
わたしは弱く貧しい者、
主は わたしを心に留めてくださる。
あなたは わたしの助け、救い主。
神よ、わたしを救いに急いでください。



ただで受けたのだから、ただで与えなさい

You received without paying give without pay

目 次

はじめに	
共感の場…教会のオアシス	193
1 こころを病んで	
閉ざされて、のたうちまわり… “叫び”	197
2 問われる親子	
加害者になってしまう親たち	200
3 知的障害者の親	
何で自分たちに、この子は不憫だ	203
4 高齢社会	
不安に包まれて	205
5 揺らぐ家族	
愛が破綻したとき	207
6 肉親の死	
死 別	211
7 “叫び”あれこれ	
毎日を生きていくとは	213
8 教会	
イエス・キリストの近くにいるさまざまな	
貧しい人々の姿はどこに	216

最上のわざ

この世の最上のわざは何？

楽しい心で年をとり、

働きたいけれども休み、

しゃべりたいけれども黙り、

失望しそうなときに希望し、

従順に、平静に、おのれの十字架をになう——。

若者が元気いっぱい神の道をあゆむのを見ても、ねたまず、

人のために働くよりも、けんきよに人の世話になり、

弱って、もはや人のために役だたずとも、親切で柔和であること——。

老いの重荷は神の賜物。

古びた心に、これで最後のみがきをかける。まことのふるさとへ行くために——。

おのれをこの世につなぐくさを少しづつはずしていくのは、真にえらい仕事——。

こうして何もできなくなれば、それをけんそんに承諾するのだ。

神は最後にいちばんよい仕事を残してくださる。それは祈りだ——。

手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。

愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために——。

すべてをなし終えたら、臨終の床に神の声をきくだろう。

「来よ、わが友よ、われなんじを見捨てじ」と——。

共感の場…教会のオアシス

東京教区司祭 西川哲彌

昨年の今頃、2001年『叫びとはなにか』をお届けしました。お読み頂いた方の中に、この小冊子の末尾に挿入されているアンケートに答えてくださった方が百数十名いらっしゃいます。アンケートは、大きく二つに分かれています。ひとつは、この小冊子を取り上げていることへの感想や意見を書く欄、もうひとつは、ご自身の“叫び”を書く欄です。ある方は一行だけ、ある方は所定の欄では書き切れないので、用紙の裏にびっしりと書いておられます。

アンケートの回答は、小冊子が届けられた直後から、約半年、カリタスジャパンの事務局に届けられます。そして、私たち『叫び』の編集にたずさわっているものは、アンケートの回答を心を込めて読ませていただいております。その中から検討を重ねて、「カリタスジャパンニュース」に掲載したり、小冊子に載せてお届けしています。

『叫び』が届くまで

この小冊子は、毎年「灰の水曜日」前後に、教会に届けられます。つまりこの小冊子は教会を経由して読者の手に届けられる仕組みになっています。読んでくださる方には、教会にきている方、たまたま教会を訪れた方、友人や知り合いの方から『叫び』を紹介された方など、いろんな方がおられます。

『叫び』を始めた時に比べ、深まってきていると思うし、続けて欲しい。教会は、まずこのように苦しんでいる人が神の救いを求めて集まったのだから、苦しみを分かち合い、救いのために助ける人になることは、本来の使命であると思う。教会の中で、“叫び”を上げる

(分かち合う)機会があまりないので、いい機会になっている」(女性 39才)という感想が寄せられています。

教会にはあふれるほどの印刷物が集まってきます。郵送されるものもあれば、司祭や信徒、修道者、一般の方々から届けられるものもあります。プリント類の展示場みたいな教会の入口に小冊子『叫び』も置かれています。

教会はどういうところか

先ほどの感想に「教会はまず、このように苦しんでいる人が神の救いを求めて集まったのだから、苦しみを分かち合い、救いのために助ける人になることは、本来の使命であると思う」と書かれていました。

教会は、確かに「神の救いを求め」「苦しみを分かち合うところ」です。それが「本来の使命」なのです。しかしながら、現実にはそうになっていないのも事実です。あるべき姿とそうになっていない現実の中で、つまずき、苦しみ、絶望しています。それが“叫び”として届けられます。

ある方は「教会のマイナス面ばかりが強調されているが、教会にはその何十倍、何百倍のプラス面があるのです」(男性 58才)と書いておられました。暗い話ばかりが載せられているので読みたくないという方もおられるそうです。確かに教会にはいい話がたくさんあります。それを分かち合って、生きる力にしている方もたくさんいるからこそ、教会が成り立っているのです。しかし、どこか臭いものにはフタをするような傾きがあり、それが、教会の戸をたたく人に失望を与えているのも事実です。

教会について、その本質をついた言葉があります。「教会は立派な人、健康な人、道徳堅固な人だけの集まりではありません。むしろ、弱い人、病んでいる人、まちがいを犯す人、罪人が含まれる集団です。それはまさにイエス・キリストの周りに集まった貧しい人々の群れで

す」(東京大司教岡田武夫著、冊子『新しい一步』)

共感できること

いわゆるいい話や喜びのできごととはつい話したくなるものです。またそれを聞いて、ホッとすることがあります。しかし、それが「痛み」や「苦しみ」の話になると、事は一変します。本当は、もっとも共感し分かち合えるはずなのに、そうはいかないのです。「痛み」や「苦しみ」については、はじめからわかってもらえないという感情が働くと、同情をかうのもいやだから、つい隠してしまいがちです。一番話したい、ほんの少しでもわかってもらいたいと思っているにもかかわらず、話す相手を選び、話すことを遠慮してしまう、これが現実です。

そんな中に『叫び』が置かれている、といっても過言ではありません。この『叫び』シリーズが、これまで教会でタブーとされてきたことを思い切って取り上げているので、その姿勢に励まされて書いたという意見も多く寄せられています。

「こんなことを書いてもどうせ取り上げてはもらえないとあきらめていました。取り上げていただいただけでも救われたような気がします」(女性 46才)という意見には逆に励まされました。マンネリ化が指摘され、別のテーマで編集していくべきだという声が大きいにもかかわらず、寄せられたアンケートを載せていこうというところに落ち着く根拠は、案外そんなところにあるのかもしれない。

もっと“叫び”を

教えたり勧めたりが大半を占める教会の中で、“聴く”態度に徹する“叫び”は、貴重に違いありません。しかし、本当に叫びたい人が叫んでいるかという問いかけには言葉を失ってしまいます。本当に苦しんでいる人が叫ぶ場を持っているか、というと、そうではない、といわざるをえません。

あいかわらず、教会は“叫び”に耳を閉ざしているのです。知的ハンディを持っている人、やむをえず故国を離れて日本で生活している人、精神的に不安定に苦しめられている人、難病で死にさらされている人などの“叫び”はどこに届いているのだろうか。それだけではない、学校でも家庭でも職場でも地域でも聞き届けられない“叫び”が渦を巻いています。

全ての“叫び”を聴け、というのではありません。私たちは、“叫び”に耳を傾け、そのために命を捧げた方を手本にいただいています。それはキリストです。彼は、愛することは聴くことだ、と身をもって示しました。微力ながら私たちがせめて示せることはキリストの姿勢に学ぶことです。近づいて身をかがめ、全身を耳にして聴く。泣く人と共に泣き、喜ぶ人と共に喜ぶ姿勢。これがキリストの姿勢でした。

“叫ぶ”教会

教会は“叫び”を聴くだけではありません。“叫ぶ”のも教会の使命です。聴くことに慣れていない人、聴くことが勤めのようになっている人は、ついつい自分が“叫ぶ”のを忘れてしまいがちです。司祭や修道者、ものわがりのよい父親・母親は、ともすると、ただただ聴く側にまわってしまいます。しかし、聴くだけであってはなりません。必ず“叫び”があるはずで、その“叫び”は貴重です。

また、教会に属し、教会の一員として、常に教会を新しくしていくために、“叫ぶ”ことができない人に代わって“叫ぶ”ことも大切な使命です。しばしば、厳しさの渦中にある人は無言です。口を開く余裕すらないのが現実です。口を開けない人の口になっていくことは、私たちに課せられた課題です。“叫ぶ”教会こそが、“叫び”を聴く教会の本当の姿です。

1 こころを病んで

閉ざされて、のたうちまわり… “叫び”

何も考えずに眠りたい

夜眠れないほど苦しいことはありません。私は70代に入ったばかりですが、20代で胸を病み、薬や安静療法で治ったのですが、その5年の間、お付き合いしていた恋人は家人の反対で去り、病気と闘うだけでも苦しい青春時代でした。結婚まで決めた人にふられ、眠れぬ夜が続いて何度自殺しようと思ったかしれません。その時の不眠症が今も続いていて、今度は眠ることが罪であるかのような精神状態で、夜がくるのが恐ろしいのです。

日中は普通の生活をしていますから、周囲の人は私の苦しみに気づかないでしょうが、安定剤や睡眠薬を飲んでも眠れない毎日は、本当に地獄です。寝る前に教会関係の本を読んで、一切を神にゆだねて眠ろうと思っても、悪魔は私に「眠るな」「眠るな」という。いつでも自分が眠りたい時、自由に何も考えずに充分睡眠をとっていいんだよ、という何か、強い強いメッセージがほしいのです。（女性 71才）

福祉施設を解雇され、精神科に

私はうつ病と自律神経失調で精神科に入院しています。原因は「1年契約」という名の下での解雇です。表向きの理由は人員削減であるとの主張ですが、新しく臨時職員を雇っているのですから、話が完全にくい違っています。

その勤め先は重度の知的障害者更生施設。日勤で朝7時から夜7時。定時に帰ったことはなく、休憩もほとんどとれず、夜勤も0時から翌朝10時。職員の数が少なく、最重度の人たちのケアを入居者12人に対して職員2人ですというハードさ。関西の福祉業界でも大評判の悪い施設です。でも、何かしようと努力し、腰を痛めながら働いたのに

…「必要ない」「使いものにならない」。だから捨てる。そんな日本の福祉に腹を立てても、私ひとりの力ではどうにもなりません。

そんな中、何もかも悪いほうに考え、出勤できなくなり、駅のホームで倒れ、救急車で運ばれました。入院中、施設の方からは面会どころか連絡すらありません。正直、何も信じる気もなければ、自信もないし、愛し愛される価値のない私とっていました。死ぬしかないと思っていました。しかし、同じ病いで苦しむ同室の女性に支えられ少しだけ“生きようかな”と思えるようになりました。

全て、神の計画と考えたほうが救われるのでしょうか。退院は近い。まだ係争中で相手は謝罪しない。むなしい日々が続く。人を癒すどころか、簡単に人を捨て、殺す日本の福祉社会。私には薄っぺらい金メッキにしか見えないのです。
(女性 31才)

職場のイジメが原因で精神科に

私は30年間勤めていたカトリック系の知的障害者施設で、同僚や部下からイジメに合い、無視され、5年間精神神経科に通ったが、ついに退職に追いこまれた。特にカトリック信者の女性先輩から無視され続けたことがつらかった。

発端は今から15年程前、前任課長が定年退職し、自分が課長となった時だ。立場が同等の時には何も感じなかったことも、上下の関係になると一変するというのを初めて思い知らされた。イジメっ子の大將は、快活で立派に見える信者の中年女性。その取り巻き連中に私の部下となった中年男性数名と出入り業者1名。部下となった者も人の子の親。家に帰れば良きパパたち。信者の女性も毎週ミサに与り、一見普通の信者さん。しかし、仕事の中で上司となった私を無視するという行為は、「仕事をしない」ということとイコールなのです。

今、振り返ってみると、随分だらしない課長だったなと思うが、金縛りに合ったような、マインドコントロール状態にあったような変な感じだ。しかし、仕事は外からみれば、しっかりこなしていた。やる

ほうは気がつかないかもしれないが、疎外されるということは本当につらい。外傷があるわけではないから、ひとりでじっと耐えなければならぬし、中年の男では泣いてもだれも慰めてもくれない。病気になるということは、そこしか逃げ場がないということかも知れない。そしてもっと進めば自殺ということになるのかも知れないが、私の場合は、家族の祈りと良い神経科医と、退職という収入源を断ったことが治癒につながったのだ。収入源を断つということには覚悟がいることは確かだが、時には必要なことだと思う。 (男性 61才)

加害者となってしまう親たち

母から受け継いだ重たい荷物

眠れない夜、なにげなく手にとって読み始めたこの本に自分の心のモヤモヤをぶつけてみました。特に気負って書いたのでもなく、自分の中に幸せの遺伝子がないのではないかと常日頃思っていたので、こういう不幸もあるのだ、としみじみ感じ不幸感にひたっています。

私は8人兄弟（男2人女6人）の次女として生まれました。両親はとても仲が悪く年中夫婦ゲンカが絶えないのに、どうして次々と子どもが生まれるのかが不思議でした。父はひどいケチで、母は浪費家でした。学校の行事があるたびにお金のことで夫婦ゲンカが繰り返されます。

母はとてもかわいそうな生い立ちで、祖母は3才の時に母を親類に預け、その弟だけをかわいがって育てていました。しかし、その弟が後に死亡。母は親類の家をたらい回しにされ、いつも他人におびえながらビクビクと生きてきたそうです。戦争中も爆弾の嵐の中を水くみにやらされたり、養母に虐待されたり、生まれてから一度も幸せを感じたことなく大人になり、父とは見合いで無理やり結婚させられたとのこと。小学校もまともに出ていない母は学歴コンプレックスに悩まされ、私たち子どもに対しては、「親をバカにして！自分たちのほうがエライと思っているのでしょ！」が口グセ。私は毎日毎日お金の心配をし、父母が離婚してみなし子になるんじゃないかと心配し、家事を手伝い、子守りをし、母を慰め、早く大人になるのを待ち望みました。

高校一年の時、プロテスタント教会に導かれました。そこは私が今まで全く知らなかった別世界でした。まことに神の愛と平安に満たされていました。私はそこで生まれ変わりの経験をしました。聖書を読

み、祈り、交わりをし、それはそれは楽しい毎日でした。いろいろあって後にカトリック信者の夫と結婚しました。

私も改宗してカトリック信者になりました。でもそれから聖書を読まなくなりました。祈らなくなりました。信仰的な話もしなくなりました。私はカトリックに改宗して信仰を失ったと思っていましたが、ある時気がつきました。それは夫の前で私のメッキがはがれ落ちただけだと。彼は私が本来信者とはこうあるべき姿だ！と思うようなお手本のような信者です。まさしく清く正しく美しいのです。彼の前で私はみごとにバケの皮をはがされ、元の姿に戻りました。

私は母から受け継いだ荷物をしょいこんでしまった。私は今、激しい虚無感とうつ状態と戦っています。毎日、一日をこの重い荷物を引きずりながら生きるのに精一杯です。子どもを育てる喜びは小さく、心配は大きく、与える影響を考えるとまた心配心配の連続です。

一体私は何を心配しているのでしょうか。何が恐いのだ。得体の知れない不安感にさいなまされます。私に心から安心できる時はあるのでしょうか。本当に生きている間、天国を味わうことはないのでしょうか。私の心からの“叫び”。平安を下さい。 (女性 45才)

能力も学歴もない私

息子から「幼児虐待者め」と殴られました。何の能力もない、二人の子どもの母親である私を嫌がっている。自分の学歴のなさによって取り返そうと勉強を強要したせいと思うが、私の性格にかなりの欠陥があると思うようになったことがらが続いた。

(女性 65才)

不登校の娘への責任

不登校の娘の苦しみについていくことができずにいる、情けない母だ。娘の不登校に多少とも責任があるのに、弱い母でもあります。教会にこの魂の“叫び”を導いてくれる人を求めています、今の小教

区ではこの“叫び”に応えられるものがないからこそ、この『叫び』が、改革をしようとしていると思う。 (女性 39才)

母の罵倒におびえて

私の母は若くして信者になり、教会関係の福祉施設で働いていました。こちらに来てから父と結婚し、やがて私と妹が生まれました。が、父は私が4、5才の頃に亡くなり、それから母は私と妹の3人で何とかここまでできました。物心つく頃から、私は母におびえて暮らしていました。母は何か少しでも私たちがいいつけに逆らったりすると、遠慮なく殴りました。あらん限り、罵倒することもありました。本人は「しつけ」のつもりだったのですが、幼い私には単なる恐怖でしかありませんでした。

それは今も心の傷として残っていますし、今も続いています。私がいわれたことの意味がわからないとみてとるや「お前は動物のように頭が悪い」と、平気で口にします。

その姿を20数年もの間見続けてきたせいでしょうか、信者としての母の態度や、言動に私は不信感を覚えます。 (女性 25才)

何で自分たちに、この子は不憫だ

私の長男は、現在20才。自閉的情緒障害を持っている。長男は、1才になっても言葉が出なかった。「あれ！」と思ったが、そんなに深刻には考えなかった。そのうち言葉が出るようになるだろうと考えていた。就園年令（満3才）になったので、カトリックの幼稚園に入園した。集団の中で他の園児と少し違うところがあるのではないかと感じるようになった。病院で診てもらい、園長の勧めもあり、ある小学校の「障害児クラス」に通った。その結果、情緒に障害があることがわかった。

私は、以前、ある施設で看護婦として働いていたことがある。その施設で、障害を持っている子どもを見ていたので、障害を持っている子どもについて少しは知っているはずだったが、自分の子どもが障害を持っていることをなかなか認めたくなかった。しかし、まわり子どもと違うことは、年月がたつにつれ明らかになった。そこで、発達障害や情緒障害の子どもの訓練をしている病院にも通うようになった。ところが、病院の先生、訓練や指導の先生方からいろいろな情報を得ても、どうしたらよいのか具体的に教えてくれるところはなかった。私たちは手探りで長男に接していくしか方法はなかった。

その日その日を生きることが精一杯で、長男をいただいたことに感謝する心境にはなれなかった。ただひとつ救いになったのは、同じような障害を持っている子どもの母親たちとの交流であった。同じ状況にある母親たちといると、子育ての苦しみや喜びを分かち合うことができたからである。

小学校の入学が近づいたとき、市の教育委員会からは養護学校へ入学することをすすめられたが、同じ障害を持っている親たちのアドバ

イスもあり、普通校への入学を希望した。教育委員会や学校との何回もの相談の結果、必要ときには家族が学校へ出向き、世話をするという条件で、やっと普通校への入学が許された。教育の現場では、普通校へ障害児を受け入れる体制が整っていないため、入学を断ることがほとんどだった。事故でも起こったら責任問題になることを恐れていた。

長男は、小学5～6年生の頃にやっと日常生活に必要な単語がいえようになったが、知的に重度の障害を持っていることがはっきりした。親たちの中には、クラス内に障害児がいることを歓迎しない人もいたが、同級生たちはよく面倒をみてくれ、クラスの一員として、当たり前前に受け入れてくれた。

中学校からは、長男の成長や発達をみながら、養護学校へ進み、現在は、私が送り迎えをして、障害者施設内の作業所で軽作業をしながら、生活力を身につけるために毎日頑張っている。

いろいろな困難にあうと、どうしたらよいか迷うこともあった。そんな時、いろいろな情報をできるだけ多くの人から集めて、一番良いと思うことを選んで実行してきたし、今もそうしている。

長男の下に二人の男の子をさずかった。現在16才と11才である。長男に手がかかるので、二人の弟にはあまり手をかけることができなかったかもしれないが、同居している養父母にも助けられ、弟たちは長男のことをよく理解し受け入れてくれるので、本当に助かっている。

だが、長男の将来を思うと、不安もある。日常生活の身の回りのことはできるのだが、親が亡くなった後、二人の弟に兄の面倒を全面的に頼むのは難しいかもしれない。おそらく、どこかの施設にお世話になるのがいいのだろう。

しかし、心配しても先はみえてこないなので、私自身、今やるべきことを前向きにやっっていこうと思い、現在、今までと違った新しい世界で、私の視野を広げてくれる重度身体障害者の作業所で働いている。

(女性 年令不詳)

不安に包まれて

明治生まれの母が教理を勉強し洗礼を受け、その後、母の感化もあり、厳格な父も洗礼を受け、私たち8人の子どもは皆、幼児洗礼でした。私は日本がまさに太平洋戦争に突入しようとしていた、物資の乏しい何かと我慢を強いられる時代に生まれました。

私が胎内にいた時、母が脊髄カリエスと診断され（結局、誤診）体調は良くなく、当時としては高価なコルセットを着用、出産は母親の命が危険だといわれて墮胎を勧められたが、神父様からの励ましと、母自身の決意でこの世に生を受けました。

私は幼い時から病弱で3、4回医者にも見放され生死をさまよい、また長じていくうちに耳に異常をきたし、具合が悪く通院するようになりました。

年頃になってから耳の病気が原因で、職場で急に目まいと吐き気に襲われ7～8時間の手術を受けましたが、この時に片方の聴力を失いました。それでも耳カスが固まるのは治らず、固まった耳カスを取ると耳の奥の方が空洞になったように感じられ、冷たい風が入ると舌の奥がしびれます。それ以来、ずっと私が生ある限り通院しなくてはいけなくなりました。副作用もともない不眠症に悩まされ、年に2～3回体調を崩しています。

病弱で聴力を失っている私を、母は83歳の生を閉じるまで、また胎内にいた時から私を心配してくれた神父様も不憫に思ってくれ、私も母も「結婚できないだろう」と思っていました。縁あって東北の他県に嫁ぐことになりました。生まれ育った土地を離れて、見知らぬ土地での生活は習慣が違うというだけでも大変です。私はカトリック信者ですが、ここでは信者であることは隠すつもりでなくても、口に出

す雰囲気はありませんでした。自分の健康状態や、家族の中で私1人が信者であるという理由で、おおっぴらには教会にもなかなか行けませんでした。心身共に苦しい時は子どもを背負って隠れて教会に行ったこともあります。

戦後の混乱期、そして経済成長期を共に歩んだ主人は18年前に49才で急逝しました。二人の子どもを抱えての生活は大変でしたがお墓を建立しました。主人は仏教徒で、お寺の寄進の依頼は多く、いろいろお金がかかるので、遺族年金で生活している私には大きな負担になります。教会維持費も本当に少額しかできません。お寺と教会と二重の出費で、私の胸はチクチク痛みます。働きたくても職はなく、私たちの子どもの頃と違って、少子化でもお金のかかる時代になりました。

子どもが独立するようになり、体調が良ければ大祝日にはミサにあずかるようになり、この頃は孫にも手が掛からなくなったので、自分自身のためにミサに行けるようになりました。今、三世帯家族の中では、たったひとりのカトリック信者なので、毎日、仏壇の前で十字をきって祈っています。

悩みと叫びを持つ日々の生活の中ではありますが、そろそろお墓に入ることが心配になる年令になってきました。先日教会のミサの後にお墓のことが話題になり、神父様が「皆同じ墓に入れます」といわれましたが、家族全員が信者の場合はよしとしても、私のようにひとりだけクリスチャンの場合は…と神父様に聞いたところ「お寺の和尚に聞いて下さい」といわれました。まだお寺には聞いていませんが、良い返事はもらえないような気がします。そういう場合はどうなるのかなあとふっと思うことがあります。私には戒名は必要ないし、子どもには私はカトリック信者で霊名があるから…といっても理解していません。私のことを不憫に思ってくれた故郷の父母の墓に少し入れてもらって、後は散骨かなあと、漠然と考えることがあります（分骨はいろいろ面倒があるみたいで）。
(女性 61才)

愛が破綻したとき

身も心もやせ細り

私は子どもが生まれなかったために36才で離婚のやむなきにいたりしました。当時は二人とも国家公務員として仲良く出勤しておりましたが、主人の転勤で単身赴任が二人の仲を割く結果となりました。私も転勤を希望して同居可能となった時は既に遅し、職場の独身の女性とねんごろになり彼女の嘆きが私の耳にも入ってきたのです。私は身も心もやせ細り、呼吸困難になる程の悲嘆の明け暮れで、毎朝カーテンを開く力もない程気力が落ちていたことを今改めて思い出します。主人は「自分に子どもをつくる能力があるのか試したかった」といって泣きました。結婚7年目のできごとです。

あれから36年も経過してしまいました。生きる力を与えてくれる信仰と趣味としての茶道を支えとして生きてきました。私の場合は“叫び”ではなく、神が与えて下さった道を踏み外さないよう歩むのみなのです。
(女性 73才)

切れぬ女性関係

夫の女性関係に悩む友人に「離婚はお子さんが犠牲になるだけだから」といつも思い留まらせ、教会に紹介し、その方は洗礼のお恵みを頂きました。しかし妻の洗礼を立派な紳士として祝ってくれた夫が変わることなく、女性関係が切れぬまま、素知らぬ顔でたまたま帰宅することを知り、友人の心の痛みを思い、裏切られた思いで私の心も怒りで一杯になります。ムラムラと憎しみや怒り、さげすみがわいてきて鏡で自分の顔も見られません。
(女性 76才)

「裁きより、いつくしみを」未婚の母の思い

私は幼児洗礼を受けましたが、中学生のころから特に信仰を否定したわけではありませんが、ミサに行かなくなりました。結局、大学を出て未婚の母となりましたが、二人の子供に洗礼を受けさせてやりたいとは思っていました。ある夏、ふと教会に行き二人の子どもを連れてミサに通っていました。主任司祭は私の事情を知ってか知らずか、子どもに洗礼、初聖体を授けて下さいました。私は子どもの洗礼はお恵みだと思っています。

さて、主任司祭もつきつぎ代わり、3人目の神父様にわが家の事情をお話ししたところ、子どもの洗礼は適切ではなかったような言葉をいわれました。私はそれでも神のお恵みと思っていますが…。

「どんな罪でも許される」のですから、愛に傷つき、ミサを必要としている人々を教会は明確に受け入れて欲しいと思います。教会法というものは、貧しくされた者にしっかり配慮し、補うシステムを持っているのでしょうか。全く教会法を知らない者ですが、このような思いを持ちました。

(女性 50才)

離婚者は再婚できないのか

私は近く洗礼を受ける求道者です。私が結婚を考えて付き合っている人は離婚者であり、さらに他の宗教の信徒です。彼はカトリックや神について理解してくれていますが、カトリックでは再婚を認めていないので困っています。先日の聖書研究会でマタイの5：31をやったのですが、神父様の意見もやはりきびしいもので、再婚は教会では認めないとのことでした。なので神父様にも相談できず、彼とは良くも悪くも神様に全てを委ねようと話しています。しかし、もし私がこの彼と結婚することになった時、教会に結婚を認めてもらえない場合でもつらいです。

(女性 24才)

夫から逃れて

私は幼児洗礼の信者で、夫が結婚講座を受けてくれたことで結婚を決意しました。結婚当初は理解ある夫で4人の子どもに恵まれました。勤勉な夫にロンドン赴任の辞令が出されました。生活環境が全く変わってしまう外地での生活に不安が募りつつも、夫の昇進に喜びをともにするよき妻に徹することを神様に祈りつつ、ロンドン生活を決意したのです。

ロンドン生活はわずらわしさがいいかわりに、語学の能力がない私はどうしても引っ込み思案になりがちです。夫は、反対に、洗練されたロンドン紳士、淑女との交流の場に私を連れて行きます。しかし、回を重ねるごとに次第に私の態度が気に入らなくなっていくようでした。家庭に戻ると、にらみつけたり、時には嘔み付かれるような恐怖をもちました。

陰惨な雰囲気子どもたちは気兼ねして、部屋に早めに戻ります。夫は家庭では、疲れもあるのでしょう、ほとんど口をきかなくなりしました。集まりの案内状で顔を叩かれたこともありました。口にはいえない陰湿な、無礼な行為は夜の生活にもあります。こういう生活の中で、私はただ夫の顔色をうかがい、声をかけることをはばかりになりました。

ロンドンの生活になってからは、自分のことしか考えなくなり、私の夫には済まないという気持ちなど理解を示してくれません。ロンドン生活に慣れた子どもたちは家にいることも少なくなり、私ひとりごとに残されていきました。結局、夫の顔色を盗んで実家の母に電話をして、泣くことが私のなぐさめになりました。

そんな私を心配して、母は帰国することを勧めました。ヨーロッパへの外国の友人夫婦との旅行の話があったときに、私は心労で風邪を理由に断りました。その間に、日本にひとり逃げ帰り、実家に飛び込みました。私がロンドンに戻らぬまま1年が経過して、5年の任期を終え、帰国した夫とは会っていません。子どもたちも私には、会い

にきますが、生活は別です。

今、離婚の手続きに入っています。弁護士は、夫の陰湿、冷徹な人柄にあきれています。

最近、私はロンドンの忍従の生活によって、言葉を失ない、感動を失ない、何をする気力も失なっています。考えることもできません。ただ、離婚したい。心の傷はそれでしか癒されないのです。

離婚の掟で私は縛られています。この掟から私が解放されるということがあるのでしょうか。助けて下さい。誰かに相談すると私は心身喪失といわれます。許して下さい。離婚したい。（女性 年令不詳）

死 別

つい先日も新宿の雑居ビルの火災で、40人もの尊い命が失われたニュースを見ていて、2年前の私の衝撃的な体験を思い出さざるを得ませんでした。

ニュースで毎日、火災のことを聞いていますが、他人ごとのように受け止めていた私でしたが、2年前の3月25日午前10時ころ、1本の電話が鳴り、私にとっての悲劇が始まりました。

前の晩、春休みに入った孫（当時14才、4月より中3になろうとしているところ）は、夜遅く訪ねて来た友人に、食事をしていないというので、チャーハンを作って食べさせていました。わが家は家庭的に恵まれない子どもが、たびたびきて食事をしたり泊まったりしています。

男の子だけれど料理が好きなので、友人がきた時、食事の時間が過ぎていると、私の手をわずらわすことなく自分で料理をして、友人に食べさせるマメな子でした。

食事をとると、明日から春休みなので、友人宅に泊りに行くという。母親に許してもらっているということなので、私も快く送り出したのでした。

次の日の昼ごろ、警察からの電話で、友人宅の火事にお宅の太郎君（仮名）がまかれたかもしれないとの連絡。太郎の弟と「まさかお兄ちゃんではないよね」と、二人で、お兄ちゃんでないことを祈りながら待っていました。弟は待ちくたびれて眠ってしまったところに、火事で命を失ったのは太郎だと知らされましたが、あまり太郎が死んだという実感がなかったのです。

すべてがわかったのが、一夜明けた時でした。この孫は、母親の家

庭の事情もあって、息子のように育ててきた子どもだったので、その晩、私は気が変になり、家族を悩ませるほどの行動をとっていました。愛する娘の子を失ってしまったこと、娘の悲しみを思うと、正気ではいられなかったのだと思います。

娘の身を案じながらも、葬儀が終っても人に会うのが嫌で、やさしい言葉は受けたくない、何かあってもぼーっとしている。しっかりしなくてはと思っても、どこかおかしい。1ヶ月くらい家に閉じこもっていましたが、でもそんな時、無性にミサにあずかりたくなって、ご聖体をいただきたい、それは今まで感じたことのない渴望だったので。教会に行くと、多くの人と顔を合わせる、それは苦痛以外の何ものでもない。そんな時、心を開ける友人があり、早朝ミサならごく少数の人たちしか顔を合わせることがないので、無理をお願いして車を出していただき、ミサにあずかることができました。不思議なことに、ミサにあずかりご聖体をいただいた私は、それから気持ちが落ち着き、一日一日と悲しみから立ち上がることができました。

カウンセラーとして、他人の悲しみ、苦しみを受け止めている日々ですが、自分のこの悲しい体験が周りの人たちの苦しみを理解するのに、少しは役に立っている、主は無駄なことにはなされないのだと、2年たった今感じるできるようになりました。

笑顔の美しい孫の写真に、毎日、ありがとうをいっています。

死だけが喪失感ではないと思います。自分の人格を根こそぎ否定された時とか、さまざまな場面がありますが、私はそんな時、みことばの中に「主がいつもあなたのそばにおられる」を頼りに、生きてきたように思います。

「理解されるよりも、理解することを」フランシスコの祈りを、自分のものとするのは、いつのことかと考えてしまいます。

(女性 65才)

毎日を生きていくとは

難聴

私は耳鳴りと聞こえの悪さで困っています。ミサ中の神父様のお説教は全く聞こえません。

ピンマイクを使うようにヨゼフ会の人に申し入れましたが、神父様が使わないそうです。私の他に、高齢者に難聴の人はたくさんいます。司教様から何か伝達してほしいです。なお、私は補聴器を使うことのできない外耳道です。
(女性 77才)

障害は恵み

私は生まれつきの右手不自由、メニエール氏病の手遅れで、右耳は駄目、左耳は少しは聞こえますが、外部からの正常音は全くわからない程の不快な耳鳴りが伴い、それ故に足許のフラつき、手足の震えなどがあります。高齢の障害者ですが、“叫び”のないことを幸せと思い、むしろ障害をお恵みと思い、これがあるから神様を知ることを幸いとして生かさせていただいております。
(女性 81才)

忘れられない夫の言葉の暴力

一番心と体の疲れている時（結婚30年目）の夫から受けた取り返しにくい位の言葉の暴力。でも自分の意志で、主の前で約束をした人なので、苦しみ苦しみ抜いて、忘れられはしないけど、受け入れて、一緒に生活しています。
(女性 65才)

精神障害の子を持つて

最も苦しんでいるのは、障害（精神）を病む人ではなく、その母親でした。臨終のベッドで、やっと告白してくれた人がいます。それま

で、娘が精神病院に長く入院していることは、だれにもいわなかったのです。他の母親は、息子の精神病の苦しみを見ている間に、ご自分も落ち込んで心の病になりました。二人とも神に救いを求め、受洗し、信仰の道を歩んでいます。 (女性 77才)

過去の生活を慰めにして

私は農家に生まれ育ちました。当時日本国には地主がまだ認められていて、小作人はせっかく米を収穫しても自由にできません。日常米飯なしの生活でした。電灯もありません。身近に存在するものを工夫して使用するのでした。豊かに自由に使用のできる、太陽の光、新鮮な空気、そして水でしたから、当時日常生活が恵まれないとの思い出が私にはありません。現在は困難に遭遇しますと過去の生活を思い、心の慰めにします。そして困難への対応対処に努力いたします。

(男性 90才)

家族に顧みられない老人

私の周辺では、家族に顧みられない老人（7、80代）が見られます。個々に事情を詳しく知り得ませんが、家族の中であってひとりっきり。夜、暖房、電気も消され、洗濯を公園の水道ですする姿も、時折目にします。通りすがりに声をかけてあげるのみです。 (女性 64才)

親の介護

ちょうど10年前、主人の母を見送り、私の母を3年前に見送りました。主人の母はパーキンソン氏病で、5年間家で介護をした時、神に“叫び”をあげたことを思い出します。

仕事をしながら家で看られたことは幸いでしたが、寝たきりになってから1年あまり痴呆になって、昼と夜が反対になり、理解できなくて苦しみました。私の母の場合は、足が立たなくなって、4年位、ベッドの生活でした。一時、命が危険な状態になって、病院で緊急洗礼

を受けたことは幸いでした。二人の母の介護をして、体験したことは、自分自身の自己愛と、与えられた恵みに対する、謙虚な心の不十分を感じ、自分の弱さ、神に助けを求めなければ何もできないことを悟らせていただきました。

主人が、私が苦しんでいる時「この小さい人にしたことは、私にしたことである」というみ言葉を私に聞かせて私を力づけてくれ、娘たちも手助けしてくれて、家族で頑張れたことは幸いでした。今では、試練は恵みだと思えるようになりました。 (女性 61才)

死なせて欲しいという老人

特別養護老人ホーム、自宅介護などの寝たきりの老人、家族から見放されている人々、死なせて欲しいという人々が多い。

お金はあっても、愛されず、お荷物のように扱われている人々が多い。知られざる日本の現実。 (女性 57才)

なぜ若い人ばかり

なぜ若い人ばかり、役に立つ人ばかり云々…現実にその中にある私の思いでもあります。 (女性 59才)

老老介護

88才の親の面倒をみていて、毎日がしんどいです。 (男性 63才)

老齢は神から遠い

老齢と共に感激性も鈍化し、生き生きとした同情心がわいてこない、したがって神と遠ざかっていく感じが寂しい。 (男性 75才)

イエス・キリストの近くにいる さまざまな貧しい人々の姿はどこに

もっと教会外へ宣教させて

教会外への宣教手段を具体的に教えて欲しい。復活祭をもっと宣伝したい。婦人部はもっと外に宣教させて欲しい。外へ向けばはじめも減る!! (女性 41才)

教会が変わる…一人ひとりが変わる

教会が変わらないのに少しいらつきます。教会が変わらないというのは私たち一人ひとりが変わらないということだと思います。教会のミサに参加し、献金し、罪をおかさない生活（実際にはこのような“叫び”にも耳をかさないような状態）を良しとしている人の多いこと、これでよいのだろうかと考えてしまいます。

人が変わる、自分が変わる、本当に難しいことだと思います。しかし、変わる必要を感じない人は変わりません。 (男性 62才)

神父さま現場に降りて

まず、神父様自ら現場に降りてもらいたい。信徒たちの中心に立って、お説教ばかりしないで、人の世で一番しんどい思いをしている人たちと共に生活をして、その人たちがなぜそんな生活をしなければならないのか、理解しようと努めてくれれば、信徒も神父様に続くのでは？ (女性 57才)

視覚障害者の方を見かけない

カトリック教会では目の不自由な方を見かけません。残念です。耳の遠い方も少ないです。

心の目を持った人々も出席される教会であって下さるのを期待しています。
(女性 48才)

なぜ、教会の中で？

教会の中で、何かできることを始めていきたいと思い、少しお手伝いを始めましたが、人間関係に“叫び”を上げたい思いです。なぜ？
教会の中で？
(女性 59才)

教会の人間関係

私は今まで教会の仕事はあまりしませんでした。去年仕事をやめて少しさせていただくことができました。喜んでしていたのですが、いろいろな人間関係の難しさを知りました。

ある友人は教会の人間関係に疲れてしまって、今は何年も教会にきていません。今は私もわかるように思い、教会に行こうということができず、どうしたらよいか悩んでいます。
(女性 63才)

喜びを持って奉仕が続けられない状況です。ねたみ、しつとはずごといと実感するこの頃です。(自分の優越性を誇るために、高いポストを手に入れるために、積極的で堂々たる態度)
(女性 60才)

重荷を負っているなら教会へ

「苦しんでいる人、重荷を負っている人は教会へ」といいますが、こんなに教会の中の人々が座して、司祭たちが先頭に立って、信徒をつまづかせている現状は、教会外の人に「重荷を負っているなら教会へ」とはいえません。
(女性 56才)

心の病に教会からの救いは？

現在教会に出席しますのに教会ファッションみたいな感じがあり、私はそのことをとても悲しく思っています。教会内の空気、自由で、

温かいものを望みます。まだ洗礼を受けていない方、病める方、貧しい者が出席できない雰囲気があるようで…とても寂しく思い続けていました。

(女性 69才)

心の病を患う人たちが周囲に多く、しかも、その人たちは信者でありながら教会からも疎外されていることが、とてもつらく感じられる。

(女性 34才)

今、人が少なくなっている修道院などに、専門的な勉強をしたスタッフのいる心の病院をぜひつくって下さい。不登校、閉じこもり、うつ病、その人々が立ち直れるように支えるクリスチャンホームなど。どうぞお願いします。

(女性 68才)

教会は律法学者、ファリサイ派の集まりか

昔からクリスチャンというと、優しくて、人のために犠牲も惜しまずに、何かしてくれる人々、とのイメージがあり、むしろ私は、クリスチャンであることを社会的観念から誇りにさえしていました。教会から愛の人が誕生し、教会を通して、人間不信が直り、慰められ、癒される場の発見でもあったはずなのに『叫び』を読んで、いじめられ、白い目で見られ、何か律法学者やファリサイ派の人たちの集まりなのでしょうかと考え、悲しい思いでいっぱいになりました。

(女性 55才)

教会のフタは何のため

教会は汚いものにはフタをしているような気がします。そのために閉ざされている部分がある。それが大きく出てきた時、時にはとりかえしのつかないことに発展している面がある。日頃から安心して、心のはけ口を求められるようなものが必要ではないかと思います。

(女性 48才)

教会での司祭の悪口

公然と司祭の悪口が話されています。それも、教会の重要な地位にいる人の口からです。その悪口が、教会や信者を思って、善意から出ているものではなく、ただ自分の思うようにならない、ただそれだけ。そこら辺の井戸端会議で感情をむき出しにして、そこにいない人の悪口をいい合っている人たちと何ら変わりがないのです。つくづくがっかりしました。祖国を捨ててまで教会に尽くしている神父さんがあまりにもかわいそうです。もうその人のいる集まりには、行きたくありません。
(男性 53才)

司祭のいないところで

これからの教会を考えようと、いくつかの教会の方々が集まって、話し合う機会がありました。いくつかのグループに分かれましたが、たまたま私は、神父さまのいないグループに入っていました。テーマが決まっていたので、一応、話し合いは進んでいました。ところがひょんなことで、ある方が神父さまとシスターの批判を始めたのです。つまり、自分たちが抱えていて、自分たちが解決していかなければならないことを、神父さまとシスターのせいだといい始めたのです。誰もがそんなことじゃない、と思っていたのですが、勢いに流れてしまったのです。その集まりが終った時、がっかりしました。正直いって、教会に明日はないと思いました。
(女性 42才)

ミサは生活の中にある

日曜はミサの中でクリスチャン、ミサを離れたら世間の人、これはおかしい。現実の生活を信仰で生きていくことこそ、イエズスに従っているといえるのですし、天の国を地上に築く力にもなるはずです。その意味で、現実の苦しみ、あえぎをさらけ出すことは、分かち合い、どうすればいいのかをさがす手助けになると思います。手助けになるような具体的な方策をたてていただきたいと思います。(女性 54才)

教会は寂しくない—神さまのお恵み

家族で行くバス旅行がありました。だれを連れて行ってもいいということでしたので、思い切って、知的ハンディを持っている娘を連れて行きました。初めは、一緒に行った方もおっかなびっくりの様子でしたが、次第に慣れて、帰りにはいろんな方が娘に声を掛けて下さって、娘も大満足でした。いつも思うのですが、教会は、寂しくなるようなこともあります、さすが教会だということもしばしばあります。割合なんていえませんが、8割くらいは満足のほうです。ハイキングが終ってから何日かたって、ある人から「実は私にも同じような子がいるのです。真理ちゃん（仮名）を見ていてほっとしました。神様のお恵みをたくさんいただいております」といわれた。以前から何となく深みのある人だな、心の温かい人だな、と思っていたので、声を掛けられて「なるほど、神さまのお恵みという言葉が素直に出るような生き方をしておられるのだな」と思いました。（女性 48才）

教会に変えられる喜びがある

私は、以前人の批判ばかりをしていました。性格というか、才能というか、人のあらが見えてしかたがなかったのです。ですから、大好きだった教会にも次第におれなくなって、しばらく教会から離れていました。するといろいろなことが次から次へと起こって、生きていくのが苦しい時が続きました。ところが、よく考えてみると、一つひとつに神さまがはたらいて下さっていることがわかってきたのです。初めは、偶然か、たまたまそうなったのだろうと、たかをくくっていましたが、次第に、やはり神さまがそうして下さっていると、思わざるをえなくなったのです。今は、神さまに決して人の批判をしないようにしますので助けて下さいと祈っています。性格は変えられないもので、ちょっと気をゆるめると批判が出そうになります。その度に祈っています。本当に神さまに感謝しています。（女性 65才）

「あとがき」にかえて

合本の収録記事は、基本的には1997年から2002年にかけて刊行した『叫び』6冊を合本したのですが、『叫び』刊行後、下記の(1)(2)に留意しながらも、取材対象者にご迷惑をおかけした記事、『叫び』の趣旨の点で不相当と指摘された記事等につきましては削除いたしました。

- (1) 回答者のプライバシーにさしさわる、関係者、場所、関係事項に関する名称、氏名、住所、固有名詞等については仮名とさせていただきます。
- (2) 差別語、不快用語につきましては、厳正な検討を加えて注意をはらいましたが、回答者自身の用語、用法はそのまま使用している場合もあります。

『叫び』につきましては、毎年200通ほどの皆さまの声が寄せられました。刊行趣旨へのご意見、ご批判、ご自身の“叫び”等がございましたが、編集部スタッフ、関係者一同、皆さまの貴重な声を真摯に受けとめて編集にあたらせていただきました。

末尾ではありますが、深く感謝申し上げます、『叫び 合本』につきましても分かち合い等でご利用いただき、ご意見をお寄せいただければ幸いです。

『叫び』合本 1997－2002

2003年1月12日発行

編集人 宮原良治

発行人 池長 潤

発行所 日本カトリック司教協議会

社会福祉委員会・カリタスジャパン

☎135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

TEL 03-5632-4439 FAX 03-5632-4464

e-mail: cari-tas@fa2.so-net.ne.jp

本誌発行諸経費1冊400円のご負担にご協力をお願い申し上げます。

送金は郵便振替でいただければ幸いです。

「郵便振替番号 00170-5-95979 加入者名 カリタスジャパン」

振替の際は、通信欄に「叫び 合本」とご明記ください。



カトリック教会

カリタス ジャパン

CARITAS JAPAN

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館 TEL 03-5632-4439 FAX 03-5632-4464